日野市立図書館 ☎81-7354
1954131

昭和八年七月現在

日野町郷土記

郷土調査要項

一、郷土ノ歴史……新上　大貫、
二、郷土ノ自然
三、郷土ノ戸口……阿部、佐藤、
四、郷土ノ産業……斉藤　小斉
　1、農業
　2、商業
　3、工業
　4、水産業
　5、林業
五、交通……吉田
六、政治……飯田　本門　山上

七、財政
八、經濟
九、教育……森係　戸田
一〇、衛生……山内　横田
一一、神社……森久保　田中
一二、寺院
一三、御土民の生活……勝
一四、口碑傳説……西野　生稜
一五、名勝遺跡遺物……村上
一六、参考図書……西野　安藤
一七、御土人先覺者……佐々木

順恭堂

史

一、日野町名ノ起源

イ、此ノ地ハ高丘デ地続キ山ナリ原野デアルカラシテ上古ハ烽火台ヲ置カレタ所デアッタ。四方ガ眺望ノ地デアルカラシテ飛火野トイヒ或ハ大野トイヒ後ニハ日野ト呼ブヤウニナッタ。（武蔵名所図絵）

ロ、應永三十三年ノ頃日野中納言資朝ノ玄孫宮内資忠当所土渕庄ニ移住シタトイフコレカラ日野ノ名ガ起ッタノデアルトイフ。（武蔵風土記）

二、上古

上古ハ國府ノ所管ニ属シ、平安朝時代ニハ石川牧ニ属シテ居タ。（平安朝延喜前後ハ京都朝廷左馬寮管轄ノ牧場ニ石川牧小川牧由井牧立野牧等ガ多摩川ノ流域ニアッタ）（武蔵野地理と人史）

其後清和天皇ノ貞観元年中ニ口守郡守ニ矢拔ヲ帯ビルコトヲ許シテ口内ノ鎮撫ニ当ラシメ、後ニ世ガ政治乱レ盜賊ガ横行シタカラ豪族ハ私矢ヲ養ヒ武技ヲ鍛錬シテ自衛スルヤウニナッタ此レガ武士ノ起リデアル。

当時ノ武士ハ牧場ヲ自領シ馬ト共ニ生活シ山林ヲ馳セ習ッテ朱ルヲ知ッテ落ケルヲ知ラヌ程デアッタ從テ当代ハ武蔵ハ坂東平野ノ中心ニアリ諸川灌漑シテ地味肥エテ居タノデ口守郡守ノ土地開墾ニ便デアッタ牧場トシテモ適シテ居タカラ武士ノ生活ハ好適地デアッタノデ武蔵ノ各地ハ殆ンドコレ等ノ豪族デ埋マッタ普通是等ノ豪族ヲ称シテ武蔵七党黒武士トイフ。

三、武蔵七党武士

七党武士トハ野奚、村山、丹横山、猪股、児玉、西、ノ七党ヲ指ス、此ノ七党ノ中ニ横山党ハ八王子ノ横山町ニアリ西党ハ日奉氏トイヒ多摩川沿岸都築橘樹郡ノ西部ニ及ビ百草、平山、関戸、日野立川、由井小川辺ニ住シタモノデアル。

四、西党

西党トハ日奉氏宗頼ヲ祖トスル。宗頼ハ高魂命ノ裔日奉連ヨリ出デ、宗頼ハ武蔵ノ守トナリテ下向シ子孫ハ在廳官トナッテ郷内土渕ノ地ニ住シ合セテ此郷ヲモ食邑シタ、日奉氏食邑中ハ土渕庄徳恒郷ト称シテ多西郡ニ属シタ。西氏ノ本據ハ日野デアリ由井牧、小川牧、等ガアル宗頼ノ子孫ハコレ等ノ牧ノ別

當ヲ兼ネ家ハ富ミ一族郎党ヲ養ヒ遂ニ住人トシテ一大勢力トナツタ、
西党ノ分布ハ多ノ川ヲ中心トシテ都築橘樹両郡ニ及ビ遂ニハ全国ニモ拡マツタ、ソノ嫡
流ヲ西氏ト称シテ武蔵守宗頼ノ子孫内舎人宗親ハ平氏ニ従ヒ宗親ノ長子宗忠心
ハ西大夫ト称シテ源氏ニ属シテ日野附近ニ居住シタ 日野町ノセツ塚ニ居館址ガア
ツタ。コノ地ハ多ノ川谷地川ニ臨ミ最モ形勝ナ地デアル。又東光寺ノ薬師堂ハ宗
頼ノ建立シタノデアルト傳ヘラレテヰル。
其ノ子宗守西太郎ト称シ宗守ノ子口守、口守ノ三子職任長沼三郎ト称シ長
沼ニ住シタ、西宗守ノ弟宗貞ハ西二郎ト称シ其ノ子宗綱西貫首ト称シ
第三子ヲ上田二郎トイヒ当町ノ上田ニ住シタ。
(現在ノ上田ニハ居館址ラシキモノハナイガ多分堀之内駒形ノ谷地ノ辺ナラント云ハレル
氏ノ説アリ)
二郎ノ弟直季ハ平山ニ住シタ、ソシテ平山八郎ト称シタ、コレハ平山氏ノ祖デアル、其子
季重ハ初メ源義朝ノ家人トナリ平治ノ乱ニハ悪源太義平ニ従ツテ都芳門ニアリ
大敗ヲ辛ウシテ待賢門ノ戦ニハ熊谷次郎直実等十七騎ト重盛ノ軍ニ当ル後ニ破レテ
平山村ニ帰ツタ、治承四年頼朝挙兵ニヨリ再ビ出デテ早治川ニ一谷ニ武勲赫々
タルモノガアツタ。
(現在平山宗印寺ニ墓ガアリ 平山小学校ハ居館址デアルト云フ尚宗印寺ノ境
内ニ日奉地蔵ガアル)
西宗弘ノ長子当貞ハ駄所ト称シ其ノ孫弘綱田村三郎ト称シテ田村ヲ領有シタ
(五川氏ノ説ニヨルト田村氏ノ居館址ハ安養院寺ノ境内デアルト。)

其ノ他分族ハ出雲ノ郡伯江村　五川町等ニ住シタ、子孫ハ連綿トシテ此ノ地ニ住シタ
コノ族ハ戦国時代ニハ　出條氏ニ仕ヘ　天正十八年ニ滅亡シタ　（武蔵武士）

五、足利時代

建武中興ニヨリ足利尊氏ハ東国ノ守護トナッタ、其ノ後尊氏ハ反シテ義詮鎌倉ニアッテ本州ヲ管シタ　己ニシテ基義詮ノ弟基氏ハ関東管領トナリ本州及ビ相模ヲ領シタ、永享十一年ニ持氏ニ到ッテ亡ビ執事山内上杉ノ所管トナッタ、持氏ノ子成氏ハ再ビ本州ヲ領シタ。俄ニ上杉氏皆判キ成氏ハコレト戦コト連年遂ニハ利アラズシテ下総ノ古河ニ走ッタ、是ニ於テ山内房顕、扇谷持朝等ガ各本州分領シタ長享年中ニ持朝ノ子定正山内顕定ヲ破リ遂ニ全州ヲトッタ。此ノ時ニ当ッテ小田原ノ北條氏漸ク強大トナッテ州ノ東南ヲ蚕食シタ、両上杉氏ハ協力シテ累年コレヲ防ギ、天文十四年ニ到リ山内憲政扇谷朝定大挙兵ヲ合セテ川越城ヲ奪ヒ北條氏康ハ大イニコレヲ破ッテ決デコレヲ亡シ盡タ其ノ地ヲ併合シタ、コノ川越ノ夜軍ノ折ニ関東管領上杉氏譜代ノ大名大石源太左門定久ノミ出條氏康ニ降ッタ此ノ時ニ氏康ノ次男氏朝天文七年十月定久ノ女ニ配シテ由井原三ト称シタ永禄五年定久ニ代ッテ滝山城主トナリ後北條陸奥ノ守氏照ト改称シタ。
当時代ハ日野郷モ北條氏ノ所管ニ属シタ。
出雲小田原出條家分口ノ墳ハ林木得安ノ墓ヲ少シ日野郷ニ在シタノ文書アル。
文面ニ於当郷竹切儀被仰出候旨謂而茂一本成共切者有之付而者従類共ハリ付
ニ可被懸旨被仰出者也仍如件」　（佐藤家所蔵）

永祿十二月秋九月武田晴信が来て滝山城ヲ攻メタガ數日シテ拔クコトガ出来ナイ、ツイデ小田原城ヲ攻メタガ亦果サズニ帰口シタ、其ノ後元亀三年元八王子ノ山ニ新城ヲ築イテコヽニ転住シタ。

天正十八年ニハ豊臣氏ノ東征ガアッテ北條氏及ビ其ノ他ノ豪族ハ皆滅亡シタ。（武藏七党モ絶滅シタ）其ノ後ニ徳川氏家康関東ヲ領シ府ヲ江戸ニ開クニアヲンデ其ノ臣石見ノ守長安ニ命ジテ近郷ヲ管理サセタ。

八 徳川初期

慶長年間ニ昔希ノ府五道ヲ開クヤ日野宿ハ甲州街道ノ駅次ニ列シ夏ノ郡日野駅ト呼ンダ。

当時日野ハ日野領内ニアッタ、日野領トハ即チ夏ノ郡ノ東ニアッテ領内ニ百草、新井、下田、日野本郷、宮、石田、万願寺、日野新田、上田、中河原、堀内、連光寺、見取村、中和田、一宮、関戸、上和田、井方、落川等ガ属シテヰタ。又日野領ナルモノハ府中領、由井領、秩島領ニ境シテヰタ、然シ豊田ノ一ニハ高倉庄由井領ニ属シテヰタ。

一、豊田村ハ正保ノ頃ニハ大久保勘三郎デ文政時代マデハ子孫地頭デアリ当時幾後ハ大久保矢九郎知行シテヰタノデアル 検地ハ文禄三年九月十五日 田辺十郎右エ門 高野善次 山浦弥兵等行ッタ 此ノ頃カラ大久保氏ニ賜ハリタルモノデアルカソレハ詳カデナイ。（大久保勘三郎ノ女妙蓮ハ寛文八年ニ善生寺ヲ建立シタ コノ地ハ旧家山口家ノ地デアッタガ地頭ニ大久保ニ捧ゲタモノデアル。）

二、日野本郷ハ日野領中ノ本村デアル、寛永十四年ニ代官近山与左エ門 高室四

江戸ニ居ルコト二十年ニシテ帰リ居神羽ト改メタリ。翁ハ明治廿七年ニ没シ大昌寺ニ葬ル辭世ノ句「月雪や花にと散りしちぢ々年の思はず時のきゆる命毛」ヲ墓碑ニ刻ム。又那蔵翁ハ居翁実兄デ勝蔵トイフ 天保三年ニ生レ江戸赤坂都月庵動綱ノ門ニ入ッテ学ンダ 文久三年没シテ大昌寺ニ葬ル

辭世ノ句「七轉び七起きするてふ世の中にゆたり起きたり ゆたり起きたり」墓碑ニ刻ム

又此ノ年ノ十二月二八 全口的ニコレラガ流行シタ 日野デモ死者ノ百名余リヲ生シタト云フ

（郷土偉人伝）

八、幕末時代

イ、日野農兵

嘉永以後日野宿ニハヨタカノ農兵ガ組織サレタ。時ハ幕末デ尊王攘夷或ハ討幕ノ天下ヲアゲテ、殺伐ノ氣風ノ漲ッタ時代デアル。三十三代 代官江川英龍ハ千代田城ノ護リトシテハ八王子千人隊ノミデハ安心出来ヌ其処デ農兵ノ組織ヲ幕府ニ進言シタ。幕府モ天下ノ危機ヲ感ジテ慶應年間ニコレヲ許可シタ 依リコデ代官ハ各名主ニ命ジテ費用ヲ募リ組織セシメタ。コノ時日野宿デモ名主佐藤彦五郎ガ壮丁ヲ集メテ農兵ヲ組織シ新式ノ訓練ヲ受ケ川堤防、並ニ寺或ハ宝泉寺境内等デ大ナル人ヲ集メテ開始シタ。

代官モ春秋二回操銃術ノ指導者ヲ派遣シタ。当時ハ佐藤家ノ道場モ百姓ガ鉄ヲ持ッタ手ニ竹刀ヲ握ッテ集リ来リ武道万能時代ガ現出シタ。

2 農民暴徒鎮圧事件

コノ事件ハヨタカ農兵ノ腕試シデアル。慶應二年六月十五日 武州飯能在名栗

カラ完ク起トシテ起ツタ百姓一揆ガ暴虎ノ如ニ荒し狂ツテ小宮村地先ノ多摩川沿岸ニ現レタ。トノ急報ガ日野宿ニ出張中ノ江川代官ノ手代ノ増山莊六ノ許ニ飛ンダ。ソレトバカリ出動ハ即チマハ日野農民ニ下リ馳集ツタ者六十人 撃剣組 二十人ガ準備ヲ整ヘ名主佐藤彦五郎ヲ先頭ニ農兵旗ヲ押シ立テ折柄ノ豪雨ヲモノトモセズニ一路暴地ノ河原ヘト押シ出シタ。

時ニ暴徒ハ大旗ヲ先頭ニ鍬竹槍ヲ手ニ 木ラ貝太鼓ヲ打ち鳴ラシ、對岸ニ押シ寄セタ。

農兵ハコレヲ望見シ先ヅ腹コシラヘヲシテ、雨中敵前ノ渡河ヲ試ミ先立ツ一人ヲ出多クリニアゲレバ 農兵ノ意気益上リ 遂ニ散リ行ク暴徒ヲ追ツテ 第堂前ニ到着シ 各地ニ非常ナ歓待ヲ受ケ 日野農民ノ眞價ヲ遺憾ナク発揮シ二十四日八王子宿ニ凱旋シタ。之ガ為ニ八王子 附近ノ富豪ハ略奪カラ免レタ。

幕府ハソノ功ヲ賞シテ白銀三枚ヲ与ヘ 彦五郎 初メ源之助 後宣 手代ノ末ニ連ル マデ 苗字ヲ名乗ルコトヲ許サレタ。

薩州浪士斬 事件

薩長ノ計幕計畫ハ愈々露骨トナツテ間諜ガ頻リニ潜行シ 世間ハ薄気味悪イ空気ニ充タサレタ。 丁度此ノ時ニ薩州ノ浪士 數人 甲州城襲撃ノ為メニ八王子ニ入ルトノ陰謀ガ 江川代官ノ手代 根本慎蔵ノ耳ニ達シタ。

コノトキ 根本ハ 日野宿農兵 組頭 佐藤彦五郎ニ命ジテ之ヲ 討タシメタ。

彦五郎ハ自邸ノ道場デ 大イニ腕ヲ鍛ヘ、ソレニ佐藤勇トモ 義兄弟ノ 縁ヲ結ンデ オタトカデ勇モ 月ニ一回ハ 江戸カラ来テ 共ニ鍛ヘ 共ニ論ジタ。ソレニ両人ハ 腕

ニ祖イテモ伯仲ノ中ニアツタトフ。
佐藤ハ命ヲ受ケルヤ早速門下ノ日野勇士　佐藤喜四郎、中村半兵衛
高木吉蔵（角屋）、馬場市次郎（扇屋）、原栄蔵（玉屋）等ト鍵帷子ニ
身ヲカタメテ出動シ、十二月十五日夜半八王子盗伐勢屋旅館ニ乗込ミテ
浪士十三人ヲ見事ニ討チ捕ツタ、カ様ニシテ甲州城籠城戦ハ未然ニ防グ
コトガ出来タノデアル
コノトキニ馬場ハピストルデ即死シタトイフ。

矢勝沼ノ戦ヒ

昔布告ク威信ヲ失ヒ佐藤象二郎ハ大政ヲ奉還スベキヲ説ケバ徳川慶喜
モ深ク双外ノ情勢ヲ察シテ慶応三年十月大政ヲ奉還シタ然ルニ曾
津藩名ノ両藩ガ反シタノデ鳥羽伏見ノ戦ヒトナリタ、ソノ結果ハ薩長
方ハ利ナクシテ江戸ヘト引キ上ゲタ。官軍ハ去リ行ク昔布軍ヲ追撃シ
逆勝ノ意気盛義物凄ク東下ノ途ニアツタ。
此ノ時三河国村ノ近藤三男石四ノ五方歳三ノ一隊ハ勢ニ乗ジタ官兵ヲ待カン
トシテ、明治元年三月四十余名ヲ率ヒ甲州城ニ向ツタ。
ソノ途中ニ日野宿佐藤家ニ宿泊シタ、ソレト知ツタ日野ノ農兵三十名バカリ追ツテ
同行ヲ求メタ。コノトキ佐藤俊正ハソノ請ヲ容レ此ノ義農兵ト奉日隊十九ヲ組織シテ
コノ二隊ヲ援ケルコトヽナツタ。
一隊勝沼ニ到ルト既ニ官軍（総督参謀板垣退助）ハ甲州城ヲ奪取シタ
コヽ於テ意然戦斗ヲ試ミタガ利ナク、退カキ土方、近藤ハ兵ヲ纏メテ江戸ニ
入リ、佐藤ハ日野ノ義ヲ引キ上ゲタ。

二雄ハ更ラニ下総ノ流山ニ陣シタガ此処ニ於イテ勇ハ捕ヘラレ慶応四年四月二十五日板橋ニテ刑場ノ露ト消エタ。

流山ヲ逃レタ土方ハ下野ニハイリ更ラニ宇都宮ニハイツテ一度ビハ勝ツタガ後ニ再野ノ戦ヒニ破レ会津ニハイリ函館ニ逃レコヽニ榎本武揚ト会シテ五稜郭ニ立籠ツタガ官軍ニ破レ運命果敢ナク明治二年五月十一日馬上ニ殪レタ　時ニ年二十五歳

（江川太郎左衛門　郷土偉人傳ニヨル）

蓋シ近藤土方ノ二雄ガ文化三年新撰組ヲ組織シ蹶然立ツテ京ニ赴イタハ一ハ尊王攘夷ヲ目的トスルノデアル　殊ニ大義名分ヲ明カニシ且ツ尊王ノ美名ノ下ニ隠レテ横行スル徒輩ヲ逐ケテ、只一死君恩ニ酬ユルノミノ決意ヲ有シテ居ツタノデアル。

世人ハ或ハ新撰組ヲ主殺トシテ殺傷ヲ事トシタ故　逆賊視スル者ガアルガコレハ大キイ誤見デアリテ　其ノ総ベテノ行動ハ実ニ義憤ノ発露デアリ　心中　無ニルモノハ只忠君愛国ノ一念ノミデアツタ。

九　明治時代

徳川慶喜大政ヲ奉還シ朝廷ニ於イテハ慶應四年十二月九日王政復古ノ大令ヲ発シタ。マヒ明治四年九月八日明治ト改元セラレタ。

従来ハ多クノ郡ハ品川　武蔵ノ二品ニ属シテ居リ　本所ハ武蔵県下ニアツタ　其後明治四年春　一変県ヲ制トナツテ　神奈川県下ニ属シ　七月二八日野宿ヲ県下第三区トシタ　ソノ翌年　二学制頒布ノ折　土渕山普門寺本堂ヲ校舎トシテ　小学校ヲ創立シ　日野義隆氏ヲ校長ニ迎ヘ　長谷合音氏教員トシテ　其他事ノ指導ニ当ラシムコトヽナツタ

明治六年ノ五月区劃改正ニヨリ九大区四小区（桑木田村）五小区（日野宿）ニ属シ、後ニ五区ニ編成ヲ変ヘテ堀内豊田ガ一村、上田、宮、日野及ビ新井、石田、万願寺、下田デ合一村トナリ、村長ニ戸長ヲ置キ当時ノ戸長ニテハ　山口平太夫　石川正夫　斉藤音吉　等ノ人々ガ勤メラレタ

次イデ十一年ノ一月小学校児童増加ニヨリ普門寺ノ敷地ヲ折半シ、新校舎ヲ設ケ教室ヲ事業ニモ一段ノ進歩ヲ加ヘタ、又此ノ年十月　郡役所ヲ東西南北ニ分割シソノ南郡役所ニ入リ、郡長第一代ニハ佐藤俊正氏ガ就任シタ。

明治十三年六月　明治天皇陛下ニハ　甲斐又西京　御巡幸ノ途次ニ佐藤氏宅ニ御小休ナサレタ。

翌十四年　一月　本郡役所ガ連光寺ニテ御遊猟ヲ遊バサレタ　途次ニモ御小休アツテノ本町トシテハ　童子ヲノ光栄ニ浴シタ、更ラニ十七年ニ至リ　数村ヨリ成ル聯合町村生シ　豊田堀ノ外ハ七生村ノ落川ニ代高幡　平山　程久保ト合シテ一村ヲ形成シ　土方歳太郎氏ガ長ニ当リ　現南平　壽徳寺ニテ一切ノ事務ヲトツタ。

又日野宿ハ石田　上田　新井　石田万願寺ト聯合シテ五戸長役場ハ現駐在所辺ニ位シタ

明治三十二年　八月二八　甲武鉄道（中央線）ノ敷設アリ　山口平太夫、天野清助　佐藤俊宣氏等ノ尽力ニヨリ当時日野駅ノミヲ設置スルコトガ出来タ。

次イデ三十六年四月　法律　第十二号ニヨリテ　本郡ハ更ラニ　東京府ニ編入セラレタ尚年　日野宿ハ独立シテ日野町ト称シ　他ノ六ヶ村ハ　豊田堀之内ト合同シテ　桑木田村ヲ樹テタ。　然シ桑田村ハ　三十四年ニ至リ　或ノ事情ニヨリ四月一日ニ日野町ト合併スルコトヽナツタ。

又同年二月ハ　豊田駅ノ設置直シ　東京府農事試験場ヲ豊田ニ設立シ（現在ハ立川農事試験場ニ合同）　或ハ又稲毛街道ヲ豊田南方ニ移転サレタ。

越エテ四十三年ニハ豊田堀之内地先ノ耕地整理ガ行ハレタ。
斯様ニ本町ハ初年来 極リ無キ革新ヲ経テ初メテ現在ノ日野町ノ誕生ヲ見タ ノデアル。
今ヤ新進町トシテ躍進ヲ重ネ 斯ク世ニ注目サレルニ到ツタ。

一〇 大正昭和時代

大正十年十一月 武相ノ両野ニ渉リ陸軍特別大演習ガ行ハレタ 此ノ時畏クモ 白王太子殿下ニハ日野台・金井松ノ地ニ成ラセラレ親シク東西両軍ノ戦況ヲ御統監遊バサレタ。 コノ折ニ三尺余ノ雄松ヲ一本 御手植ナサレタ。
翌十八日ニハ殿下ノ思召シニヨリ侍従甘露寺伯ヲ当小学校ニ御差遣アリ教育事業ニツイテノ御視察ガアツタ。
斯クシテ今ヤ昭和ノ聖代ヲ迎ヘ 南部下優良町村トシテ 現在ニ到ル。

七、九、四

郷土ノ自然

一 調査事項

位置
境域
面積
区劃
地勢
氣候
地質

二、位置

日野町ハ東京府ノ西南南多摩郡ノ西北部ニ位シテ在ル（東経一三九度二二分―一三九度二六分 北緯三五度三九分―三五度四二分）

東ハ多摩川 浅川ノ合流点ヨリ起リ 西北ニ向ツテ 次第ニソノ幅員ヲ増シテ小宮村ニ接シソノ形狀ハ概ネ三角形ヲナシテ在ル

産業的位置

本町ハ西ニハ府下第一ノ商業都市八王子市ヲ控ヘ南ニハ本郡屋指ノ大町デアル町田町ガ在リ東ヲ隔テ、遠クハ神奈川縣横濱市 在リ 東ニハ帝国首都東京市 一大要衝要地トシテ控ヘテ在ル 然モコレ等都市トノ間ハ鉄道ニヨリ 或ハ甲州街道及ビ其ノ他ノ道路ニヨリ 実ニ近イ迄ハ 數分遠キモ 一時間ヲ出ヅレバ 往復シ得ル便利ヲ 持ツテ在ル。

一 交通的位置

中央本線ハ本町ノ北部ヨリ西ニ日野豊田ノ二駅ヲ通ジテ西方八王子市ニ到ル。京王電気鉄道モ本町ノ南方浅川ノ対岸七生村ヲ東西ニ走リ東ハ新宿ニ西ハ八王子市ニ通ジテヰル本町ハ中央ヲ東西ニ通ジテヰル甲州街道ハ大正十五年八月多摩川ノ架橋ト其ノ後ノ道路ノ補装トニヨツテ今来東ハ帝都ニ西ハ八王子甲府方面ニ運輸交通ニ利スルコトガ多クナリテ来タ。其ノ他ニ府道トシテ大字日野ノ略称程町ヨリ高幡ニ通ズルモノト高幡ヨリ豊田ヲ経テ八王子ニ到ルモノトアリコ等ノ道路ハ何レモ遠ク神奈川県川崎市ニ通ジテヰル

二 境域

本町ノ南北ハ多摩川浅川ノ二川ニヨツテ境ス境域ハ明カデアルガ西ハ多摩丘陵ノ地続キデアル。即チ東北ハ清流多摩川ヲ隔テ、北ハ多摩郡、立川町谷保村及ビ西府村ニ対シ東南ハ浅川ヲ隔テ（一部ハ浅川ニ跨ル）本郡七生村（三沢高幡平田中平山長坂）ニ対シ西ハ台地続キニハ宮村七生村ニ隣接シテヰル

三 面積

本町ハ多摩丘陵ノ台地ト多摩川浅川両岸ノ平地トカラ成リ南北約四、三粁東西約四八粁ニシテ面積ハ三百三十三万二千百二十五坪（一、七二四、方里）コレヲ本郡ノ面積ニ比スレバ約二十分ノ一トナリ又東京府ノ全面積ニ比スレバ一九三分ノ一或ハ又全日面積ノ約六〇二四分ノ一トナル。

四 区劃

本町ハ日野万願寺新町井下田宮上田川辺堀之内豊田ノ八大字ニ割ル

五 地勢

地勢ハ概ネ平坦ニシテハアルガコレヲ台地ト平地トニ分ケル

A 台地

台地ハ即チ多摩丘陵デアル　川口丘陵ノ東辺デアル小宮村加住村ノ一帯ノ台地ニ接続スル　コレヲ特ニ日野台地トイフノデアル　台上ハ大体西部ヨリ東部ニ後カナ傾斜ヲシテ居リ　平均ノ標高ハ一〇五米ヲ示シテ居リ　主ニ畑地トシテ利用サレテ居ルガ他ニ若干ノ山林地モアル　コノ台地ノ東端ヨリハコノ低地ヲ俯瞰シ　多摩川ノ彼方ノ武蔵野台地ヲ一目ノ中ニ收メルコトガ出来ルノデ　嘗テ大海原ノ際ニハ御殿賢ノ地トシテ定メラレタコトガアル　又コノ台地ノ南側ニ沿ツテ　大字州辺堀之内コノ豊田ニ　二段ノ河成ノ段丘ヲ見ル

B 低地ハ、高地トノ差ハ約二〇米カラ三〇米　標高ハ七〇米カラ七五米ヲ示シテ居ル　コノ低地ニハ多摩川浅川ノ水ヲ數條ノ用水堀デ引用シテ大部ハ水田トシテ利用セラレテ少許ノ畑地雑林地モアル　宅地モコノ底地ニアル

水利

多摩川ト浅川ノ二川ノ水ヲ九條ノ用水堀ニヨツテ引用シ　低地ノ水田ヲ灌漑スル

用水堀　豊田用水堀、上堀堀、山下堀、仲井堀、蔵王堀、四谷堀　下堀堀

中堀堀　三本アリ

水車ハ用水堀ノ水ヲ利用スル

営利水車　三　共同水車　五

河川

A 多摩川

源ヲ山梨県東山梨郡神金村萩原山水干ニ発シ一瀬川ト称シ南ニ流レ吉野谷沢ヲ合シ高橋ヲ過ギ黒沢川ト合流シ東方ニ進ミ大菩薩峠沢ノ泉水谷及ビ小金川谷ノ水ヲ容レ

所流ル村ヲ過ギ丹波川トナリ　コレカラ間モナク　左岸ニ小袖川ヲ右岸ニ小菅川ヲ入レ東ニ流路ヲトリ　コレカラ間モナク日原川ト氷川　村デ合流シ青梅町ヲ過ギ流路ヲ南方ニ転ジ　拝島ニテ秋川ヲ合セ　更ラニ日野町　東南デ　浅川ニ合シ　多摩広陵　東北部ノ断層崖ニ沿ヒ　東南ニ流下シテ　六郷川ト絡ミテ東京湾ニ入ル、水勢ハ　一般ニハ緩カデ　舟筏ニ通サズ　水ハ清カデ　飲料水ニ適シ　沿岸ハ　田畑ヲ　開墾シテ　殊ニ夏期ハ　鮎釣ヲ以テ　其ノ名ガ高イ

ヒ　浅川

浅川ノ流域地ハ二ツデ　一ヲ案下川ト云ヒ　其ノ水源ハ　恩方村ノ幽谷ヨリ発シ　東南ニ流レ川口村カラ発ル　小川ト合シテ　元八王子　村ニ至リ　其ノ一ハ小仏山麓渓谷ヨリ発シ　東ニ流レテ案下川ト合シ　更ニ恩方村ヨリ来ル案下川ト　相会ス　浅川ト呼ビ　八王子　市ノ北ヲ流レテ　七生村ニ至リ　日野ノ東南　天宇石田　地先デ　多摩川ト合ス、川巾ハ　凡リ　六ヶ間　水ハ浅クシテ舟筏ヲ通サナイ

六　気候

本町ハ北温帯　内ニ属スルカラシテ　気候概ネ温和デアリ　乾燥ノ程度ニ寒暖ノ差モ　甚シクナイ

A　昭和五年度　天候要素

快晴	四九	曇	一六八	降水量日	一四三
雨	三五	霧	五九	霧日	一九
雪	一一	雷電	五八	微雨日	四三
強雨	二	弱雨	二		

B　気温

年平均気温　一四度二

一月平均気温　三、二度
八月　〃　二七度
最高気温　三六、二度
最低　〃　零下七度

C 雨量

降水量年　一五六六粍
最小量一月　五〇粍
最大量九月　二二五粍

大体夏期ハ東南風ガ湿気ヲモタラスカラ降雨ガ多ク又毎年六、七月ノ交ハ梅雨ト称シテ居ル
雨季ガアル

D 風向

風ハ夏期ニハ南偏ノ風ガ主デ時ニハ東南風西南風ノ風トナルガ猛威ヲ揮フハ東南風ノ風デ小笠原諸島方面カラ突然的ニ来ルモノデ次ニハ北風デアル　冬期ニハ西北風ヲ主風トシ北風モ相当ニ吹クノデアル、西北風ハ所謂季節風デアツテ　温度ハ低ク且ツ塵芥ヲ吹キ巻クルコトガアル
主風トモ云フトコロノモノハ一月カラ四月マデト　九月十二月　迄ノ北西風　五月カラ八月　迄デノ南風デアル。　見ル故ニ本　町デハ夏期ハ南風デ冬期ハ北風デアル　コノ風ヲ源泉ハ夏ハ大平洋中ニ冬ハ満蒙ノ大高原ニ在ルトイハレテ居ル。

最高速度　一六米七
最多方向　西北風

E 湿度　武蔵野台地ハ温度ハ低ク　低地ハ温度ハ高イ、　然シ衛生上ニハ少シモ支障ハナイ

程度デアル
最高湿度　七月　八三%
最低　二月　六二%　〉年平均　七四%

七

地質

日野台地ヲ又多摩丘陵ハ関東山地ヨリ発スル諸川（即チ荒川、浅川、秋川、桂川、等）ノ運搬物ガ古東京湾ニ堆積シテ生ジタ地層デアルト言ハレテヰル。故ニ第四紀古層三属ニ洪積層ヨリ成ル

従ツテ本所台地モ第四紀洪積世ノ成生物デアル、コノ洪積世時代ノ地層ハ下層ヲ東京層ト云ヒ青色ノ粘土、砂、灰質粘土カラ構成サレ化石ヲ多ク含ンデヰル即チ古東京湾内ニ沈積シタモノデアル　コノ当時ハ海底ハ除々ニ沈降シテヰタノデアル　ソレハ上部ト下部ノ組成ガ等シイコトヨツテ知ラレルノデアル。コノ東京層ノ上ニ沈積シタ砂、礫、粘土、カラ成ル層ヲ成田層トイフ　コレハ貝類及ビ珊瑚ノ化石ヲモツテヰル　コノ層ノ上ガ塩田ノ層デ台地ノ全部ハコノ層デ被ハレテヰル所謂赤土ト称シテヰルトコロノモノデアル。

本所ノ台地ニテモ大米飛カラ十米余ノコノ層ヲ見ラレル（日野駅ヨリ豊田ノ段丘ニ貧ク鉄道線）コノ層ハ無化石デアリ成因ハ塩基性ノ安山岩ニ属スル史山灰ガ風ニヨツテ運搬サレテ水底ニ除々ニ沈積シタモノデアル

然シナガラ何レノ土地ヲモ以上ノ様ナ規則的ナ層ヲ有シテハ居ラズ　不整正合ニ重リ上ノ方ニ堆積ノ層ガ発達シテヰルバカリデアル

斯様ニ沈積シタ層ガ成田層ノ成生後ニナツテ古東京湾ガ上昇シ初メ遂ニハ台地トナリタ　其ノ後ニコノ台地モ各河川ノ浸蝕作用ガ働イテ台地ヲ切開イテ渓谷ガ

出来タノデアル　其ノ後ニ地盤ハ再ビ陥没ヲ初メ河川及ビ低地ハ海水ノ浸入ヲ来ス
タ（現在ノ処々ノ低地ニ貝殻層ヲ見ルノハコノ時代ノ生成物デアル　浅川ノ平山橋
ノ辺ニ一部ニ貝層ガ露出シテ居ル）
最後ニ陸地ハ上昇シテ　現在ノ地形トナッタノデアル　現在ヨヲ川浅川ノ沿岸ニ存
在シテ居ル段丘ハ　コノ運動ノ生成物デアルトイフ
即チ浅川　ヨヲ川　落合ノ日野段丘及ビ　南部豊田駅附近ヲ境トシテノ二重段
丘ハ前記ノ運動ノ所産デアラウ
斯クシテ　生成シタ日野台ニ地ハ土壌ハ　埴質壌土、壌土、埴土　等デ　一般ニコレ
等ニ　火山灰土ヲ　混ジテ居ル　他ニコヲ少　礫土ヲモ混ズルモノガアル　コノ殆ンド全部ノ畑
地トシテ　利用セラレ　少ノ許ノ　雑木林ガアル
又低地ハ　第四紀ノ　新層ニ属スル　河成ノ　沖積層ヨリ成ッテ居ル　土性ハ　埴土
埴質壌土　ガソノ大部ヲ占メ　主ニ水田ニ利用セラレ　他ニ雑木林、宅地　果樹園
等ニ用ヒラレテ居ル。

八　自然ト人文トノ関係

従来本町ニ於テハソノ土質　桑樹ノ栽培ニ適シ上記ノ如ク気候亦適スル為メ　数年来
次第ニ桑園ノ増加ヲ示シ、八王子市及ビ立川町ヲ散集トシテ　養蚕業盛ニ行ハレ　益々
牧蒔量ニ於テモ　増加ガアリ　以下養蚕業地トシテモ　其ノ聴名ヲ馳セタ。然シ爾後漸
ク蒔價ノ低落ヲ来タシ　養蚕家ニモ　一大衝撃ヲ与ヘタ　同時ニソノ反面ニ自然的ニ大
都市ヲ目標トスル　蔬菜果樹類ノ栽培ガ勃興シテ来タ。
土質火山灰土ヨリ　大根ヲ初メソノ他ノ蔬菜ノ栽培ニ適スレバ　コレモ亦ソノ後ニ来タルモノト

シテ次第ニ普及シ。初期ニアリテハ殆ンド本町一部（東北方面）ニ過ギナカリシガ既ニ今日ニハ全町ニモ及ビ年毎ニ増額シツヽアリ、コレ時勢ノ然ラシムルモノトハ云ヘ即チ自然的土質ノ之ニ適スルト次ギニハ郷土ノ自然的ナ位置及ビ気候雨量等トノ関係モ考慮シナクシテハナラナイ。

即チ本町ハ上記ノ如ク気候雨量ニコレニ適シ位置的関係ニ於テモ国風ニ大都アリ且ツ大需要ヲタル東京市横浜市ヲ有シテヰル。又昔時ノ甲州街道自動車橋ノ開通ト鉄道ノ開発トニヨッテ、コレ等ノ需要トノ時間的距離ヲ短縮シタ為メ愈々将来ヲ目サシ コレヲ以テ副業ノ位置ヲ脱セントシテヰル状態ニアル。

又本町ハ南北ノ二方河川ヲ環ラスヲ以テ水利灌漑ニ天然ノ利便ヲ与ヘラレ水車ヲ運転シテ精米製粉ヲ営ミ、敢ヘ地ニ灌漑水トシテ導キ水稲ヲ栽培シテヰル土質コレニ適スル故現ニ宅地ヲ除クノ他ハ全部水田トシテ利用サレテヰル。

三、日野町の戸口

1、聚落の状況と構成沿革概況

我が日野町は、位置地勢気候等よりして、現在の産業交通及戸口の発達を為して来たのである。

元来戸口は、位置や地勢気候等と頗る密接な関係あり、この條件に依りて増加し或は減少し、又時としては現状の維持を為すことがある。

尚戸口は右の外特殊の條件に依りて左右される場合も少くないのである。すべての都会や聚落の隆替はこれ等の原則によつてゐる。

日野町は東約四十粁に政治、文化の中心地たる東京市（昔の江戸）を控へ、西は約四粁にして絹織物工業の地帯である八王子市に隣んでゐる。一見日野町はこれ等都市のあるために、副次的補助生産工業地帯

として、戸口は密なるが如く考へられるが、事実はさにあらず。これには種々原因のあることである。而して日野町は主して農業を生業とするものである。

故に戸口集群の方式は、数戸、数十戸相集りて田舎の聚落を形成してゐる。即田園村落(Rural)にして、物資の産出、衣食住の原料生産の細胞を為してゐるのである。たゞ日野町を通ずる国道は昔よりありし甲州街道にして、日野橋(約八年前迄は渡舟)より日野駅に至る約一粁半は鏈村にして、道路をはさんで両側に家軒並びて小street の感がある。

現在より昔にさかのぼりて三百年それ以前のことはいざ知らず、少くも明治維新頃と現今の戸口の排列の状況及密度に就て考へるに、多分

の変化及増加は明瞭に認め得ることであるが、概して変化少いと云ふことになる、換言すれば、我が日野町は明治維新より今日に至る迄、田園村落が極端に興癈せず、平和純朴の生活で、徐々に隆賑せることを証明するものである。

2、日野町戸口の沿革

左に日野町戸口、明治廿五年調査のものと、昭和三年調査のものとを示し比較して、戸口が約三十年の間に如何に増減せるかをみん資料とする。

種類	戸数	人口 男子	人口 女子	計
農	七一九	二一二一	二一六一	四二八二
工	五五	一四三	一四七	二九〇

商	一三一	三九三	四二四	八一七
雑	一五	一五	一六	三一
計	九二〇	二六七二	二七四八	五四二〇

右表は即明治廿五年十二月末現在のものを示す。次に昭和三年十二月末現在のものを示す。

種別	戸数	人口 男子	人口 女子	人口 計
	九七六	二八二四	二八一〇	五六三四

尚昭和三年十二月末現在の生出死亡数は次の如し。（自昭和三年一月一日至〃十二月三十一日）

死亡者　九三　　出生者　二一〇　　差引　一一七出生超。

3. 現在人口　昭和六年末現在

戸数	人口		
	男子	女子	計
一〇〇六	二九一四	二八一二	五七二六

一戸平均人数　五・六人強

人口密度一平方粁につき　五二〇・五人強

4. 人口増減率　昭和六年末現在

A 出生死亡数より

男出生　一三二　女出生　一一二　合計　二四四

男女死亡数差引出生超過　合計　一二四　一二〇

出生百分率　四・二強

死亡百分率　二・一弱

人口増加百分率　二・二弱

B. 移出入者数より

入寄留者　二三五

出〃　三二六

差引移出超過　九一

移出超過百分率　一・六弱

5 将来の戸口

大東京市制の実現　新宿駅川間の電車及道路の改善等に依り、我が日野町も戸口増加大と予想することが出来る。即日野高台及豊田駅の附近に風光及その他住宅地としての條件備はる好適地なり。家屋建造等と共に増加し、近く群集聚落の點在を見るに至らん。

産業

一、序

郷土教育ノ叫バレタノハアマリ新シイ事デハナイ。今此処ニソノ如何ヲ論ジヤウトスルノデハナイ。唯郷土調査ナルモノハ一朝ニシテササレウルモノデナク、個人デナサレウルモノデモナイ事ヲ前提トシテ、此度日野町ヲ中心トシテナサレントスル調査ナルモノガ全ク単ナル一部分ニスギザル事ヲ言ハネバナラナイ。シカシコレヲカニヲウ刺戟剤ナリ拍車ノイタミトハ[illegible]前進フコスベキ仕事ノ要素トナリウレバ幸甚デアルト言ヒ得ヤウ。

コノ一部ノ又一部タル産業ノ項目ニツイテ記サウトスル。

不肖コノ調査ヲ受ケテ共労者タル斉藤氏ト共ニ火急的ニ作リ上ゲタモノガコノ作物デアル。

惟フニ単ニ産業ト言ウテモ単ニソノ銘板ト統計ノ羅列ノミデハ如何トモシガタク、ソコニ変遷ノアルガマヽノ姿ヲ必ズ出シテ、ソレニ対スル郷土人ノアクナキ正シキ観察ト批判ガアウテ始メテ生キタモノトナリ得ルノデハナカラウカ。カク言ヒナガラソレヲ正シクナシ得ナイノハ全ウ之調査者ノ愚サノ致ストコロデアリ、又カヽル機会ニ接スル日尚浅キトニヨルト言ハネバナラナイ。宜シク過去ヨリ現在ニ、又ソレヨリ未来ヘノ躍進ハ何ト言ウテモアルガマヽノ現実ヲ直視スル事ヨリ外ニナカラウ。

故ニ郷土日野ヲ調査スルニアタリ全ク不適任者ノナス事ナレバ、不完全不備ノ点実多カラント思フ、何卒御遠慮ナキ叱正ヲナサレン事ヲ要ボスルト共ニ諸氏同類者ノ今后ノ発展ヲメ希望シテ止マヌ次第。

二、日野町産業ノ沿革

産業ハ畢竟人類共同生活ニハ不可欠ノモノデアル。枉ク原始時代ニハ個々ノ生計ヲ以テナシ得ラレタデアラウガ、一歩共同生活ニ踏ミ込ンデカラハ産業ノ発達ハイチヂルキモノデアラウト思フ。ソレヨリハ産業ハソノ時代々々ノ政治形態、経済形態ニ附随シテ論ゼラレ観察セラレネバナラナカラウ。故ニ日野ノ産業ノ沿革ヲミル事モヤハリ日野ノ様々ナ生活ノ態様ヲミナイレバナラナイ。シカシソノ方面ノ詳述ハソレラ専門ノ担当者ニ一任スル事ニシテ、要デハ極ク産業ニ関連深キモノシトルニ止メヤウ。

日野ハ多ク山野ニアル事ソレダケデモ立派ニ古代ヲ連想セシムルニ足ル。謂フトコロニヨレバ武佐ロヤトシテ日東氏ノ城ヲ築イタ事蹟モアルラシク相当古イ時代ニ遡ル事ハ生来ヤウ。産業ハ即チ人間ノ住ンダソノ時カラハジマルト言フモ過言デハアリ得マイ。日野ノ産業ハ日野移住ト共ニ起ツタト言ヒ得ル。カクシテ我多ノ要素ヲ結ビテ今日ニ至ツタノデアルガ、コヽニハソノ主要ナル点ヲ摘記スルニ止メヤウ。

ソノ封建時代ハ何ニヨツテ崩壊シタカハ知ル人ゾ知ル。
[illegible]ノ経済ハアトデ考ヘ徳川時代ノ日野ヲ見テ行カウ。
ヘテ、十数代将軍ガ亡ビルニオソラクコノ地ニ住ム者ノ誰モ考ヘタデアラウ、日野ノ経済ハ[illegible]
ソノ頃ノ行ハレタ[illegible]ナイ。コノ時代ノ経済的形態ガ國内的ニ閉鎖サレタトイフ事ハ、今日[illegible]
[illegible]ヲ物語ル唯一ノ證據デアラウト思フ。コノ時代ハ一応ハ閉鎖[illegible]
[illegible]、十代ノ制度ニ伴フ発展ヲモ認メ得タノデアル。タトヘバ小商業ノ発展[illegible]
[illegible]ソノ時代ニ見ルベキ事ハ言ヒウル事ト思フ。多テ川ニ沿ツテ出ルトコロ[illegible]
[illegible]ヲ伴ヒナガラソノ后交通ノ便、交易ノ盛リモ一寸示スモノデアリ、[illegible]
交通ノ便ノ改善ニ於ケル発展性ハコノ地方ニ多分ニ認メウルワケデアル。徳川鎖國ノ夢
ハコノ地方ヨリ醒ミラレル。
当ナキ時流ノ進展ハ、物質文明ノ支配ヲ未ダモアマストコロナク郷土日野ニモ浸
透セシメタノデアル。自給自足ヲ主デテ完全ニ関気ノ知レタ消費者トノ取引トノ層
ニスミ住シ来ツタ郷土日野ノ産業ハ百鬼夜行ノ形ヲ呈示スルニ至ルノデアル。
[illegible]ヲ地盤ニデキコマレタ帝國日本ハ徳川封建ノ鎖國ノツグナヒヲ短時日ニヤツテノケナケレバ
ナラナカツタ。郷土日野ハソノ渦中ニ当然マキコマレナケレバナラナイ。
自給自足的産業ノ形態ヨリ一躍シテ進ム目標ハ何デアツタカ。ソレバ今ノ農村
機構ガ立派ニ説明シテクレルデアラウ。ソノ中ニソノ立派ナ目標ガ潜ンデヰルノデアル。
多角的ナ自給自足的ナ生産方法ハカナグリステラレテ、國民経済ヲ主眼トシタ

方法ニ依ッテ行ハレテアル。農業者ソノ他ノ生産者ニ於テ感ジカル変化ハタシカニアルコトハ
以上ノ例載例ダケデ、コノ酒ニ酔フタ生産者ハ自己ノナスベキ行為ヲ外ニ求メルノハ当
然ノ結果ト言ハネバナラナイ。カタシテ多角ハ一方的ニカハリ、自給自足ハ国民
経済ノ流通ノ一部ニ消滅シ、遂ニ共同経済ノ大波ノ中ニ完全ニ埋没セラレテ了ッタ。
カヽル経過ハ或ヒハ生産者ヲ利シ或ヒハ失望ノドン底ニオトシカル。コレハ全ク右ノヤウナ
他力ニ依ル結果デアラネバナラナイ事ハ誰シモ首肯シウルトコロデアラウ。
郷土日野ニソノ姿ヲミルナラバ他ノ幾多ノ郷土ガ陥ッタ矛盾ノ中ニ向エテオルノヲミルヤウ
ナイワケニハユカナイ。自給自足的ニナレタタ多角的農業ハオソラク、後ハレタタ又ハ
ノ慶ノ如キ姿ヲ見ナイ者ニハ立派ニ安住ノ方便デアリ得タ。ソレガカキミダサレタノハ
サテオザル運命ト言フベキカ。コカシカル転期ニ生産者ハ立派ニソノ立場ヲ擁ヲナシ得タ
ト言ハバ言ヒ得ヤウ。ソノ享受ガイツマデモ続クト思ッタ者（オソラク皆ンナガモッタンデ
アラウ）ノ今日ノ苦悩ハ大キイト言ハネバナラヌ。
ソノ最モヨイ例ハ農業ニ見ラレルト思フ。都ト言ハレタ人々ノ近接シテオル事
ハ去来ノ同業発展ヲ阻害シウル社会トナリウルモ、コノマデニ於テハヤハリ自
給自足ソシテ知リウル範囲内ニ於ケル消費者ノ立場ヲ越エナカッタ。
ト確信スル。思ヒ角大正ノ中期ヲ終ヒトシテ全ク春業ノ美酒ニ酔フ事ハ不能ト
ナッテアッタ。ソレ以後ハ今日ノ農村ノ姿ガマザ〳〵ト我々ノ神経ニ訴ヘル。ソレ故デモ説
明ヲ要シナイ事ト思フ。

右ハ故ニアマリ興味ニワタラヌヤキラヒガアラウト思フ。シカレ現在ニアツテハ一郷土特有ノモノニシテアルト言ハル事ハ興味ヲ引クベキモノナラウト思フ。体験ハソレヲ立証ニ値スル。

ソレデ最ニ其体験ニ説明ヲ要シマイト思フガ大体ヲ言フナラバ、

往古ノ日野ニアツテハ各人自給自足ヲ以テ根本トシ、自然男ノ担ハル生活ノ為ノ事ガ最モ大ナル役目デアツタト言ハネバナラヌ。ソレガ進展シテ産業ノ発展ヲ来シタト言ツテモ郷土日野ノ近隣ニ生産ヲ為ス者同志ノ間ニ於ケル交易ヲ目的トスル程度デナカツタ事ト思フ。故ニソノ頃ニアツテハ商業ノ発展ガ大体知リ得タルモノ又ソコニ伝承大キナギヤップヲモ認メナカツタラウト思ハレル。ソノ時代デハソノ自然ノ結果ニ小ハ郷土内ヲ単位トシタデアラウトシ、セイ〳〵近接ノ地域ノ外ニ出ズルトイフ事ハナカツタデアラウ。故ニ産物ノ産額モ郷土ノ生活ニ必要ナ通ハレイ程度ニナサレタデアラウト多分推ス。各農家ノ金ノ必要ハ主トシテ産物ニアヤツテ来タモノデ少ナク実金ニ自給自足的ニヤツテ行ケタデアラウ。各戸ハ米ヲ作リ、麦ヲ作リ、芋ヤ野菜ヲ、ソノ他ノ作リモノガザ。ソノ作リオキラク数ニ関シテハ今度ハ詳ラカニ知ル事ハ出来ナイガ、ソノ作リ物ニ於テハ今デモ各人ガ自給ノ為ニ作ツテヰルモノ位ノ程度ニアツタト同ジヤウニヤハリ郷土日野ノ産業ノ発達モ亦ソノ自然ノ結果デアツタト言ハネバナラヌ。ソレデソノ結果ニ産業ノ発達ヲ得タラウ。ソレデソノ結果ハ決シテ華々シイモノデハナイケレドモ大道ガアツタラウト思ハレル。何カ商品ヲ動キガトリソレデ動キガトリソレハ進展ノ方法デアルト共ニ秩序ノ道

[illegible]

郷土日野ハ農業ヲ以テ主ト為シ、陸業ヲ主トスル。約七割ノ家屋ハ農家ヲ以テ数フ。

[illegible]

後ノ者ハ郷土ニハアマリ関係厚キモノニ非ズ。[illegible]ノ熱様リ行フ事ナル。

農業ニ於ケル耕地、[illegible]ハ、[illegible]ノ関係ハ大部分ノ

[illegible]ノ為ニ、[illegible]ハ第一ニ地理的第一部ヲ採ル事ニスル。

(1) 地理的条件

多摩川流域ナル事　ソレモ其支流ニ沿フテ[illegible]

平坦ナル地ヲ[illegible]ハ高台ヤリ、ソノ為ハ高低ニ[illegible]ニテ大ニシテ変化

アルワケデハナイ。高台ハ日野台日野第ト称セラレ人家ハ[illegible]ニ山林ヤ桑畑ハ

アル台地ト低地ト[illegible]ナモノデアル。今ハ高台ハ[illegible]

多摩川流域ノ低地ハ水田ガ大部分ヲ占メ[illegible]ノ陸ヤ桑畑ハ畑地トシテ

宅地ト道路ニテ残地ハ水田ヲ多ク又ニモ作ラレタニ過ス。

今日ノ日野ノ地域ハ行政的ニナサレタモノニシテ古来経済上ニ[illegible]ノ聚落ノ形態ヲ

見ルニハヤヽ不徹底ノキラヒハアレガ今日ノ大字部ノ部落ハ部落制ニ[illegible]ガアッタト

思フ。大体、日野、新井、豊田、[illegible]ニ[illegible]ヲ取扱

フ事ニスル。主トシテ、川辺堀之内豊田ノ一部ハ中央ノ高台ヲナシ、台地ハ町ノ西隣

小宮村ヨリ引続キ三角形ノ町ノ西方部ヨリ中央ニ突出シテ飛地ヲ形成ス。

(2) 農業

(イ) 耕地

耕地ヲミルニ、一万一千四百三十四平方粁（〇、七一四方里）デアル。耕地ヲ次ノ三ツニ別ケテ見ル。（昭和六年四月一日現在調査）

田、　三〇〇町八反九畝〇六歩
畑、　四三八、九四〇一
（中　桑園　二五二町歩ヲ占ム）

山林　二〇一、〇三〇一

之デ見ルトキハ田ト畑トハ全面積ノ大部分ヲ占ムル事ニナル。コトニ田ハ比較的ニ多イ。畑ハ桑園ニ約半数以上ヲトラレテヰルトコロヲ見レバ蔬菜其ノ他ノ雑物栽培ノ地ガ心細イワケデアル。台地ニメグマレテヰル為ニ山林ノアル事ヲ亦一ツノ特長ト言ヘバ言ヘル。次ニ部落別ニ見ル耕地ヲ見ヤウト思フ。コレハ如何ナル部落ニ比較的田ガ多ク畑ガヨイカヲ示スモノデアラウ。コレハ字日野ハ大部広地園ヲ抱擁シテヰル。

部落名	田	畑	山林
日野	一七三四九一三八	一八式五四二九	二三五四三二二
新井	二六、九五二九	一〇、四六一三	一四、五三八
豊田	五一、三〇〇三	七六、三四二一	[illegible]
川辺	二、七三五	五、[illegible]	九、[illegible]
上田	一三、九九〇三	一五、六八二一	二、一四〇三
屋敷	二、〇二七	六、八二二	五、一七〇三
万願寺	一〇、三五一九	四、九四〇四	一、七四二八
下田	一六、三三二七	五、六五〇三	一、二六八五

上ノ表ヲ見ルニ部落ニ於テ最モ多ク耕作シ得ル田畑ヲ有シ且ツ山林ヲ多ク有スル部落ハ豊田ナリトス

之ヲ以テ最モ上ノ日野ハ大体ツイテ薪ト思フ。一般ニ開墾サレ切ツテ用材ノ域ヲ脱シ老練ノ域ニ達セントスル新井ニアルトスレバ之ヲ切ツテ[illegible]分布図ノ挿入ヲ必要トスル。之ニヨツテ若干比較的特産ト思ハレル産物ヲ見ル事ガ出来ル。[illegible]地ニハ[illegible]特色トイフ程ナ物モ見ル事ヲ出来ナイ。一般ニ桑、米、麦ハ栽培サレテヰル。

次ニ農家ハ何軒位アルカヲ見ヤウ。

(四) 農家戸数・及ビソノ他ニ比較

総戸数　農業　商業　工業　官公吏　其他（昭和五年十月一日現在）

九八二　六二八　一五三　一〇二　三〇　六九

更ニ昭和六年度ノヲ加ヘ農業家戸数ヲ見ヤウ。又更ニソレヲ自作小作等ノ割ニヨツテモ一瞥スル事ニスル。

年度	昭和三年	四年	五年	六年
自作	八六	八七	六七	七九
自作兼小作	三八〇	二五〇	三四〇	二五四
小作	二〇四	二八二	二二一	二九一
計	六七〇	六一九	六二八	六二四

上表ノ如クデアル。

コノ四年間ニ大体著失ナル変化ヲミナイ。

ニカヘル小作ノ戸数ノ比較的増加ヲ見テ居ル事ハ注目スベキ事デアラウ。

爰デ注意スベキ事ハ商業ニ属スルモノデモ農業ヲ兼ネ工業デモ農業ヲ兼ネルモノガアル。勿論商工業ノ方ハ小経営ニシテ一項目ヲ挙ゲベキ程ノモノデハナイ。官公吏ハ役場・鉄道ニ出勤スル者ヲノゾキテハ移住者ニシテ見ルベキデアラウト云ヘバ極クソ数ニ限ラレテヰル。大イナル農家ハ大家族小家族ニアラズ中家族ヲ形成シ、六七八名位ガ普通デ大イナル家族ヲ有同志デ労力ヲ目ニ合ハセテヰル。十名位ニナレバ大家族ノ方ニ入レラレル、故ニ中家族・家ナドハ小サイ子供デ農事ニ従事セシメネバナラヌノハ必然ノ事デアリ、農繁期ニ人ヲ雇フ事モ出来ナイデ二人乃至三人程ノ働ラノモ珍イ事デハナイノデアル。又コノ外ニ自作セザル地主ノアル事モ考ヘナケレバナラナイ。

(一) 産物

米作ヲ主トス。麦、甘藷、大根、里芋、馬鈴薯、漬菜、蒲鉾、茄子、小豆等主要ノ他自用ノ蔬菜ハ殆ド栽培セル。自家用ニ販売用ニ供セラル。

ソノ他ノ茶、柿、梨等ノ産ヲ見ル。

蚕業ハ盛ニシテ繭集ハ以ノ移出サル。米ト共ニコレガ主要産物ヲ占ム。之全ク桑都ト称セラルモ言フベシ。桑葉ハ春蚕、夏秋蚕ニ刈ケラ行ハル。ソノ産額多シ。先ヅ米ヨリ順次ニソノ大体ヲ見ヤウ。

(a) 米。

主トシテ食料ナドニ酒造米トシテモ用ヒラル。ソノ産額ノ昭和三年ヨリ六年ニワタリテミヤウト思フ。

米	昭和三年	四年	五年	六年
	六三九一	七一九一	七七九八	六四〇二

単位石

之ハ単ニ石高ノミヲシメシタノデアルガ次ニ作付反別、収穫高、価格ヲモ一応シラベテミヤウ。

ソノ表デミルナラバ昭和六年ハ相当減収ヲ示シテヰル。

米	作付反別	収穫高	価格	反当収穫高	単価	昭和五年度ニヨル
	三二四反	七七九八石	一三八六一七円	二〇〇〇合	一四円八二	

354 3.0.1合 4.5

大体右ノ如クデアル。次ニ米以外ノ代表的産物ヲエラベテ見ルト左ノヤウ。

(ロ)、

	作付反別	収獲高	價格	反当収獲高	單價
麦、	三三三五反	五〇二一石	三一七〇三円	一六三合	八円六六銭
甘藷	六〇	三〇〇〇〇〆	六〇〇〇〇円	五〇〇〆	二〇銭
生大根	二八五	二八五〇〇〇〆	一四二五〇円	一〇〇〇〆	五銭
里芋	二一八	六五四〇〇〆	一六三五〇円	三〇〇〆	二五銭
蕎麦	一六〇	一九二石	三八四〇円	一二〇〇合	二〇銭

昭和五年度ニヨル。

大体右ノ如シ。價格ニ於テ米ハ麦ニハルカニ勝ツテヰル、シカシ麦ノ収獲ハ米トヘダタル事少ナイノデアル。大根ハ主トシテ東光寺ヨリトレル。約右ノ中二八五〇〇〇〆ハコノ地方ヨリトレルトノ事デアル。次ニ蚕業ヲミル。

(ハ) 蚕業(繭)

繭収獲高ヲ昭和三年ヨリ六年マデニワタツテミル。

	昭和三年	四年	五年	六年
繭	二八五一四〆	三三四二三	三九四六九	三六八九八

之モ米ト同様減収ノ傾向ヲ示シテヰル。シカシ依然トシテ主要産業ノ領域ヲ示シテヰル事ハ之デモワカルダラウ。次ニ更ニ掃立枚数、價格、ナラビニ春蚕、夏秋蚕ノ別ニヨツテ見ルコトトシヤウ。

	戸数	耕宅数	収穫高	領数	平均
昼夜番	四八戸	三〇一戸	[illegible]	[illegible]	[illegible]
夏秋番	[illegible]	四七八戸	[illegible]	[illegible]	[illegible]

[illegible]

大正ノ好況ハ[illegible]

[illegible]

左ハ明和六年七月記事ノ調査ニヨルモノデアル。

制下位者	制下位者	制下位者	制下位者
国任金[illegible]	[illegible]	手[illegible]	七、六[illegible]
福島[illegible]	六、五四四[illegible]	土方[illegible]	五、八八六一
福島[illegible]	二四八二六[illegible]	福島[illegible]	五五一九
手[illegible]	六、〇二〇二	地[illegible]	五一三八
土方[illegible]	二五〇一	地[illegible]	九、四五九
	七、七四三九	手[illegible]	

手野、手、土方ノ諸氏ハ[illegible]ヲ占メテヰル。高金製産高ハ[illegible]

大部ハ[illegible]府ニ、他ハ近隣ニ[illegible]。七割ハ[illegible]、三割ハ近隣。

(二)ソノ他農作物、

前ニ言ヒシ如ク大ナル自家用ニ供セラルルモノ多シ、近年果実栽培ヲ以テ既ニ市場ヲトルヤウニナリ経営アルモ微々タルモノニシテ未ダ

ソノ中デ梨ハ二三年前ヨリ植ヱラレ、二五〇メ位ノ収穫ヲ見、柿ハ所々ニ栽培セラレタル程ノ事デハナク庭木ノヤウナ形デ植ヱラレ年々一〇〇メ位ノ収穫ヲ見ル。ソノ他茶ハ各ヲ自家用ニソノ多クト見ルベキデアラウ。

(六)家畜、

牧畜業トシテ特ニ云フベキ程度ノモノニ非ズ。副業ノ形ヲナス。特ニ豚、鶏ニ於テ然リ、牛馬ハ多ク耕作運搬用ニ供セラレ数多カラズ、牛ハ多クハ朝鮮牛ヲ飼育ス。不況ニナリテトニ養鶏盛ンニナリタル傾向アリ。今急増ノ年度別ニヨリテソノ数ヲ見ルトキハ一層明白ナラウ。

昭和三年	四年	五年	六年
豚 二六一頭	二二五	二〇七	二二七
牛 一〇八	一一八	一六七	一六一
馬 三〇	三三	三三	二一
鶏 二六三羽	二八二羽	二九六八	四五三

上表ニヨリテ鶏ノ羽数ノ増加シタルコトヲ認メラレ、デアラウ。

ソノ他ニハ大ナル変化ナキ様ニハ之ヲ

ソノ取扱ノ不便ニヨルモノナル由。

設ニ戸数別ニヨリテヤウ。

昭和五年末現在

家畜名	牛	馬	豚	鶏
飼養戸数	一六四	五三	一五四	四七
頭数	一六七	五五	二〇七	三二五

注意（前頁ノ（ニ）ト（ホ）ハ（ヘ）ト（ト）ト二段ニ）

上表ノ如クナル。

[illegible]

ニ止マル

之ヲ以テ農業ニ就テハ一先ヅ打切ツテ、

次ニザツト商工業ノ方面ヲ見ル事ニシヤウ。漁業ヲ見ル事ニスル。

(3) 商業

之ハ総論ノトコロニ於テ述ベタル事ト思フカラ詳細ハ論ルコトトシテ要点ハ

唯生産商僅カルモノヲ見ルトスル。ソレニハ先ヅ一項目ヲ擧ゲル様ナ事ハナイデアル。

音田[illegible]ニ於テハ未ダ商業ノ発展ヲ見ナイ。[illegible]商業ノ方ガ少ナイ位デアル。

[illegible]ト思フ程度アリ、商店アリ。人ノ集マル所ニ付イテ商業ノ発展ハ

[illegible]ニ組織ガナイ。今ハ他ノ御[illegible]ガ大部分デ、其ノ地デ生産シテ商フモノハ

セイゼイ農家ノ副業位ノモノデアル。今ハ野菜ナド[illegible]

[illegible]ト思フ。[illegible]

(イ) 工業

之ニ見ルベキモノナシ。セイゼイ家庭工業、家内工業ノ一部トモ見ルベキ竹細工、桶屋

ソノ他生活ニ必要ノモノヲ作ルニ過ギナイデアル。極メテ小規模ニシテ工業ト云フ程ノ事

デハナイ。

コノ話ヲ言フル事バ砂利採取ノ一事デアラウ。貞風叔父ノ名ノモトニコノ地ノ不在神主某氏ガソノ採掘权ヲ取得シタルトハ或古老ノ話デアル。コレヲ以テ考ヘルニ砂利採取ハ相当ノ仕事ニナッテヰル。

(5) 漁業

多ク川或ハ海ヲ中心トシタ産物アリ。鯉、雑魚、鮎ノ産アリ。鮎ハ約二〇〇〇〇貫ヲ一年ニ収穫スルトイフコトナリ。

(6) 林業

セイゼイ薪炭用材、竹材ヨリ副産物ヲ少ク見ルノミ。他ニ見ルベキモノアラザリキ。

以テ大体産業ノ一般ヲ終ヲ結ブ事ト思フ。不備ノ点ハ後ニ譲ルトシテ筆ヲ以テコノ項ヲ終ル。

案ズルニコノ地ノ産業ハ米穀ニ依ル事ニ見ラルルトイフモ過言デアルマイ。次ニハカヘル産業ニ関シテ諸施設、殊ニ多少ノ進歩ノ発展ノ姿ヲミルベキ助長奨励改良等ニタヅサワル機関制度ノ項ヲ設ケテ見ル事ニシヤウ。人為的条件ハ即チ之デアル。

四、産業ト諸施設

産業ニ於テハ本来ナレバ諸施設ニ関連シテソノ方策対策等ヲ述ブルガ至当ナリトハ考フルモ、アマリニソレハ経済並ビニ政治財政ノ如キ野ヲ荒スキトナルトイフオソレアルヲ以テ単ニ今日アルガマヽノ姿ヲソノ出スニ止メヤウト思フ。

唯一言スルナラバ政府ノカニヨルト共ニ自カニヨル更生ノ方法ヲ安易ゼザルニ於テハ金ノ収支ツグナハザルドン底ニ陥ルオソレアル事。ソレハ農村経済ト貨幣経済トガ一致セザル事ヲ生ズル大ナル矛盾撞着ガ大ナル原因トナツテヰルカラデアル。

一例ヲ挙グルニシテモ農産物價ノ騰貴方策ヤ肥料問題、之ニ伴フ産業組合ノ実質的ノ成績ハ注目スベキ事柄デハナカラウカ、シカレドモ事之単ニ一村ニ限ラレタル事ニ非ルヲ以テ郷土日野ノ地ノミニテハ如何トモシガタケレドモ、自カ更生ノ方法ハ全ク之郷土人ノ心ニアルヲ思ヘバ単ニ産物販売ノ方法ニシテモ必需品購ヘノ方法ニシテモ数多郷土人ノ有為ノ士ノ活動スベキ余地ガ多分ニ残セラレテヰルト言フモ過言デハナイ。

次ニ順次該郷土ニ於ケル諸施設ヲ見ル事ニシヤウ。

1) 諸組合。

○産業組合

完備セズ不徹底ナリ。ワヅカニ出荷組合ノ形ニ於テ存スルモノアルニスギヌ。

（共同販売）

万翻寺ニ於ケル出荷組合ハ見ルベキモノデアラウ。

酒造米出来出荷組合等アリ。大キイハ自然勝手ニ買買スル。

蚕業ニ於テモ繭ノ取引ニ関スル組合ノ如キモハ一般的ナルモノニ非ズ。ヤハリ自由競業ノ姿ガ見受ケラル。言ヘバ産業組合ノ形式ハトヽノハザルモ何事カノ形ニテアラハサレテヰルコトハタシカニアリ、シカシガ不徹底ナモノデアツテモソウニシテ根本的ニ望ラミウルデアラウ

肥料ニツキテ

肥料ノ方ニ於テハ原則トシテ個人的ニ購買ラナスモ時トシテ協同購入ラモ事アリ。協同購入ハ農会ニテナス。事業ハ日野町内主任肥料商（井上商店）方ヨリ購入ス。好況時ハ堆肥、作肥、緑肥ノ如キ自給肥料ノ他ニ金肥ヲ使用スル事多ク現金取引ヲナセシモ今日ノ不況ニアツテハ人ベ取引ヲ以テ行ハルル。

○消費ニツキテ

ソノ他農産物出荷ニツキテモ確固タル協定ナキ様子。例ヘバ塩、煙草、酒類ノ他必需品ナラビニ嗜好品ノ消費ニツキテモ何等確固タル協定ナキハ惜ムベキ事ト思フ。シタガツテ産業組合ナルモノハ全ク有名無実ト言ハルヽモ致方ナカル事象ハ之該町村ニノミ特有ナル事ニアラザルヤウニテ指導スル程ノ事ナカツタデアラウト思フ。

次ニハ單ニ列記スルニ止ム。

○農会

明治三十二年創立、大正九年度ニ於ケル事業ト今日ノトヲ比較スレバ一段ノ進歩アリ。
会員九四三名、コノ中六法人ヲ含ム。会費ノ総額三七六三円。
事業トシテ淳山アルガ、
品評会、共進会、講習講話会、販売購買ノ仲介、ソノ他種類ノ無償配付、病害虫防除、施肥表彰、調査等ヲアゲル事ガ出来ル。
殊ニ病害虫防除ハ小学校生徒ト共ニ力ヲヨウテヨリ実ヲアゲ、品評会ハ見ルベキモノ多シ。相当ナル発展ノ余地ヲ約サレテヰル。なおズトニ、隣業組合ノ名ニヨル[illegible]農会ニ於ケル仲介ノ事業ヲ発展セシムル事ハ一方法デアルト思フ。

○養蚕組合

日野才一――、加久美――、四村――
豊田――、川端三内――、

以後十三年内外ノモノナリ。

各部落ニヨリ。設立ハ皆大正十一年共同飼育、桑葉共同管理、指導員招ヘイ。蘭共同販売、肥料共同購入。
昭和二年大日本蚕業会ヨリ表彰サル。

○農事改良実行組合、

日野万願寺　田中清一　四〇〇〇円　谷仲山　谷兎作　二〇〇円

下田　出口久作　二〇〇、

豊田郡　遠藤義治　八〇〇、

三年ニ割ヒテ存在スル。農業ニ関スル種々ナル方面、極具体的ニ研究ヲ進メツツアル。

○水利組合、

水田ニ関係ニテ存在スルモノナリ。

費用金額未詳

日野、（四五〇〇円）石田新井（三〇〇円）宮上田畑万願寺（五〇〇円）

豊田（八〇〇円）向島（日野竹谷田治部）（二五〇〇円）ノ各用水組合アリ。

（今ハ）内ハ費用ヲ示スモノナリ。

○養蚕組合、

日野（竜徳寺広瀬、二〇〇円）ノ各組合アリ　カヲ内ハ主要者ト

豊田（山口高一、二〇〇円）費用ヲ示ス。

○畜牛畜産組合（有山亮　三〇〇円）

○郷出荘予防組合（有山亮　五〇〇円）

○酒造米生産組合（酒造業者　七〇〇〇円）

○小作組合（農家及農業ニ関シテハ作人互助ガ目的トス）

豊田堀三内小作人互助組合（有吋勘重）

日野小作人組合（生沼覚右衛）

○電気動力使用組合（日野　有山重安）苦肉籾白米販売、

組合トシテ挙ゲベキモノハ右ノ通リデアル、尚記載漏レモアル事ト思フガ、次ニソノ他

ノ設立ヲミル事ニシヨウ。

(2) ソノ他ノ設立

之ハ決シテ直接行事ノ影響ヲウケルモノデハナイガ間接ニ何等カノ影

響ヲ産業ニ及ボスモノト見テ列挙ス。

○農業公民学校

期間制ニシテ、日野尋常高等小学校内ニ於ス、家庭実習、ソノ他各種

園ノ実習ノ指導ソノ他農村生活者ニ必要ナ学修ノ機関デアル。

農閑期ヲ利用シテ之ヲ行フ。

○高等小学校ニ農業ノ課目設置アリ。

○農林省蚕業試験所日野支場

主トシテ桑樹栽培研究ニテアル、土着人ノ雇ハレル者アリテ、直接ニソノ影響アルト見ルコトガ出来ヤウ。日野ニアリ。

○帝室林野局日野支場

特別大ナル貢献アルモノト言フコトヲ要ス。豊田ニアリ。

ソノ他何等カノ形ニ於テ助長奨励政策ノ機関アル事ト思フガ、或ヒハソレ一時的オルモノナルカニ終ルカ不徹底ニ終ルカ、今後更生ノ途ハ多ハカル諸機関ノ完全ニ近キ組織ヲ必要セラレル事ハ首肯サレルトコロデアラウ。

要スルニ諸施設ノ項目ヲ終ル。

(五) 結語

序ニモ一言セシゴトク之ノミヲ以テハ如何トモシガタキ製作物デアル。

今后ノ諸賢ノ御努力ト御比正トヲ必要トスル。

長イ年月ト多ノ人々ノ忍耐ト研究心トニヨツテヤツテ御土調査ハキヅキアゲラレルデアラウ。

例ヲアゲレバ分布図ノ作製、代表農家ノ農業調査ハナサルベキ好題デアラウ。今ハ之ヲ後日ニ譲ル事ニシナケレバナラナイノヲ残念ニ思フ。

結所財政ノ仕情要求トノ重複ヲサケルコトモリデアツタガソノ結果ハ困難デアツタ。要スルニ之等調査ハ統一的根本方針ガアツテソノ後必納サレネバナラズ、繰返ニナサルベキモノトヲザルモノトヲ別ケテ考慮シメレネバナラナイ。

忽ニ間不完不備ノ点ヲ取カヒ易ク欠点デアル。

惟今諸賢ノ御研究ト之ニ完璧ノ方物ヤウ、要ハ[illegible]

昭和六、八、廿五、

交通

産業、運輸、交通ハ発達ノ主ナルモノニシテ各々其進捗ト密接ナル関係ヲ有シ産業ノ発達ト文化程度ノ進ハ貢献スルトコロガ最モ大デアル。

当来各部ノ産業ノ発達、商工業ノ隆昌、人口ノ増加、等ニヨリ交通ハ益々増加シ道路モ之ニ順應セシガタメ各処ニ改善、築造セラレテ居ルコトハ喜バシキコトデアル。

商工業地ニ立脚スル道路ノ発達スルハ当然ナルモ農村ニハ地形ニ在在セラレタル小径多ク是等ノ道路ハ車ノ牽引力ヲ殺グコト大キク、雨天又ハ冬期ニハ泥濘トナリ歩行モ困難ニシテ交通不便ナレバ是等道路ニ於テモ道路ノ改善ハ許カセニスベカラザルモノガアル。

現在町内ノ小道ノ修理ニハ町内各部落住民ニ於テ行ハレツヽアルモ毎年一ヶ所ニ過ギズ改善上ノ効果ハ微々タルモノデアル。

国道府道ニ於テハ道路漸次改善セラレ町内ニ於テモ近年各処ニ幅員ノ拡張、河配線、橋梁等ノ行ハレ交通量ニ順應スル道路トナレリ。最近千州街道ノ一部ニハコンクリートヲ以テ鋪装セラレ、又殘リノ部分ハ其測量モ終リ近

ク工事ニ着手スル運ビトナツテヰルタメ完成ノ暁ハ立派ナ鉄道ガ出来上ル
ワケデアル。

ノ甲州街道

新宿・甲府間ヲ連ネル國道ガ八王子線ニシテ、立川町ノ東端ヨリ日野橋ヲ経テ本町ニ入リ、町ノ中央ヲ貫ク西方ニ進ミ小宮村境ニ至ツテイル。延長四四七二間幅員十二間アリ。但道ハ日野橋上方日野渡場ヲ経テ本町ニ入リタルモ、大正十五年ニ野橋開通ト同時ニコノ間ハ廃止サレルニ至ツタノデアル。交通頗ル繁多ガ為ニ自動車ノ往来ハ道路ノ改善ト共ニ益々増加シ、東京・八王子方及上野原間ニ貨物ノ運輸ニ又ハ乗客ノ輸送ニ頗ル繁忙デアル。最近当町ハ東京ニ越ス松坂屋・ほていや・松屋等ノ百貨店ノ配達区トナリタルタメコノ方面ノ貨物ノ運搬モ無料ニテ行ハルタメ至ツテ便利デアル。

イ日野宿場

四 日野橋

大正十四年工事ニ着手シ、翌十五年八月開通セルモノナリ。

有効幅員七尺、橋長三六五、五尺ニシテ両側ハ歩道ニ、橋柱ハ全部コンクリート造ニ、橋面ハアスファルトヲ以テ舗装ス。橋上及両袂共十間ニ一ヶ所ニ電燈ヲ点ス。ニヶ年費ニテ六万五千三百八十九円也ヲ費シタリト云フ。

之 神奈川街道

之生村高幡ヨリ浅川橋ヲ渡ツテ宮ヶ瀬上宿ニテ甲州街道ニ合シテ日野ニ出ル。延長九九一九尺

道中八九キロ。大正十五年屈曲ノ橋正及幅員ノ拡張工事ヲ施セリ。之生村方面ヨリ日野本宿、立川方面ニ至ル要路ニシテ交通頻繁ナル乗合自動車モ運轉サレテ居ル。

3 日野五日市道

本村町ニテ甲州街道ト交レ、西ニ進ミ東光寺ヲ経テ小宮村栗ノ瀬ニテ埼玉街道ニ合シテ本村ニ。延長一、五一三九、幅員四尺アリ。本道ハ道中狭ク主トシテ日野村小宮村、加住村方面ニ通スル人々ノ往来ニ使用サレル。従ツテ自動車ノ往来ニハ適

シオイ。又交通モ一般ニ繁シクハナイ。

4 稲城街道

小宮村大和田ヨリ入リ豊田堀之内ヲ経高幡橋ヲ渡リ神奈川街道ニ合シテオル、延長三、八一四間ニシテ幅員八間アリ。稲城方面ヨリハ主ニ方面ニ通ズル要路デアリ同方面ヨリハ主ニ市場野菜運送ニ其他一般貨物ノ運搬ニ車馬ノ往来盛ンナラズ。

以上八今日道路ノ主幹ナルモノニシテ、中州街道ノ外ハ全部府道トナツテイル

コノ外下宿ヨリ万願寺ニ通ズル万願寺道、万願寺ヨリ宮部落ヲ経テ大和田ニ通ズル大和田道等アルモ何レモ道巾狭ク、屈曲多キタメ交通、運輸ニハナキモ進ム商道トナツテイル。

鉄道

本町ニ敷設サレル鉄道ハ中央線アリ、本町ノ西部ヲ貫キ西南ニ通ジテ居ル。以前ハ甲武鉄道ト称シ甲武鉄道株式会社ノ経営ニ属シ明治三十二年四月十一日新宿立川間開通シ、立川八主ト関八全年八月十一日開通トナツタノデアル。其後明治

三十六年六月吉田甲府ヘデ延ヒテ来タルニ至ツタノデアルガ明治四十年四月国有トナリ、中央線ト改称セラル。昭和五年十二月二八、浅川マデ電車運転開始セラレ後列車モ蒸氣機関車ハ電氣機関車ニ変換セラレ、現今ハ全部電気機関車ニツテ運転シテ居ル。

町田ニハ日野、豊田ノ二驛ヲ設置セラレタルモ両驛共開通ハ今日ニ至ルモ遅々トシテ発展セズ開通当時ヨリ僅カニ戸数増加シタルニ過ギナイ。其ノ如ク繁栄取残サレタル原因ハアルモ停車場位置ガ地ノ理ヲ得テ居ラナイコトハ明カデアル。即チ日野驛ハ位置ハ低地ニアリ坂ノ中腹ニテ周囲ハ全ク発展ノ余地ナキコト、又豊田驛ハ北ハ直チニ台地ニ接シ、部落ニ近キニテ其ノ上乗降客始メドコノ部落ノ住民ニ限ラレテ居ル状態ニアル等ニ起因スルモノト考ヘラレル。鉄道ノ開通ガ産業発達文化ノ発達ニ影響論デ各方面カラ敷設ノ要望ガ盛ンデアル今日ニ反シ、明治時代ニ鉄道ノ開通ハ至ルトコロデ民衆ニ反ツテ物笑ノ種トナツテ残ツテ居ル例モ少クナイ。

甲武鉄道モ敷設最初ノ予定ハ現在ノ線ヨリ南方調布、府中ヨリ、本町方面ニ通過スル計画デアツタノヲ府中方面ニテ非常ナル反対ヲ受ケタガタメ国分寺、立川ヲ経由スル現在

ノ線ニ変更セルニ至ツタノデアルト言ハレテ居ル。若シ途中同等ノ反対モナク平
屋ノ計畫通リコノ線ニ敷設セラレル時ハ本町発展ハ現在ノ線ニヨリ以上
有利デアツタコトハ思ハレル

神戸港

日野灣

明治三十二年、日本鉄道開通ト同時ニ開設セラレタルモノニシテ今日ノ運
輸交通上多大ノ便益ヲ与ヘテ居ル。昭和五年十二月電車運轉開始セラレ現
在一日ノ乗客三千人回程度トナツテ居ル。
昭和六年度乗降客及貨物ノ一日平均ノ取扱数ハ左ノ如シ

乗降客

乗客	降客
二五三人	二五二人

貨物

発送	到着
五個	一〇個

乗降客ハ全ク、五川、東京方面ノ通學生、通勤者ガ多ク、貨物ハ
米野菜味噌ノ発送、木炭、肥料、石炭到着ガ主ナルモノデアル。

以前ハ多摩川ノミニ限リ鮎漁ヲ取扱ヒ居リ、来リシモノニテアリシガ、近年鮎ノ稚魚ハ殆ント消滅セントシテ居リ。

○豊島鱒

明治三十四年二月渓川砂利鮎ヲ目的トシテ設置セラレタルモノニシテ鮎魚、化貝類外電鰻取扱モアリ。

昭和六年度乗降客及貨物ノ百分比、乗降客ハ左ノ如シ

乗降客　乗客　降客　発送　着送　貨物（到着合ス）

一〇〇人　一〇〇人　二個　三個

○他ニ多摩川鮎釣ハ秋ニ多摩川信号所アリ。多摩川砂利鮎ヲ目的トシテ明治三十三年八月開設セラレタルモノニシテ、同所ヨリ支線トナリ現在ハ多摩郡稲城村地先マデ延長シ二ノ間ヨリ積ミ出サルル砂利ヲ立川駅ニ輸送シテ居リ。

ニ乗合自動車

存生電車高崎駅前ニリ　神奈川街道及甲州街道ヲ通リ立川駅前ニ至ル間ヲ運轉スルモノニシテ、大正十五年運轉開始セリ。始メ大九組ノ経営ニシテ、ソノ後現在ハ要ツテ東京市民ノ手ニヨツテ経営ニカレテ居ル。年前文部省ハ電燈電力行ヲ始メニ百十五回住復運轉シ、明治ノ交通ニ貢献スルコトガ多ク。

他ニハ生方市街自動車会社ノ経営ニシテ、ソノ本社ハ駅前ニ日野橋北横間ヲ運轉スルモノアルモ乗客少ク不便ナリ。一日僅カニ二、三回運轉スルニ過ギナイ。

通信

日野郵便局

日野町五六〇四番地ニアリ。明治七年二月一日設置セラレ三等郵便局ニシテ郵便、電信、電話、取扱ヲ行フ。郵便ノ配達区域ハ日野町及生村ニシテ日野区域ハ二里地ハ一里配達ヲ行ヒテ居ル。電信ハ大正十年十一月十一日ニ、電話ハ昭和三年四月一日ニ開通セリ。現在電話加入者ハ三十名アリ。

昭和六年度ノ通常郵便物ノ引受数ハ一人平均四七二通、配達数ハ二八六四・九通デアリ、コレヲ人口ニ割当ル時ハ一人当リ三通ノ郵便物ヲ差出シ、又五十二通ノ郵便ガ配達サレタワケデアル。

小包郵便及電報ノ昭和六年度中ノ取扱数ハ左ノ如シ。

小包郵便		電報	
引受数	配達数	発信数	受信数
九・八	一八二四	一・四二	二二七七

ラジオ加入者

ラジオ加入者ハ昨年ニ四十名ニシテ戸数三千五百戸ニツイテ一戸ノ加入ノ割合デアル。

交通運輸使用スル諸車ノ数

昭和六年九月一日現在ノ諸車数ハ左ノ如シ。

自轉車	六四九台	リヤカー	一四五台
手車	四三八	牛車	一・四

京王電車高幡駅前ヨリ神奈川街道及甲州街道ヲ通リ立川駅前ニ至ル間ヲ運轉スルモノニシテ、大正十五年運轉ヲ開始セリ。始メ大丸組ノ経営ニセシモノデアツタガ現在ハ乗ツテ来島氏市氏ノ手ニヨツテ経営サレテ居ル。年前六時。分高幡発立川行ヲ始発ニ一日十五回往復運轉ニシ、四人ノ交通ニ貢献スルコトガ多イ。

他ニハ主ヲ市街自動車会社ノ経営ニ属スルモノデ、本人主ヲ駅前ヨリ日野橋北陸閉ヲ運轉スルモノアルモ乗客少ケレバ一日僅カニ二、三回運轉スルニ過ギナイ。

四 通信

日野郵便局

日野町五六〇四番地ニアリ。明治七年二月一日設置セラレ三等郵便局ニシテ郵便、電信、電話ノ取扱ヲナス。郵便ノ配達区域ハ日野町及生村ニシテ日野区域ハ二回他ハ一回ニ配達サレテヰル。電信ハ大正十年十一月十一日ニ、電話ハ昭和三年四月一日ニ開通セリ。現在電話ノ加入者ハ三十名アリ。

昭和六年度通常郵便物引受数ハ一人当ニ六四、四七一通、配達数ハ六八、四〇九通デアリ、コレラ人口ニ割当ル時ハ一人当リ三千通ノ郵便物ヲ差出シ、又五十三通ノ郵便ガ配達サレル勘ニナル。

小包郵便及電報ノ昭和六年度中ノ取扱数ハ左ノ如シ。

小包郵便		電報	
引受数	配達数	発信数	受信数
九〇八	一八三四	一〇四二	二二七七

ラジオ加入者

ラジオ加入者ハ僅ニ四十名ニシテ戸数三千五百ニツイテ一戸加入ノ割合デアル。

交通運輸ニ使用スル諸車数

昭和六年九月一日現在ノ諸車数ハ左ノ如シ。

自轉車	六四九台	リヤカー	一四五台
手車	四三八〃	牛車	一〇四〃

馬車　一一台

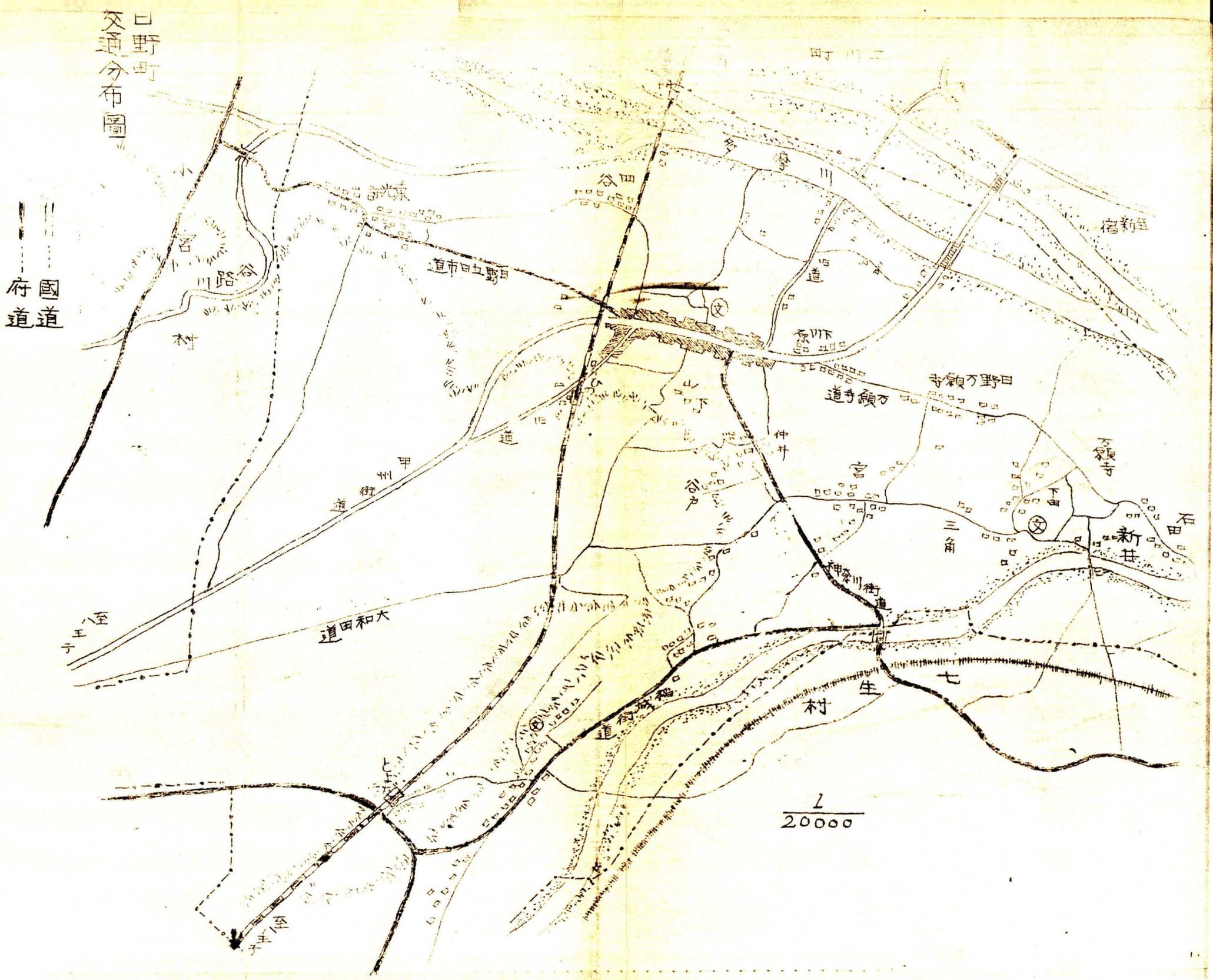
自動車
- 客車　二〇
- 貨物車　三〇

オートバイ　一〇

人力車　三〇〇

以上ノ内自動車ハ其ノ首位ヲ占メ之ヲ人口ニ割当テル時九人ニ対シ一台ノ割合ト
ナル。

日野町交通分布圖


國道
府道
日野町
上川町
宿新
日野五日市道
谷路川
村
道
下川原
日野万願寺
万願寺道
仲井
宮
谷戸
三角
下田
新井
石田
神谷川街道
七生村
稲城
道街城稲
大和田道
至八王子
至八王子
1/20000

政治

序

行政ノ機関

各種行政ノ内容大要

一般郷土民ノ自治心ノ有無状況

行政以前ノ自治的施設ノ状況

他郷土トノ比較

其ノ他政治ニ関スル事項

序

今回東京府ヲ一丸トシテ郷土教育資料調査ヲ行フコトニナリ　本校ニ於テモ暑休以前ニ既ニ各種目ヲ分担シテ調査ニ全力ヲ注ガ中心合ハセラシタガ　暑休ニ於ケル休暇ハ弱イ人間ヲ安逸ニ慣ラセ　又奉職日浅イモノニハソノ調査ニ色々ノ不便ガ感ゼラレ　ソノ他ノホサイ原因ノタメニ女々シイ苦労ト憂念ニノミ終始シ　随ツテ責任休暇トモイフベキ我サレタ課題ニ対シ　或ル重荷ヲイ気持ナガ思ヒ切リ取去ルコトガ出来ナカツタ　カウヤウコトハ反面自分ノ職分ヲ考ヘツメル導イ悟ミデハアラウガ　所詮ハ未人ノ悔ニ過ギマイ

受持ハ授業デアル　ヨリ動キ　ヨリ急ヅイテヰル所謂生キタ政治ノ様断面ヲ重クシハ到底ソノ為デハナイガ　外廓ダケデモトイフ政治調査デサヘ相当ニ困難デアル　我々教師ハサウシタ方面ニ可成リ縁遠イ立場ニアリ　又児童教育ノ最大ノ基礎ニ立脚シ歴史ハ能事終レリトシタ傳統的気分ガ枝ケ切ラナイ傾ニアラウ　矣デモ　常識ニ欠ケル処アリ　実情ニ疎イトイフ評價ヲ往々ニ受ケ易イ

ソノ内ノ一般位イ自分ハ　中等学校式ノ教科書的政治研究調査以上ニ出ラレナイ事ガ眼ビシクナツタ　コノ寂寥ヲスツカリ清算スベク思ヒ余ツタ自分ハ　本所区役所ノ中心人物　助役土方賢一氏ニ教ヘヲ乞フタ　以下ノ調査項目ハ同氏ヨリノ厚意ニヨルモノデアルコトヲ感謝シテ特ニ所記シナ

ダテハナラナイ謙虚ノ心持ヲ覚エル

農村救済ガ全国ヲ挙ゲテノ大童ノ問題デアリ　帝都ニ近イ本町ノ純農経営ノ指導ニ犯殺サレテヰル町当局者ノ幹部トシテノ上方氏ノ意母ノヤウナ人格ニ感激サレ乍ラ　只今臨時議会デ可成リ真剣ニ討議サレテヰル農村救済ガ政党政派ノ意地ヤ体面ナドデコダハリゾケラレテヰルコトハ悲シイ現象デアルコトヲ思フ　傳フル所ニヨレバ「挙国来價」及ビソノ削除ナドハ泥ヲ喰ヒ藁ヲ口シテ後ハ何ヲ……トイフ蒸ノ悔ヒノ如クニ行キ詰ツテヰル今ノ農家、中商工業者ニトツテハ有リガタ迷惑デアルトノ由

「最大多数ノ最大幸福」トハ言ヒフルシタ政治ノ勿論ヲ表ハシタ語デアル陛下ノ赤子デアルベキ一人々々ノ生活ハ厳粛デアリ　ソノ生活ヲ通シテノ政治ニ於テ初メテ本當ノマツリゴトガアル

神ニ誓ツタ森厳ナ政治　祭政一致ノ床シイ日本デアツタ

古ヘノ認ハレタ善政良治ダ辿ツテミルト　其処ニ指導者ノ人格ノ反映ガ必ラズアル　政治ハ人デアルガ　ソノ人ハ真ノ人格者デアリ　民ノ悲シミヲ悲シミ　憂ヲ　慰ビヲ共ニスル人格政治デナケレバナラヌ

政党政治ノ云々サレルヤウニナツタノガ何処ニ原因スルカハ自ラ判然トシテヰル

更ニ人格政治ノ上ニ意志ノ相違ヲ附ケタイ

「清ク　明カニ　厳ダノ強イ意志デナケレバ最大多数ノ幸福ハ望ミ得ラレマイ

(2)　(1)

本野ハ南部ノ最有力町村デアリ　本郡ハ三多摩ノ中心的位置ニアル　先輩者　先人ニハ政治史ニ残ル数多ノ人物ガ輩出シテヰル

コクヲミ多摩壮士ト呼ビ名サレルコトヲ耳ニスルガ　昔イフ国事犯的壮士ノ意味ノ所謂ナルコトハ　現代ノ安協苟合ノ政治慣例ニ対シテハ一服ノ清涼剤ノ感ガアル　イフ所ノ人々ハ自己ヲ空シウシタノデアル

鋭ク鋒カス強イ意志ヲ心カラ欲スル

人格ト意志ノ政治ハ　現代的数腹奉仕ノ善政ガ展カレル基デハアルマイカ

土方氏ノ資料提出ニ感泣シナガラ　現代政治ニ対スル　直ク頭ニ響イタ所感ヲ物シテ序言ニ代ヘル　生キタ政治ヲ高潮シタ手前余リニ観念的　理想的デアルカモ知レナイガ　所感トシテハ生々トシタ自分ノ多感性カラニジミ出テレタモノデアル

最後ニ政治問題トモイフベキコトハ　所謂人間感情ヲ興奮カラ喝シ出サレ易イガ　分少シモ文字通リノ純理主義ニ終始サレルコトヲ希フ　生々シイ人間政治ダカラト言ッテシマヘバソレ迄デアルガ　其処ニ人格政治ノ這入リ込ム間隙ガ十二分ニアルノデハアルマイカ

新聞政治記事ニアルヤウナ形式ノ政治論説モ悪クナカラウガ　自分ノ立場ト知識トシテノ貧弱サヲ覚エル故者畧シテ擱筆スル

政治

一行政区劃

南多摩郡日野町大字
日野　豊田　川辺堀ノ内　上田　宮　下田　満願寺　新井　石田
西長沼　栗ノ須　南平　平山

一行政機関

町会
町会議員数　一八名
平野英助　日野万吉　加藤文吉　中島四郎　真住金蔵
土方新九郎　土方慶太郎　生沼久作　日野徹三
生沼傳蔵　内藤保　中村家三　佐藤修二　真住國五郎
清水本力蔵　阿川速治郎　志村吉三　河野静正

行政執行機関
町長　有川亮

行政執行補助機関
助役　土方賢一
收入役　土方謹一郎
書記　八名

學務委員　八名
衛生委員　二名

各種行政ノ内容大要

（昭和七年度統計）

（教育）

(イ) 小學校費　一九九四七円
(ロ) 尋常高等小學校　一
(ハ) 學齢兒童數　一一〇八人
(ニ) 小學兒童數　九四一人
(ホ) 小學教員　二一人
(ヘ) 校医　四人

(7) 教員俸給　一五五四〇円
(8) 農業公民学校費　二三三〇円
(9) 青年訓練所費　八〇三

一 社寺

神社
村社　六
無格社　五

寺院
真言宗　六
天台宗　一
日蓮宗　一
臨済宗　二
浄土宗　一

一 兵事

現役六年検査人員　七〇
内甲種合格者　一七

昭和七年検査人員　六三
内甲種合格者　二二
在郷軍人　四五〇
在郷軍人経費　二五〇円

一　産業

田畑耕作反別
田　一九六町
畑　二四六町
農家戸数　六九五戸
耕作反別一人当
田　三反八畝
畑　五反五畝
麦作付反別及生産高　三三五町　一五〇〇俵
麦作付反別及生産高　三四四町　五三三一石
其他雑穀蔬菜果実　三二五九二円
養蚕戸数　一二八戸
再　春　五五八戸
秋　五七〇戸

收穫高及價格　一八三四石　一〇八二二〇円
菜畑反別　一七〇町

家畜
馬　一七
豚　二五〇
雞　三五〇〇

漁業
（多摩川及筏川ニテ、溪蝦高）
鮎其他雜魚　四八三六円

衛生
医師　四人
産婆　二人
隔離病舍　二棟
收容人員　二七人
現在收容患者　三人

運輸及交通
國道　一線

府道　四線
町村道延長　二一六〇二米
郵便局　一
普通電話ノ設備アリ
鉄道
市天候変化　月平均　豆四斗
諸車一
荷馬車　一一
荷車　四三一
自轉車　一四九
人力車　三
自動車　乗車二　貨物　三
小船
動力ヲ有スル者　三

一戸数

戸数
戸人口　四五九戸
男　二三七

使用料手数料　八二四
支付金　一〇九二
國庫下渡金　六四五〇
補助金　二八四五
其他　一〇四四九
歳入　四七四五九円
役場費　九三一九
教育費　二九三三
衛生費　一〇三一
地方改良費　四五〇
小學校費　一九九四七
勧業費　一七二
基本財産造成費　三六六
補助金　一七二〇
調査費　三七〇
産業振興事業費　三九二二
其他　七二二九

一般郷土民ノ自治心　有無状況

本町ハ南多摩郡ノ北部多摩川・浅川ノ合流点ニ起リ　西方次第ニ其ノ幅員ヲ増シテ小宮村ニ接シ　東北多摩川ヲ隔テヽ北多摩郡立川町谷保村ニ　南ハ浅川ニ跨リテ本郡ノ之生村ニ境シテヰル　鉄道中央線一貫ストハ言フケレドモ　地勢ハ恰モ一孤島ヲナスノ観ガアル

南方八王子市及北方立川町ノ異狀ナル発展地ヲ控ヘ　此ノ間ニ介在シテ文化ニ対スル地利的劣勢ノ位置ニアル関係上　都會ノ風習モ亦浸潤ノ度合ヒ浅ク　純朴ナル農村ノ氣風ハ他町村ニ比シテ多量ニ保持スルヤウニ観察セラレル

住民ハ殆ンド土着ノ民ニシテ少数ノ外来移住者ガアルバカリ　所謂昔ナガラノ五人組制度（向フ三軒両隣）ガ厳存シ　冠婚葬祭ニ當ツテハ在リカラノ隣保相愛ノ美風ガ満厚デアル

又本町土木費ニ就テコレヲ観ルニモ　町當局ニ於テノ土木費ノ如キハ　九牛ノ一毛ニモ相當シナイ僅カノ經費ヲ計上スルノミニテ　予算ノ形式ヲ整フル為ノ小額ニ過ギナイ　コノ小額ナル所以ハ　即チ道路橋梁ノ改築改修等土木工事ニ対スル旧来ノ慣習上　各部落ノ自治的施設ニ任セテ敢ヘテ當局ノ費ヲ要セズ　而カモ他町村ニ比シテ優ルトモ劣ルナキ現狀ヲ維持シテヰル

コレ自治的精神ノ充實シテヰル住民ノ行動デアリ　即チ健全自治的平和ノ證左トモ言フベキ　町當局者モ後ニ三嘆ヲ惜シマナイトノ事デアル

財政

一、財政ノ沿革大要

二、歳出入ノ概況

三、公有財産ノ状況

四、地方債ノ有無ト其ノ使途

五、納税状況及納税奨励法並ニ滞納状況

六、農村ノ負担軽減ニ就イテ

七、結論

一　財政ノ沿革大要

我ガ国大古ノ行政区劃ハ六州ト十四島デアッタ。神武天皇即位ノ時功臣ヲ賞シ国造・伴造・県主ヲ置キ和銅年間ニ至ルまデ国造ノ官ハ百四十余アッタ。孝徳天皇ノ時国司・郡司ヲ置キ国造ハ廃止ナッタ。当時国ハ大、上、中、下、郡ハ大、上、中、下、小ノ五トシテ国司ハ中央ヨリ任命サレ郡司ハ世襲トシタ。郡ノ下ニ里ガアリ五十戸ヲ一里トシタ。

カクシテ国司、郡司ハ各々ソレゾレ国郡内ノ財政其ノ他ノ事務ヲ取扱ッタ。第十代崇神天皇ノ十三年初テ貢物ヲ人民カラ取ッタ、ソシテ更ニ第三十六代孝徳天皇ノ御代前述ノ如ク国司・郡司ヲ置キ田地ヲ分チ租、庸、調ノ税法ヲ定メテ、糸布織物等各地ノ産物ヲ納メサセタノデアル。コレガ租税ヲ取リ立テ、公ノ費用ヲ辯ジタソモ〳〵ノ始メデアル

此ノ制度ハ方四十代文武天皇ノ御代ニ改正サレ新ニ財政ノ官制ガ布カレタ。即チ田制デアル。コレハ男ニハ二段、女ニハ其ノ三分ノ二ノ土地ヲ与ヘルトイフノデアル。（但シ当時ノ一段ハ現在ノ三百六十坪ニ相当スルトイフ）租税トシテハ収穫ノ百分ノ三ヲ納メシメタ。其ノ他庸、調ノ制度ガアルガ此レハ孝徳天皇ノ大化ノ改新ト同様デアッタ。

奈良朝時代ニ至リテハ荘園ナルモノガ漸ク多クナッテ、シタガッテ国司、郡司ノ官名モ名バカリトナリ、次ギデ延宝朝ニ至リテ益々多クナリ、藤原時代ニナッテハ土地等ハ武門ノ私有物トナルニ至リ、徳川時代ニナルト更ニ進ンデ諸国割據ノ封建時代ヲ固定セシメタ。即チ徳川氏直轄ノ地ニハ郡代、代官、勘定奉行其ノ他所司代城代ヲ置キ、諸国ハ諸国奉行ヲ置イテ其ノ地ヲ統治セシメタノデアル

此ノ時代地方ニハ如何ナル制度ガ存シテ居タカトイフニ、五人組トイフノガアッタ、コノ五人組トイフノハ隣保相扶スル五家ガ相寄ルコトヲ要素トシテ成立ッテアル。五人組ノ中特ニ一家ヲ推シテコノ長トナシタ、コレヲ組頭等頭、或ハ伍長ト言ッタ、ソモ〳〵コノ五人組ノ名称ノ起ッタノハ慶長年間デアルトイフ。

[illegible]ル所ハ

一、 租税ハ必ズ上納ス

二、 法令ハ必ズ遵奉ス

特ニ財政ニ関係深キモノニシテ奉ゲル。而シテ此等ノ規則ニ背ク者ガアレバ五人組ハ連帯ノ責任ヲ負ハネバナラヌコトニナッテ居ル。此ノ制度今モ尚存シテ居ル。

次ニ町村ハ如何ニシテ発達シテキタカト云フニ各地ノ血族ガ次第ニ増加スルトソコデ分家ガ起リ又更ニ分家シ分離シテ村ヲ形成シ、更ニ繁殖シテ町ニ進ミ自治団体ヲ造ルニ至ッタノデアル。徳川時代ニハ其ノ長ヲ名主トシ其ノ任務ハ、

一、 租税ヲ徴収スルコト、

二、 裁判ヲ執行スルコト、

三、 其ノ他法令ノ布達、殖産振興事業、村民ノ保護、其ノ他諸種ノ調査、領主代官ノ命令ノ執行等

デアッタ。名主ノ下ニハ更ニ組頭、百姓代ガアッタ。此レ等ハイズレモ当番制デアルカ、或ハ選挙制デアッタ

此ガ前期ニ於ケル財政発展模様デアル。此ノ時代ニハ予算トカ決算トカ云フコトハ明ニナッテ居ラナカッタラシイ、歳出入ニテ算ノ明ニ定メラレタノハ明治六年以後デアル

徳川幕府ガ大政ヲ奉還シテ明治新政ガ創メラレタ時、明治五年頃縦来ノ庄屋、名主、年寄ヲ廃止シテ新ニ正副戸長ヲ置キ、更ニ数ケ町村ヲ合シテ区長ヲ置キ地人民ニ関スル一切ノ事件ノ処理ヲナサシメタ。翌六年ニハ予算ノ制ガ定メラレ更ニ八年ニ至ッテ会計年度トシテ[illegible]コトモ定マリコノ時漸ク財政モ形式ヲ整ヘテキタ。

而シテ此ノ時ハ何時カラ何時マデヲ会計年度トスルトイフコトガ現行ノ四月カラ翌年ノ三月マデトハ異ッテヰタ。
明治十二年頃ニハ郡区町村編成法ヲ発布シ府県ヲ分割シ、特ニ人口密集スル市街地ヲ区トシ他ハ総ク
郡トシ八百三十九郡ガ此ノ時ニ出来タ。
カク郡ハ定マッタガ後年郡制ハオ五十議会ニテ廃止ナッタ、但シ郡ノ名称ノミハ従前通リデアル。而
シコレ等ノ制度ガ修正ヲ加ヘラレテ現今ノ制度トナッテ運用サレテヰルノデアル。
南、西、北ノ三多ク郡ハ維新ニ於ケル廃藩置県時神奈川県ニ属シテヰタ。ソレガ東京府ニナルニエッタ理由ハ
東京市ノ水道問題ヨリ東京府ニ境界変更サレ明治二十六年四月一日ヨリ東京府トナッタ、此ノ併合ニハ隨分
反対意見ガ激烈デアッタ、其レハ如何ナル理由ニヨルカトイフトソレハ租税ガ多クカヽルカラトイフ事ナコガ原因シ
テヰルラシイ。　以上一般的ニ書イタガ次ニ日野ニ就イテ調査シテ見ルニ、
日野町ハ以前ハ数ケ小村ニ分立シテ居タノデアルガ、経済的、財政的ノ事情ニヨリ或ハ其他ノ理由ニヨッテ
合併シ今日ノ町ヲ形成シタノデアル。更ニ合併以前ニサカノボッテコレヲ分解シテ見ル。
明治三十四年以前ハ桑田村ト日野町ニナッテ居リ更ニ前ニハ桑田村ハ豊田、川辺堀之内、上田、宮、三角、田
村、田村新田、新井、石田ノ九村ニナッテヰタ。コレハ神奈川県時代デアル。其レガ町村編成法ノ実施トマッテ
小村ニテハ非常ニ財政ノ負担ニ耐ヘ得ラレナクナッテ来タ、ソウイフ所ヨリ合併トイフコトガ起リ合併サレタノデア
ル、コレガ赤坂村ニシテ更ニ後年旧日野町ト合併シ今日ニエッタノデアル。
今ノ大字日野ハ(旧時日野本郷)土地日野領ニ属シテヰタ、他ノ大字ハ不明デアルガ大体同ジデアラウト思ハレル。
ソシテ日野宿ト称シテ居タ時モ町トナッタ合併前ニモ他ヨリ比較的財政、経済上余裕ガアッタ。
トイフノハ甲州街道ノ渡船ガアリ、割合重要ナ宿場デアッタカラデアル、此ノ渡船ハ最近日野橋ノ出来ル
マデ存シテヰタ、コノ郡ニ割合ニ余裕ハアッタガ旧日野町ノミニテハ一町トシテ独立シテ行クニハ稍
ニ難過ノ困難ト同時ニ宿場モ繁盛シナイ、一方旧桑田村モ同様ノ状態ニアッタラシイ、
合併シテ日野町ヲ造ベバ縦横ノ如キ困難ハナイダラウト、其ノ他理ハアッタラウガ合併サレタ

合併当時ノ予算ヲ掲ケテ此処ニ記シテミル、

明治三十三年、及ハ合併ノ前年デアツタカラ予算ハ二ツデアルガ、来田村ノ予算ヲ見ルニ村ノ予算、四五百小学校予算、下田小学校予算ニ分レテ居タ、合併サレタ年三四年ノ分ハ町ノ予算、日野ヨリ常高等小学校予算、下田小学校予算ニ分レテ居タ。公債ハ三十四年度ハ四月ヨリ六月マデ、七月ヨリ翌年三月マデトシテ組立テラレテアツタ、何故学校予算ガ右様ノ如クデアツタカトイフノニ各々ニ於テ費用ヲ負担シテ居タ為デアル。三十四年度ノ才出入予算ハ四千九百七十余、七。我デアル、三十五年ノ予算ヲヨリハ總括シテ計上シテアル。

又三十三年及三十四年及ノ予算ヲ見ルニ約七割ハ教育費ガ占メテ居リ、諸種ノ事業費等ハ極ク小額デアル、最後ニ付ケ加ヘル事ハ日野町ノ畑トカ、水田等ハ合併以後ハサシテ大ナル変化ヲナシタ所ハ無イノデアル。

二、歳出入ノ概要

左ニ日野町歳出入予算ヲ掲ケテ見ル。

一、日野町歳出予算、

種別 / 年次	明治三十五年度	昭和六年度	昭和七年度
一、公議費	二八円〇〇	二三四円〇〇	二三四円〇〇
二、役場費	一二五六、五〇	九五七九、〇〇	九三一九、〇〇
三、土木費	五、〇〇	五五、〇〇	五五、〇〇
四、小学校費	二四四八、三八	一九七〇七、〇〇	一九九四七、〇〇
五、農業公民学校費	〃	二三六〇、〇〇	一六〇〇、〇〇

経常費	臨時費
六、青年訓練所費	六〇三〇〇
七、育英費	三五二八〇〇
八、地方改良費	三六〇〇〇
九、傳染病予防費	二四五〇〇
一〇、隔リ病舎費	八〇六〇〇
一一、衛生費	二四〇〇〇
一二、火葬費	二五七〇〇
一三、勧業費	四二〇〇
一四、警備費	五七〇〇
一五、基本財産造成費	三六六〇〇
一六、財産管理費	三〇八〇〇
一七、記念村保存費	二〇〇〇
一八、諸税	五〇〇
一九、雑支出	一二一〇〇
二〇、神社費	三〇〇〇
二一、予備費	一〇〇〇〇
二二、公債費	四一〇〇〇
二三、社会事業費	一〇〇〇〇
二四、救助費	五〇〇
経常費	四二六一三六三
臨時費	六一三七五〇〇
	四二〇一五〇〇

歳出予算ニ於テ明治三十五年度ヨリ昭和六年マデ三十ヶ年ニ約十五倍ニ膨脹シテヰル、モツトモ昭和六年度ハ産業振興資金等ガ含マレテヰルカラデアツテコレヲ昭和七年度ニ比較シテ見ルニ約十倍ニ当ツテヰル時代ノ進運ニ倶ヒ経費ノ増加又止ムヲ得ナイコトデハアルガ尚幾分カ節約ハナシ得ラレヌデアロウカ。然シナガラ全国平均ノ地方費膨脹率ハ二倍弱ニ比スルト幾分カハ減少シテヰル。

合併当時ト現今ニ於テ如何ナル方面ニ多額ノ費用ヲ用ヒテヰルカハ表ニヨリ明ニ示シテヰル、産業費ハ昭和七年度ニ於テ急増シ居ルハ産業振興ノ為ニ奨励費トナシタカラデアル、

日野町歳入予算

種目	明治三十五年度	昭和六年度	昭和七年度
一、財産収入	、	、	、
二、使用料手数料	一〇〇〇	七三九〇〇	八二四〇〇
三、交付金	一〇二四〇	一一九九〇〇	一〇九二〇〇
四、国庫下渡金	、	六八五〇〇〇	六四五〇〇〇
五、国庫補助金	、	五〇〇〇	五〇〇〇
六、府補助金	、	二四六九〇〇	二二二七〇〇
七、寄附金	、	二二六四〇〇	二〇一二〇〇
八、繰越金	五〇〇	二七二五〇〇	二七〇〇〇〇
九、雑収入	四五〇〇〇	八六一〇〇	八六一〇〇
一〇、町税	三六〇三九六三	二五七一七〇〇	二五七九九〇〇
二、御下賜金	、	三六六〇〇	、
三、町債	、	一八一三五〇〇	、

合計	四二六、三六三	六一三七五、〇〇	四二〇一五、〇〇

歳入ニ於テ見ルニ町税ノ非常ニヨクナツテ居ルコトハ相当注目ニ値スル。
之ヲ要スルニ歳出入ヲ見ルニ歳出ノ主要部面ヲ占メテヰルノハ小学校費、役場費、其ノ他農業公民学校費、青年訓練所費、青英費等ニシテホトンド大部分ヲ占メテヰル、又国庫下渡金ハ義務教育費国庫補助費デアル。

三、公有財産状況

本町ニハ牧益アル公有財産ハナイ、部落有ニ属スルモノハ三四アルガ町トシテ牧益アル財産ハナイ、次ニ不牧益財産ヲ参考上アゲテオク、

不牧益財産

物品 種別	役場用 点数	役場用 価格	小学・校用 点数	小学・校用 価格	傳染病舎用 点数	傳染病舎用 価格	管理方法
諸器械器具	一二	八九円	六〇	一二〇〇	一五	四五	町長管理
図書	二五〇	三一五	三四八	五五〇	一六〇〇	四五	一一〇三	〃	〃
計	四九九	六五二	一〇八五	三五八〇	六〇	一四八	

日野尋常高等小学校敷地、

日野寿常高等小学校舎及教員住宅後場隔ヶ病舎火葬場建物

土地					
地目	筆数	段別	地価	価格	管理方法
学校敷地	三	六五〇坪	、	一三〇〇円	町長管理
病舎敷地	一	一一九〇	、	三〇〇	
紀念木敷地	二	九	三五	三六〇	
計	六	一八五三	三五	一八六〇	

種類	棟数	建坪	價格	管理方法
醫師ト夕ン葺二	三	二八六、五坪	二〇、〇〇〇円	町長管理
仝 平家	二	二九、〇	七〇〇	
仝 瓦葺二階建	一	二四、〇	七〇〇	
仝 ト夕ン葺二階建	一	二一、〇	五〇〇	
仝 ブリキ葺土蔵	一	九、〇	五〇	
仝 平家	一	五七、三	七〇〇	
病舎ト夕ン葺平家	三	一〇八、五	一一〇七四	
仝附屋 平家	一	六、〇		
本瓦葺平家	一	三九、〇	三九〇	
仝	一	三七、三	三五〇	
火葬場	一	八、〇	一〇三〇	
仝		三、〇	四六九	

計	一七	六二八、六	三五八	六二	

部落有財産ハ町トシテハ収益ハナイノデアルカラ、茲ニハ擧ゲナイ、以上ガ町ノ収益財産トナッテヰル。

茲ニ注意スベキハ町有ノ財産ヲ多ク有スト云フコトデアル。カク多クノ財産ヲ有スルトコロリ町民ハ大ナル利益ヲ得ルコトガ出来ル。即チ部落有財産ナリ其ノ他ノ地ヲ購入シ、コレヲ大イニ利用シ収益ヲ擧ゲテ町税等ノ負擔ヲ軽減シテ行クト云フコトデアル。

然シ土地等ヲ買用ヲ投ジテ現在購入スルコトハ仲々困難ナコトデアルガ、共有地ヲ植林シテ基本財産ヲ造成シテ行クノモ一ツノ方法デアル。何ハトモアレ公有財産収入ノ多イコトハ税ヲ軽減スルニ役立ツノデアル。

四、地方債ノ有無ト其ノ使途

本町ニハ地方債即チ町債ト称スルモノハ無イガ、昭和六年ニ反ニテ金千圓ニ表シテヰル町債ハ一万八千百三十五円トナッテヰルガ、此レハ失業救済、産業振興資金ニシテ純然タル町債トハ性質ヲ全然異ニシテヰル。

五、納税状況及納税奨励法並ニ滞納状況

一、納税状況

本町ニ於ケル納税状況ハ如何ト云フニ昭和六年度直接国税府税ニ付イテ左ニ表示シテ見ル

直接国税府税額調　　昭和六年度分　日野町

直接国税									府税（都市計画特別税ヲ除ク）							合計	
地租（特別地税ヲ含ム）	営業収益税	所得税（第三種ヲ除ク）	資本利子税（甲種ヲ除ク）	其ノ他	計	同上一人当リ	国税附加税（特別地税ヲ含ム）	営業税	雑種税	家屋税	計	計	公上一人当額
六六三一	五五三	一五七六八	七六		三九八八	四〇五三	七〇四三	二二五	二八〇四	二八七〇	三九九四	三五九三〇	六三三三

一人当リ国税八四円強、府税及国税一人当ハ六円三三銭三厘ニ当リ合計三万五千九百三十円ノ巨額ニ上ッテ居ル。

二、納税奨励法

日野町納税奨励規程、

第一條　本町ハ納税奨励ノ目的ヲ以テ納税奨励金ヲ交付ス、

第二條　納税奨励金ハ本町税ニ対シ指定期日内ニ納入シタル個人又ハ團体ニ対シ之ヲ交付スルモノトス

第三條　納税奨励金ノ交付割合ヲ定ムルコト左ノ如シ

一、個人ニアリテハ令書一通ニ付金弐拾銭及納税額金壱円ニ対シ金壱拾銭ノ割合ヲ以テ納入ノ都度之ヲ交付ス

二、團体ニアリテハ令書一通ニ付金参拾銭及納税額金壱円ニ対シ金壱拾銭ノ割合ヲ以テ納入ノ都度之ヲ交付ス

第四條　十人以上合同シテ納入シタル場合ハ團体ト認ムルコトアルベシ

第五條　引続キ一ヶ年間指定期日内ニ完納ヲ了シタル向ニ対シテハ特ニ記念品ヲ贈リ之ヲ表彰ス

本規約ハ昭和六年七月十日ヨリ之ヲ施行ス

昭和六年三月三十日

右ノ如キ規程ヲ作ッテ納税ヲ奨励シテヰル。

三、滞納状況

昭和七年度町税納税状況調

昭和七年度町税予算	七月十五日マデニ調定シタルガク	同上納税済額	七年度町税滞納者
二五七九九円	一一四七七	七二五五	四二二二

滞納者ノ多イトイフコトハ非常ニ困ル問題デアル、コレハ現下ノ深刻ナル不況ニ原因シテヰルコトハ論ヲマツマデモナイ、然シ自治ノ運用上又国家トシテモ滞納者ノ続出スルトイフコトハウレウベキコトニシテ、国民ノ義務ヲハタサヌ者トイハネバナラナイガラ納税義務ノ念ヲ充分ニ養フコトニ務メネバナラナイ、

六、農村ノ負担軽減ニ就イテ、

現下ノ農村ガ不況ノドン底ニ沈倫シテヰルコトハ、農村振興ノ声ノ大ナルニ見テ明ニ知ルコトガ出来ル

然ラバカクナツタ原因ハトイフニ一ニシテ足ラナイガ、私ノ思フニハ遠因トモイフベキモノハ維新以来ノ政府ノ商工政策ト其レニ加フルニ農村ノ無自覚即チ時代ニ順応シナカツタトイフ点ニアルト思フ。ソシテ加フルニ大ビ九年来ノ世界ノ不況ノ影響ヲ受ケテ経済界ハ振ハズ急激ナル物價ノ下落等ノ変動ヲ来タシタ、又米價ノ下落モ大ナル原因ヲナシテヰル コレガ近因トモイフベキモノデアル

更ニ注意スベキハ諸税ノ負担ノ過重トイフコトガ言ハレテヰル一般ニ農村ノ負担ハ他ノ商工業者ニ比シテ重イトイフ点デアル、

此ノ如キ不況ニアル農村ヲ振興セシムルニハ如何ナル点ニ留意セネバナラヌカトイフニタヾアリ又コヽニ論議スベキデモナイ、即チ一ニ財政ニ付イテ考ヘテ見ル、

兎税ノ仕方委譲トイフコトガトナヘラレテヰル、即チ地租、営業税ノ仕方委譲デアル カクシテ地方ノ財政ノ基礎ヲ強固ニセントスル方策デアリ 幾分デモ税ノ負

擔ヲ軽減セシメントスルモノデアル。然シコレガ種々ナル利害ニ付イテ研究セラルル者ハ地方財政（時々問題講座ニ参照シテモラヒタイ、其ノ他戸数割ニ付イテノ問題家屋税ニ付イテノ問題等ガアル コレ等ニ就イテモ又是非スベキデナイ（地方財政参照）

要スルニ時代ト共ニ経費ノ増大ハ止ムヲ得ナイ、然シ充分調査吟味シテ無用ナルモノハ去リ必要ナルハ増加シテ行クト同時ニ経費ノ節約ニ付イテ充分ナル注意ヲ持ツテ其ノ局ニ当ラネバナラヌト思フ、

同時ニ負担ノ軽減ニ留意シテ農村ノ振興ヲ図リ地方財政ノ堅実ナル発展ヲ図ルガ刊要デアル。

七、結論

以上本町ニ於ケル財政ノ大要ヲ述ベタノデアルガ歳出入ニテ算ニ於テモ大ナル不当トスル程ノモノナイガコヽニ一般町民ノ留意シナクテハナラナイノハ傳染病等ニ対スル費用デアル、衛生思想ノ普及セル今日尚且ツ多クノ費用ヲ要スル事ハ一ニ町民ノコレニ対スルカヽ心ノ足ラナイカラト思フ。若シコノ費用ヲハブキ得ルナラバ勧業費ヤリ救助費ヤリ社会事業費ヤリニ使用セバ如何バカリノ利益アルヤ知レナイノデアル。

公有財産ニ付イテハ前ニ述ベタガコレヨリ後新ニ此ノ地方ヒ町有財産ヲ造ルト云フコトハ無理ナコト、思フ又部落有財産ハ相当アル様ダガコレガ利用ヲ充分考フベキデハナイカト思フ、不収益財産ヲ書ミタノハ要スルニ此ノ位ノ財産ガアルトノ概念ヲ與

ヘタニスギナイ、
納税奨励規程ヲ作リテ納税ノ奨励ヲナスハ至極ヨイ点ト思フ。ガ組合ヲ作リテ
ヤッタラ更ニ良結果ヲ得ルノデハナイカト思フ、
農村負擔ノ軽減問題ハ近時盛ニトナヘラレテヰル我レ〳〵モ大イニコレニ注意
スル要ガアルト思フ、コノニハ單ナル傳達ニトヾメテ筆ヲヲク、
以上極ク大体ニシテ調査ノ不充分ナル点ハ後日ノ調査ニマツ考ヘデアル。
又財政、経済、政治ハ相関聯スルモノデアッテ一ノミヲ切ハナシテ考フルコトハ出
来ナイ、本財政ヲ調査ニ調査スルニ当リ自治方面ヲ少シク調査シ、沿革ノ所ニ
両者ヲ書シタノモヤムヲ得ナイコト、思フ。
何ニイタセ短日月ノ間ニ調査スルノデアルカラ誤モアリ落モアルコト、思フ。コノ点ヲ
承知シ将来コノ方面ニ興味ヲモチ深ク研究サレル人ノ幾分カノ参考ニナレバ幸ヒ
デアル。

經濟

山上茂樹

一、序說
二、一般民ノ貯蓄心
三、土地賣買ノ狀況
四、金融機關
五、一般民及ビ寺院經濟
六、煙草ト一般民
七、廢止營業ト新設營業
八、賦稅ト其ノ式
九、結論

一、序説

我々人類が地球上に於て経済的生活に日も止む事は来ざるべし。此が生活の度は時代の進に從ひて進歩発達をなすべきものなり。地方の如き都会に近き地方なれば其変化は甚だしきものなれども、今上古より其の経済の状況を見るに石器時代に於ては多少なりとも各地の間隔に応じて散在する処より見て、此処に人類は定住して経済的生活をなし、次第に中央文化の影響を受けて発達せしものなるべしと考へられ、石器時代より直ちに鉄器時代に入り、奈良朝時代に至れば、武蔵の国は今の府中辺りにて、当地方は国司の直轄地となり、織物せしに、又之と共に国分寺は聖武天皇の天平十年秋の詔勅に依りて創設せられしものなれば、其の当時に於て仏教文化又仏教信仰なるものも相当に発達せり。之が為め経済上に於ても一大変化を生ずべきなり。東大寺西方の七堂伽藍の如きは、当時の遺物なり。奈良朝時代に於ては古墳に中央政府に於て不分律的に定められし境制を当地に及ぼし甚だ簡単なる埋葬も此処に於て宏大なる墳丘を営むことなりしなり。当地方の一般民の経済に甚だしき影響を及ぼせしものと思はる。

時代は降り平安朝となれば、武蔵の石川牧、由比牧、小川牧、立野牧など牧場を定め、石川牧は今の小宮村石川を中心として東は日野、三ツ木及び豊田の間に亘れり。カクして見れば、農民は水田を開墾し、畑を開き、新墾を加へて田畑の耕作は一般の進歩なり。農民の経済状態は益々変化を来たせり。国司の直轄地なれば当然なり。鎌倉に幕府開かれ、幕府と共に関東武士の勢力は益々盛んなる地方豪族なる各地に住する者より来たる者、塚附近に武蔵七党なる一団の豪族の居住なり。農民は其の配下にありて農業を続ぶべき筈なれども、武士の左右に立つ者なれば相当に武士と同じく思はる。かかる農村も時代の推移と共に幕府の勢力の変化と共に南北朝時代に至れば、当地は篠塚伊賀守の勢力範囲なることは現存する板碑に依りて明なるなり。元弘三年新田義貞の分倍河原の戦に世上に知られたる相当の戦争ありしものと推定せらるるなり。

戦争は世上に知られたる北条軍敗北の為め三浦に逃れ、武田と其の他朝臣の手に入れ、戸倉城より桁形の城に至る。秋川より多摩川沿岸に多数の城を築き、武田の軍と四戦なりしなり。当時農民は相当に穴蔵を設け如く、而して、天正十八年庚寅六月十三日に前田利家及び上杉景勝の軍の為めに八王子城は亡ぼされたるなり。徳川家康の家臣は同年八王子城下鑓指に為め七十二名五十人を殺せり。現在寺塚に埋葬せる者なり。此の戦争の為に農民の備えたるなり。之より甲州口の備えとなれり。之より甲州と江戸との交通は盛んなり。甲州街

道ノ発達共ニ各地ニ宿駅ガ設ケラレタノデス。日野駅ハ即チ是ナリデス。此ノ日野ハ宿場町トシテ盛ンニ発達シ、一般民ノ富ハ増加シタ。八王子ト府中トノ中間ニ位シ、多摩川ノ渡船ノ関係上、最モ重要ナル地ニシテ相当ノ商業モ発達セシガ、準ズルノ商業都市トシテ発達スル可能性ナク、但シモ農業ノミニテ生ストスル、半農半商ノ宿場ニテ各商店ノ軒ヲ並ブルヲ見テモ、其ノ方商店ニテ農業ヲ兼ネスルガ如キ、農業ト商業トニ分ル状態デ、一般民ノ富ハ益々増加シ、幸福ナル土地デアリタガ、時代ノ変化ト共ニ徳川幕府ガ瓦解シ、維新政府トナルニ及ビ、交通機関ノ発達ト共ニ大打撃ヲ受ケテ現在ノ如キ状態トナリタノデス。今此処ニ其ノ状況ニ付キテ其ノ大略ヲ次キニ述ベントスルノデス。

二、一般民ノ貯蓄

日野町ハ上ノ様ニ甲州街道ノ一駅トシテ八王子ト府中ノ間ノ宿、江戸ヲ発シ徒歩二日ヲ以テ丁度夕刻ニ日野ノ渡船ヲ渡リ、此処ニ一泊スルガ通例デアリタガ為メ、町ノ発達ハ街道町トシテ発達シ、一般民ノ得ル利益ハ相当ニ多カリタノデス。之ノ利益ヲ貯蓄スル方法ハ大体ニ現金ノ貯蓄ニ據ラズ、其ノ利益ヲ以テ田畑山林ヲ買受ケ、不動産トシテ永久ニ貯ヘントシタノデス。之ガ精神ハ唯独リ日野町ニ限ラズ、各地ニ於テ同様デアリタノデス。

江戸時代ニ発達シタ街道町モ徳川幕府ノ瓦解ト共ニ其ノ受ケシ影響ハ甚大ニシテ維新、新政府トナルニ、交通機関ノ発達ト共ニ大打撃ヲ受ケテ現在ノ如キ状態トナリタノデス。今此処ニ其ノ状況ニ付キテ其ノ大略ヲ次キニ述ベントスルノデス。

明治三十二年八月ニハ甲武鉄道株式会社ニ依リ甲武鉄道ガ設ケラレ、飯田町ヲ発シ立川ニ至リ、多摩川ヲ渡リテ八王子ヲ終点トシタ。其ノ後明治三十三年一月六日ニ日野駅ガ、同年四月二十日ニ豊田駅ガ設ケラレ、明治三十四年ニ豊田村ハ日野町ニ併合シタノデス。カクナレバ、永ク栄エシ日野町ハ恰モ大正二年関東大震災後ノ横浜ノ如クニ益々衰微スル事トナリ、此即チ旅客ハ汽車ニ取ラレ一方ニハ不便ナル渡船ト重荷ニハ付リ豊田村ト合併トナリテ一大打撃ヲ受ケシガ、其ノ後時代ノ進歩ト共ニ相当ノ発達ヲシ、農業商業共ニ豊富ニ富ノ利益タル現金ハ各戸ノ日々ノ取リトシテ使用セリ。特ニ現金ノ蓄積少キハ因リ直接ノ人家ニ比シテ甚ダ多キガ為メデ是即チ収穫物タル米ヲ貯蔵シ必要ニ応ジテ売リ却シ以テ其ノ要ヲ足セルノデス。カクシテ現金貯蓄ノ如キハ相当ニ少ナク、然シ年ヲ経テ現今ニ至ルノ郵便局ヲ利用シ、貯蓄ヲ盛ンナシ一般ノ人員及ビ金額モ増加スルニ至リタノデス。今此処ニ日野郵便局ノ貯

全統計ノ昭和四年、五年、六年ノ三ヶ年ノ状況ヲ示セバ

四年	新加入 三七九人、	貯金口数、一七、八六六人	貯金額、二〇四、六四〇円九八銭	
		掛金口数、二九六一人	掛戻額、二〇二八八円四七三金、	
五年	〃 三九七人	〃 一七、四六五人	〃 一七五、七四七円七九	
		〃 三、二五〇人	〃 一七八、八五三円六八	
六年	〃 四一一人	〃 一九、一四九人	〃 一九四、九一九円七八	
		〃 三、四九四人	〃 二一二、四三八円四三五	

トセバ如キ数字ヨリナリ、之ノ内ノ一部分ニハ住村及ビ小字村分ヲ含メタル為シ他方ニ於テ本町民ノ他ノ郵便局ニ貯金セラレタルモ相当ニ多シト思ハルルガ差引ヲセバ大差ナキモノト思ハル、此等郵便貯金ノ中ニハ児童貯金ノ約十人余ヲ含メルモノガ大半ヲ占メ平均約十円余ニ過ギザル小額ノ貯金ナルモ、児童貯金ノ少ナカラザル多キ所ヨリ見レバ、非常ニ多額ノ貯金ヲナスモノモアルモノト認メラルルノデス。尚ホ人口(昭和五年ノ国勢調査ノ結果ニ依レバ五千五百二十人ナリ)其ノ一人当ノ貯金額ハ約三十円デス。掛戻ノ状況ニ付キテ見レバ昭和四年頃ハ貯金額ヨリ掛戻額ハ少キモ、昭和五年ニ至レバ、相反シテ掛戻額ハ少シク増加シ貯金額ヲ超ユルニ至レバ掛戻額ハ益々増加スルニ至ツタノデス、此即チ資金不況ノ為メ各人ニ於テ稼ガナル貯金ヲ出シテ、之ヲ掛戻シテ日々ノ費ニ当テンガ為メト思ハル。

以上ノ如ク述ベタリシ中ニ於テ貯金口数ノ人口ニ比シテ相当ニ多キコトハ一般民ノ貯蓄心ノ発達シツツアル物語ルモノト良カラン。ガ為メニ郵便局ヲ利用セシト言フモ過言ナラズト思フ。此ガ郵便貯金ノ外ニ一般民ノ利用シ得ル他ニ何等ノ適ハナク唯郵便局ニ依ル外ナシ。

三、土地賣買ノ状況

土地ハ本部落トシテ何レノ家ニテモ家ノ宝ナルトシテ永久ニ残ネバ自作農ヨリ地主タラントスルト共ニ是ガ売買ニ於テハ其ノ手続ノ復

雖ども事実尚自由ニ分割シテ賣買ヲ簡單ニナスコトガ出来ズ、之ガ賣買ニ特別ノ理由ニ依リテ之ガ賣買ヲスルノヤアル

1、負債辨済ノ為

2、一定区域買取ノ為

3、賣買ニ依ル利益関係ノ為

4、土地分割ノ為

等ノ理由ニ依ルニ非サレバ、土地ノ賣買ハ行ハレガ而シテ時代ノ推移ニ依リ財界不況ノ影響ハ村ニ於テ最モ甚ダシク日ヲ追フテ窮迫ノ極ニ陥リ村ノ富ヲ挙ケテ其ノ抱キ来ル様ナ状態デ、カヲナレバ土地ノ賣買ハ此ノナキ事ニテ、相当ニ多ク行ハレルコトハ各地ニ於テ同様デアル、此ガ賣買ハ状況ヲ見ルニ本所内ニ於テ売買スルヲ主トスルモノ、如何ニ依リ他所村ニ賣却スルモノ盛ニ増加スルハ今日ヤ之ガ賣買状況ヲ表示セバ

年代	本所内ノ売買 面積	戸数	人員	他所村ニ売却セシモノ 面積	戸数	人員
大正十五年 昭和元年 宅地	一三三坪	一四	一二	一二九二坪	一二	八
田畑山林	四六二畝	八〇	二九	一一四四畝	一三三	二五
昭和二年 宅地	一四七〇	八	六	二五一	九	六
田畑山林	四〇一	六六	二二	一二一六	二〇五	八三
昭和三年 宅地	一〇六三	八	八	八三九	八	二
田畑山林	五二六	八五	二六	九一三	一一〇	一九
昭和四年 宅地	一一九四	一〇	一〇	七四三	九	八
田畑山林	五一八	一〇六	四二	五八二	一二二	三九
昭和五年 宅地	九六八	一一	一一	三八三	三三	三三
田畑山林	二八六	四七	三四	二五九	五三	一一

昭和六年	宅地	田畑	山林
一九五	一五	一一	六三九
八二二	一二九	四二	八九一

四
一六

トセラルカ如キ土地ノ賣買ハ行レタノデス、大正十五年八月ニ完通第八号線ノ日野立川ヨリノ渡船ハ廃止ニナリテ、長サ二百間余中四間ノ橋ガ架ケラレ交通ニノ便ヲ来タセルニ依リ、此処ニ於テ遠ニ土地ノ他所村ニセラルモノハ増加シ、其ノ後昭和七年及ビ昭和三年ニ於テ他所村ニ農部セラルモノノ多キコトハ農林省ノ蚕業試験場乗国ノ設ケラレシニ依レルモノトイフベシト思ハル。而シテ其ノ全体ヲ通覧スルニ当町内ニ於ケル農家ト他所村民ニ売渡セル面積トヲ以テ見ルニ大体同様ノ数字ヲ示ス即チ其ノ年ハ農家総数ノ半分ハ他所村民ノ手ニ渡ルモノデ之ノ六年間ニ他所村民ニ手渡サレシ土地ハ二千ヘクタルガ如ク甚ダ多クノ面積ニ達シタリ。

以上ノ様ナ土地賣買ハ大体ニ於テ如何ナル為メニ行ハレシモノナルカニ付キ嘗ヒ疑問ヲ有ス、之即チ済界不況ハ日ヲ追フテ深刻トナリ、大正八年ヨリ同九年ニ渡ル好景気ノ結果事業擴大又ハ其ノ失敗等ニ依リテ今日ニ来タルモノ且ツ又ハ多少ノ土地ヲ有シ日雇労働ヲ以テ日々ノ生活ヲ送リシモノモ現在ノ如クナスベキ労働ナク、アルトシテモ一日十時間以上ノ労働ヲ以テ五十銭内外デハ一家ノ生計ヲ立ツル事サヘ計リ難ク、此処ニ於テ一朝ガ安ニ合ハズ止ムナク其ノ土地モ賣却スルコトトナルノデアリマス此等ノ理由ノミデナク農家一般ノ状況ヲ聞クニ大体日々ノ生計ノ為メニ賣却スルモノモ現在ハ、相当ニ多クナツテ来タトノ事デアル。此ノ賣買ハ況ヲ見テモ中産階級ノ農民ハ大資本家ノ為メ自作農ヨリ小作農ニト変化シ農民没落ヘノ道ニ立チテ之ニ拍車ヲカケルモノトシテ、其ノ末期ヲ早メルモノト思ハルルノデアリマス、之各自ノ為ニ任ニシテ欧州大戦後ノ各国ノ疲弊ト共ニ於ケル産業革命トニ依ルモノナルガ故止ムヲ得ザルト思ハルルノデス。

四、金融機関

日野町ハ前ハヨリ述ベシ様ニ宿場町トシテ発達セシモノ明治二十二年ニ甲武鉄道ノ設ケラルルニ及ビテ其ノ宿場ノ甚大ナル影響ヲ受ケ一時ニ衰微ヘ道ニ向ヒシモ、当時ヨリ他町村ニ於テ見ルニ益々発達シテ一般民ニ対シ最モ必要ナル会社、銀行、組合、其ノ他産業者ノ盛ニ発達スル時ニ当リ、当地ハ之ガ発達ニ全ク中止シテ、銀行会社ノ設ケヲ見ルコトナク、小額ノ金融業

者ハ質屋デスカラ其営業不振ノ為メ、遂ニ廃止シテ、現在ニ於テハ全クナク大正七年ヲ以テ其ノ後ヲ断チリ、今此処ニ其ノ廃止順ニ営業者ヲ記セハ

天鮮清助　日比谷四谷　明治初年廃止
馬場市兵衛　〃　仲町
古谷太助　〃　下宿
馬場半七　〃　仲町
河野清助　〃　横町
千田常助　〃　上田
渡辺忠助　〃　金子橋
有山秀吉　〃　下宿　大正七年廃止

トカ順ニ廃止シタ事ス質屋ノ発達ハ勝博ニ依ルモノデ、田舎場ガ隣ハ盛ニ勝博ガ行ハレタガ為メ種々ノ品物ヲ出ナク質入セネバナラナクナリ、又勝ネバ直チニ出ストカヲカ如クシテ盛ニ質屋ノ利用ヲシタノデス。時代ノ進ムニ従ヒテ物價ハ甚ダシク変動シ質物価値ハ下降シ質屋ヨリ借リ出ス僅カ金額ニテハ其ノ用ヲ十分ニ為ス事ガ出来ズ、質屋トシテ見シバ入レシ質物ヲ出スモノ少ク流質スルガ為メ其ノ利益割合ニ少ク次第ニ質屋ハ廃業シ大正六七年頃ヨリ影を潜ム質屋ヲ利用スル者ハ日ニ増シ減少シ質屋トシテモ営業成立セズ従ガツテ廃業スルニ至ツタノデス、此ノ地方ノミナラズ各地ニ於テモ同様ナル状態ナリデス。

金融業者トシテ以上述ベシ質屋ハ全クナク、金銭貸付営業者モナク、産業組合モナク、又一般長屋モナク唯一ツノ小資業者アリテ之ヲ利用スルモノ二三ノ人ニ過ギナイノデス金銭ノ授受ニ依ル貸借関係ハ各個人間ニ於ケル貸借デ其ノ金額ハ少ク甚ダ方法ハ極メテ簡単ニシテ抵当又ハ保証人ヲ以テ貸借ヲナスノデアリマス其ノ他農工銀行ヲ利用スルモノモ極メテ少ク、カク個人間ニ貸借セシハ多少所有セシ土地モ十四年ニ貸方ノ手ニ渡ルノデアリマス。

五、一般民及ビ寺院経済

農民ノ経済状態ニ付キテ前第四ニ其ノ窮乏ノ状況ヲ少シク述ベタルガ、今此処ニ農民トシテノ搾取ノ地位ニアル寺院ノ経済ト二付キテ見ルニ、農民ノ大部分ハ自作兼小作農又ハ自作農ニシテ純然タル小作農ト云モノハ少イ。大体ノ耕地面積ハ五、四割ヲ畑ハ其ノ六割ヲ占メテ居ツテ、之ノ土地ニ於テ耕作スルモノデアル現今ノ状況ニ於テ見レバ自己所有ノ畑ニテ耕作スルニ当リテモ金ク肥料代乃至ハ税金位ノ利益ナル処ヲシテ小作セバ必ズヤ小作料ノ支拂ヲ為スコトハ出来ナイノデアリマス又ノ土地ヲシテ宅地屋敷トナシ各戸ニ於テ養蚕ヲシ上繭一貫匁ニ円位ノ処ニテハ多少ノ利益ヲ得ルニ過キナイノデアル之ガ詳細ハ二付キマハ農業ノ条ニ掲ゲタイノデス。水田ニ於テ見ルト反当二石平均ノ収量トノ事ナレハ普通大体余ノ収穫ヲ得ルモノト見ラルルガ、水田ハ作料及ビ三俵内外ニテ用水ノ費用ハ地主ノ負担デアルカラ小作人ト地主ト大体作リ分ケトスル状態ニテ耕作スルニ多少ノ利益ヲ有スルノデス。而シテ農家トシテ田畑ヲ共ニ耕作シ養蚕ヲセバ之ガ為メニ生ズル利益ハ多少アリト云ヘ自己ノ労力ヲ賃金ニ見ツモリテノ利益ナレハ各戸ニ於テ出ヲ以テ日々ノ生計ヲ立ツルトセバ必ズヤ相当ノ不足ヲ来タスモノトスル事ハ確実ナリデス。然ラバ最後ハ自己所ノ家財ヲ抵当トナシ又他ニ負債スルニ至ルノデス。カクナレバ小作料モ十分ニ支拂フ事ハ出来ズ地主及ビ小作人共ニ困難スルモノナリデス。

一方寺院ニ付キテ見レバ寺院ノ経済ハ甚ダ困難ナリト云フガ而シテ一般農民ニ比シテ甚ダ差異ヲ有スルノデス、大体寺院経済状況ハ概ネ次ノ如シ

寺院ノ収入ハ檀家ト云フモノ又出ハ町村役場ニ出ス租税ト宗門費トニテ其ノ両者ノ割合ハ

1. 臨済宗　役場費金　対税町税　対税　五割
2. 浄土宗　〃　〃　五割
3. 真言宗　〃　〃　五割
4. 天台宗　〃　〃　四割八分
5. 日蓮宗　〃　〃　三割三分

トシテノ外ニ祭礼又ハ小作料ノ半額ヲ以テ足ルトノ事デス、他ノ残額ハ僧侶及ビ宗教ノ交際費ニ又日常ノ生活費ニ使用セラル

ルモノニテ、之ノ点ヲ養成ニ比シテモ寺院経済状態ハ甚タ楽ナリトス、加フルニ衆民ハ寺院ニ対スル信仰ノ念薄ク却テ社ニ依リ如
蓋維持費ハ檀家各人ノ支出ニ依リ尚且ツ少シト言フ檀施モ相当ニ多ク、又一般民ノ不幸ヲシテ彼等ノ幸ナリトスル葬式ノ折経
料ヲ取ル事ハ甚タ過当ナラサルモノニテ経済界不況ノ現在ニアリテハ全ク寺院トシテ考慮スヘキ事ナリトアリマス、而シテ寺院ハ
寺院トシテノ体面ヲ保チ行フヤウニハ僅カ費用ニテハ不可能ナル事ハ一般民モ亦同様ナリトス、然シ現在ノ社会ニ於テ仮令断能
寧者ノ如クニ葬式後其ノ礼ノ少キ時ハ事ヲシテ返ヘサレムト云フカ如キ事ハ寺院ニ於ケル僧侶ノ現在ノ状態ヲ知ラ
ズシテ一般民ヲシテ搾取スルモノナリトス、而シ当時ノ寺院ニ於テハ是ノ如キ事ハ見サルモ、葬式ニ際シテ其施ノ出ス
経料ニ付キテ檀家ノ立場ヨリ見レハ、家族ハ死セル者ニ対シ出来得ル限リノ敬意ヲ表シ、現世ニ残レル者ノ慰トシテ和同
ニ際シ読経ヲナサントスルモノデスカ、之ニ対シ経料一回何程ト言フコトニシレハ、必ヤ十分ノ経料ヲ支拂フ事ハ出来ス、四
回ノ読経ヲ以テ通例トスルモノモ、之ヲ三回トシ、又二回、一回トナスモノモアレハ、又一回分ノ経料ヲ僅カツツ四回分トナスモ
ノモアルト思ハレルノデス、僧侶ハ之ニ依リテ其ノ葬式ノ読経ヲナスモノナレハ、言ハヽ一般ニ言ハレル一物布施ニ應シテ
ノ物経トカ云フカ如ク、経料ノ如何ニ依リテ読経ヲシテ之ノ外ニ葬式ニ対スル事ハ礼ハ多少ナリトモ布施スルモノ
ナレハ、現在社会ニ於テ如何ニ経済的生活ノ必要ヨリスルモ、基督教一般ノ宗教的信仰ニ対シ寺院葬式請負
業ノ感ヲ生ズルモノデス、之ヲ寺院側ヨリ見レハ、之ハ当然ノ事ナリトスルモノモアリ、又中ニハカカル事ハ全クナシトシテ不定
スルモノモアルカ思フニ注意スヘキ事ナリ。

以上ノ如キ寺院ノ状況ヲ見レハ、其ノ経済ガ困窮ノ極ニ達セントシテ其ノ道ニ立ナテ拘束ナキカケツツアル衆民ニ対シ
テ見レハ、全ク極楽世界ニ生活スルモノナルヤ。僧侶ノ一般民ニ対スル搾取ノ感ハ亭林ナル一般民ハ相変シテ親覚ノ為メ
又仏教信仰ヘト言フ考ヘノモトニ方難ヲ変シテ之ニ従フノデアル思ハル。僧侶等ハ之ヲ可ナリトシテ社会生活又
経済生活ヲ十分ニナシ自己ノ欲望ヲ十分ニ満タカントシテ経済的ニ寺院ハ窮セリトシテ家族ノ栄耀栄華ヲナスニヲ
リテ寺ハ僧侶一人ヲ以テ生活スルニ何等不自由ナキモノト思ハルノデス、カカル状態ナレハ特ニ一般民ノ注意ノ要スヘキ
又僧侶タルモノハカカル信仰心ヲ有スル一般民ニ対シヨリモ上ノ信仰ヲ深メ一般民ノ経済状態ヲ顧ミテ而シテ指

この日の徒労は此等を考へると必要がアルト思ハルルノデス。

六　煙草ト一般民

吾々一般民トシテ嗜益ニ使用セラルルモノハ種々アルモ其ノ内、主ナルモノハ酒ト煙草トデアルト思ハル、此ノ酒ノ消費料ハ非常ニ多額ニ登ルモノナルガ確実ナル統計ナキガ為メ如何ニセヨトカ、此処ニ一般人ガ差程ニ注意セズ最モ重要ナルモノハ煙草デアリマス、之ガ確実ナル材料ヲ入手販売所長ノ平田氏ヨリ得マシタノデ此処ニ其ノ状況ヲ述ベルノデス。

煙草ハ五箇所ニテハ政府ニテ事業ヲ布キ之ヨリ得ル利益ヲ以テ政府諸務費ノ一割ヲ補ナフモノト言ハレル程ニ重要ナル財源ノデアツテ、事業收入ハ貴人ガ大体無益ニ消費スル煙草ノ税トシテ納入スルノデアリマス、今日野町ニ於ケル其ノ状況ヲ見シニ、

聚落別	人口	貴人	小貴人	販売所ヲ通ズル貴人ニ対スル売渡金額
東光寺	四二一人	二	二	八四三円一二〇
〃　谷	二八四	一	一	六三五、〇一〇
宮（若宮町仲町下宮若宮町 今宮神社 北宮 山下）	一六八三	一二	一	九一八八、三八〇
下河原	三七七	一	一	八二四、二四〇
日野町方面寺	三六九	一	一	八〇二、一五〇
田村方面寺	一六六	二	一	一五四、六八〇
宮、上田	三七一	一	一	五八八、三四〇
下田、新井谷	六九一			
伊井、谷ノ戸	一四五			七六、六、〇七〇
山辺、堀之内	二九五			四七三、〇一〇

豊田	七一九	二八〇四、八一〇
計	五五二一	一八〇七九、八一〇

一人ニ付ノ人口ニ依レモ二ツ煙草ノ費消額ハ昭和六年ノ調査ナルガ如キモノハ元資料ノ手ニ入リ難キ為メ合計ヲ知ル事ガ出来マセンガ、平田氏ノ言フ所ニ依レバ昭和五年モ六年モ其ノ費消額ニ於テ、差金クライシカ出ラ昭和六年ハ何分力ハ多キ見込ナリト断言ニ依リ、之ヲ以テ合ト対照シテ見ルニ人当リ平均消費額ハ二円五十三銭強デスガ喫煙者ハ総人口ノ四分ノ一ニ過ギナイノデス。此ニ依ル喫煙者一人当リノ消費額ハ十四円五十四銭強トナルノデス、之ガ煙草ハ何ノ功モナク煙トナツテ消エ却ルモノデ、当町ニ於テ一ケ月ニ消費スル煙草ハ一万八千七十九円八十一銭ノ費額トハ実ニ人ノ取ル費額金額ニ対スル外一割ノ利益トハ実ニ二万円ニ近キ金ヲ煙トナシテ政府ニ納入スルモノデ之ヲ昭和六年度ノ一万九千二百二十六円ニ比セバ七百以上ノ増金ヲ生ズル事トナルノデス

以上ノ如クシテ個人経済ヲ取リ何等利益ナキ煙草ノ品質ハ下落スルモ費行ハ次第ニ良好トナリテ其ノ総額ハ増加スルノミデアリマス故済界ノ不況ニ鑑ミテ相当ニ節約スベキモノト思ハレルガ然ラズシテ、其ノ額ヲ増スコトハ一般民ノ特ニ注意ヲ要スベキコトト思ハレマス、而シテ一方ニ於テ之ガ為メ小売人ノ得ル利益ハ千八百円以上ニ及ビ一人当リ七十円平均ナリ中ニテモ多キモノハ八十三円余ノ利益ヲ得ルノデアリマス、假ニ之ノ煙草ノ全部ヲ廃止シテ所税ニ当ルモノトセバ所税ニ若通ナク滞納者ヲ出スガ如キ事ナリ甚タ簡単ニ行ハルルモノト思ハルガ而シテ各人ノ者好ニ依ルモノデスカラ之ヲシテ全部廃止スルコトハ不可能ナリデス一般民ハ各自ノ自覚ニ依リテ多少ノ節約ヲナシ家計ノ助トセラレタシト思フ、煙草ノ如キ人余リニ注目セザルモノニテモ是ノ如キ状態デアリマスカラ各人ノ良ク知ル酒及ビ菓子ノ如キモノニ於テハヨリ以上ノ多額ニ達スルモノナルコトハ火ヲ見ルヨリ明ラカデス。

七、廃止営業ト新設営業

時代ノ要望ニ依ル社会状態ノ変化ハ商業上ニモ及ボスコトハ相当ニ多クシテガ為メ各人ハ営業ヲ開廃シ又ハ変ズルコトハ止ムナキコ

トナリテアリマス、尚以テ日野町ノ状況ヲ見ルニ前ヨリ再度述ベテ来タ如クニ徳川時代ノ初期ヨリ甲州街道ノ宿場トシテ発達シテ来マシタ土地デアリマスカラ其延ニ於テ最初ニ発生シタ商業ハ旅人相手ノ営業及ビ旅籠、飲食店等ノ如キモノデ其ノ後益々之等ノ営業ト相並ビ各種ノ営業ハ盛ニ開設セラレタノデアリマス、農家ハ本業ノ傍ラ商店ヲ開キ半農半商トナリテ営ムノデス、之ノ商店モ幕府ノ圧解ノ為メニ大打撃ヲ受ケテ改廃スルノ止ムキニ至リタノデス、之即チ質屋ノ不振ヲ、明治政府トナレバ法令厳重トナリテ盛ニ行ハレタ賭博ハ全ク止ンダノデス、カクナレバ質屋ノ利用ハ農家ノミトナリテ入レシ質物ハ相当ノ期ヲ経テ出スモノモアレバ、又流スモノモアリテ其ノ質物ハ日毎ニ甚ダシクナリ、遂ニ前述ノ如ク八戸ノ質屋ハ益々其ノ要ヲ失ヒツイニ廃業ノ止ムキニ至リタノデアリマス。横浜ノ某質屋ニ質屋ノ衰ハ賭博ニアリ」ト言ヘルガ如ク其ノ影響大ナリデアリマス。

明治ニテ三年ニ甲武鉄道ガ八王子マデ開通セシ以前ハ甲州街道ヲ上下スル旅客ハ大体此延ニ一泊スルコトハ前述ノ通リデス故ニ然ルニ旅館ハ発達シモ記ス戸トナリタ分ス、

増田屋、	仲町、
日野屋	金子橋
関田屋	仲町
玉屋、	仲町
土屋、	下宿　商人宿
丸の屋、	仲町
相屋、	〃
鈴木屋	下宿　木賃宿
東屋、	〃
玉川亭	下河原　料亭

等ノ大旅館ガ街道ニ並ビ立ツテ居ツタガ甲武鉄道・開通ト共ニ旅客ハ汽車ヲ利用シテ当町ヲ経ル長キ道中ヲスルモノハ一時ニ減少シタ為メニ之等ノ戸ノ旅館ハ廃業シテ相屋及ビ玉川亭トニトリミガ残ツテヰルノデスガ此延ニ泊スルモノハ商人ノ一ツ過ギナカツタノデス。唯旅館トシテ残リミニテ今日ニ至ツタノデス。今日ハ一ヶ年ヲ通ジテ僅カノ宿泊人トナツテカラナレハ之ガ営業ハ楽ヘド廃業ニ近ツクノミナラズ、大正十二年ニ至レバ下河原ノ業況ニ於テ氏ハ木住宿ヲ開業シ貧民ノ宿ハヲ計シリ多少ノ宿泊者ハ見ルコトガ出来ルノデス。

飲食店ハ相当ニ多クリ中ニテモ高砂、東屋、森下等ハ有名ナルモノニテ繁者ノ過キ望ニ営業ヲシタノデスガ鉄道開通ト共ニ旅館ト相俟ツテ振ハナクナリ転業又ハ廃業スルコトトナツタノデス。之ト共ニ考フベキ事ハ湯屋ナノデス。左記四ツノ湯屋ハ廃業シテ今ハ其ノ跡ヲ見ル事ハ出来ナセン。

土方松五郎	仲町	明治五年頃廃止
金子藤蔵	金子橋	明治十年頃廃止
小川長次郎	金子橋	明治十二年頃廃止
小泉清八	仲町	明治十二年頃始メテ大正五年頃廃止

ト言フガ如ク廃業セリ之ノ廃業ハ燃料賃ノ関係モ相当ニアリシ事ト考ヘラレマスガ、而シ人口ノ関係ニ依ルモノデ僅カノ湯銭ニテハ收支償ハザルガ故ナリト思ハルノデス。

此等ノ外青物市場ハ下宿ノ高木吉兵氏宅ニテ開カレシガ、宿場ノ衰化ト共ニ明治五年頃ニ廃サレタノデス又之ニ附随スル八百屋モ二ツ以テ其ノ土地ノ需要ヲ満ジツツアリタルスガ其ノ収益モ次第ニ減ジテ明治二十年頃ニ廃業セリ。其ノ他多クノ人口ヲ相手トスル按摩モ宿場ノ衰ルニ従ヒテ収益少ナキガ為メ他ニ良好ノ地ヲ求メテ移転スルニ至ツタノデス、此等総ベテル営業廃止ハ宿場ノ変遷ヲ物語ルモノデ経済的大変化ヲ来タセルコトヲ知ルコトガ出来マス。

以上述ベシ廃止営業ニ付キテ言フルモノデアリマスガ、営業ハ少シモ廃止セラルルハカリデナク又一方ニ時代ノ変遷ト

土地ノ発達ニ伴リテ新ラシキ営業ノ生ズルヲ見ル事ガ出来マス、当地ハ隣接ノ立川町ノ発達ニ依リ其ノ発達ヲ防ケラレシモノト思ハレ、而シ時代ノ進運ニ従ヒマシテ次第ニ発達スル傾向ニ見ヘテイテ営業方面ノ発達トシテ二戸ノ肥料店ガ設ケラレタノデス

石井市郎　　横ノ町　　大正五年頃

井上保吉郎　　森町　　大正九年頃

営業経営上ニ於テ、種々ナル変化ヲ来タシマシタコトハ営業ノ條ニ於テ述ブルモノ故此処ニハ省略シマス。又吾地ニ見ユル飲食店トシテ当町ニモ見ラルル支那そばヤト称スル商店ハ次ノ如クデス、

菊や　　下宿　　昭和四年開業

はこや　　仲町　　昭和六年開業

武蔵屋　　仲町　　〃

富屋　　森町　　〃

たゝまき　　森町　　〃

朝日亭　　森町　　〃

トシテハ如ク、時ニ開店シテ、サテ、女給ヲ置キ相当ノ利益ノアルコトハ農村ノ経済上ニ於ケル最モ注意ヲ要スベキコトト思ハレルノデス。然リ日野町ノミナラズ各地ニ於テモ同様ナリデス。

此等以上ノ外新設営業相当多シモ、本体ノ如キトシテ他ハ後日ノ調査ニ俟ルモノトシテ此処ニハ省略シマス、此度又新設営業ヲ以テ見ル当地ニ於ケル経済状況ノ如何ガナルカハ明カナリデス。

八、婚礼ト葬式

現在ノ当地ニ於ケル婚礼ト葬式トニ付キテ見ルニ、而シテ其ノ状況ニ付キテハ生活ノ條ニ於テ詳細ニ述ブルモノデスカラ、今此処ニハ其ガ

一般経済ノ上ニ如何ナル関係ヲモツカヲ少シク述ベントスルノデス。

婚礼ハ乃チ結婚ノ儀式デ、嫁又ハ婿トシテ他家ニ至ル時、先第一ニ結納、小物代、次ギニ御馳走、雑費等総ベテ多額ノ費用ヲ使用スルノデス、之ガ費用ノ中以下ノ各々ノ大体ハ

結納小物代ニテ円ヨリ百円位ニテ五六十円位ノ処ガ最モ多シ。

御馳走引物共一人前一円五十銭内外

其ノ他ノ雑費五六十円（吉凶諸人ヘノ礼及ビ里帰リノ費用ヲモフクム）

トシテカカル二百円内外ノ費用ヲ要スルノデス、其ノ時移代トシテ約五円乃至十円及ビ祝儀約五六十円ノ収入ガアルノデス（常代ニテモ同ジ）之ニ依リテ差引キ百五六十円ノ不足ヲ来タスノデス、一方嫁又ハ婿ニ出ズル其ノ支度共ニ大体同様ナノデス、而シテ其ノ内約半額ノ結納金ガアルニヨリテ差引百円内外ノ不足トナルノデスカクノ如キ状態ニアル婚礼ヲ見レバ、此ハ其ノ家トシテ相方共ニ多額ノ費用ヲ要シ相当ノ不足ヲ生ズルノデス、之ガ百円又ハ百五十円トシテ金ハ何トモ各人ガ之ガ為メニ所蓄ヲナシテ置キテ其ノ時ノ用ニ当ルモノ、全クナシト云フモ可ナリト思ハルノデス然ラバ之等ノ不足金ハ何トモ他ヨリ借入ルモノトナルノデス、之ガ状況ハ各人ノ之ヲ知ル所ノ祝儀借金ナノデス、之ガ為ナニ多少ノ利子ヲ払ヒ、又利子ハ増加シテ次第ニ元金ノ倍又ハ倍以上トナリテ最後ニ多少有スル所ノ財産モ之ガ為ナニ代ヘニ其ノ機制ヲ移スコトトナルガ如キ、相当ニ多ク見受ケラルルノデス。

葬式ニ付キテ見レバ、現在ニ残ル吾々ガ、死シテ此ノ世ヲ却ル者ニ対スル最後ノ祭トシテ、其ノ家族及ビ種々関係アル人々ニ依リテ行ハルルノデス、此ニ際シテ家族ハ菩提寺ノ僧ヲ頼ミ読経ヲナシテ各人ノ焼香ヲナスノデアリマス、之ガ時分ニ対シテ種々料金ヲ支出シ多クノ人々ニ故人ノ供養トシテ、多少ナリトモ馳走ヲナスヲ習慣トシテ居リマス、此ノ時ノ其ノ費用ノ状態ヲ神戸市位ノ所ニテ見レバ、

葬式ノ経費	三四円位
七日ノ経費	一月位
葬礼	一円位

寺へ

- 茶菓子代　一円位
- かけむく代　五十銭位
- 時米　一升
- 茶代　二十銭位
- 留守居ニ　五十銭位
- 友ノれ　五十銭位

引物

- 引茶菓子
- 一半
- 壺
- 一人前一円内外

其他雑費―四五十円位

トミウ様ナ寺ヘノ礼ヲ入レ引物ヲスルノデス、カク寺ヘノ種々ナル支出ハ一般民ノ祖先崇拝ト仏教信仰トニ依ツテ生ジタルモノデ、之ノ時ハ寺ヲ見テ幸トスル僧侶等ハ消男ノ不況ヲモ顧ミズシテ、唯燈花ハ少ナシト口ニ唱ヘテ寺院経済ノ一端ヲ補ギナシトシテ、盛ニ其ノ收入ヲ計ランメトスルノデス、之ノ大体ノ状況ヨリ見テモ、搾取的ニ行ナハルモノト考ヘラルルモノモ少クハナイト思ハレルノデス、一人ノ葬式ニ対シテ約十円位ノ費用ヲ要シ、此ノ外一人当一円内外ノ引物ヲスルトセバ、客人ノ数ノ如何ニ依リテハ相当ノ價格ニ昇ルモノナノデス、而シテ引物ヲ引カザル家モ多少ハ見受ケラレマスガ、大体ハ引物ヲ引ク習慣ナノデス。カクシテ見レバ葬式ニ要スル費用ハ甚ダ多イノデス、而シテ会葬者ハ相当ノ香料ヲ持チ来タルモノナノデスカラ其ノ收支ハ大体大差ナキモノト思ハル、而シ中ニハ多少ノ不足ヲ見ルモノモアルノデス、之ヨリシテ考ヘレバ一家ノ経済上ニ多大ナル影響ヲ及ボスモノデスカラ之ノ点ニ付キテハ相当ニ注意ヲ要スベキ事ナノデス

婚礼葬式ノ如キ一時ニ多額ノ費用ガ掛ル事ノ例ナリ消費セラルルコトハ其ノ経済上ヨリ考察セバ相当ノ注意ヲ拂イテ出来得ル限リノ節約ヲナスベキモノト考ヘラルルノデス、而シ婚礼ノ如キハ考ヘ様ニ依レバ其ノ人ノ一生ニ於ケル最高ノ祝視ナリトシテ多額

ノ貴重ヲ量シ、又蓄積ハ一般人ニ対スル供養デアルトシテモ多ク人ニ施サントスル人ハ是ノ限リニ非ザルノデス、而シ現在ノ如キ皆富リテハ如何ナルコトガアルトモ最大限ノ部均ヲシテ之ガ為メノ借家ノ多数ニ出来ル様ニ計ラサケレバナラヌ、一般民ノ設備立直トスル所ハ之ノ二番ニテ自由結婚又離婚トナルコトハ其ノ一例ナノデス、蓄積ニテハ大体何トカ多数ノ支出ガナクトモ行ナフ事ガ出来ルモノナレバ一般民ノ頭ニハ差程感ゼラルルコトハナキモ香料トシテ多数ノ人ヨリ貰ヒシモノハ以上有効ニ使用セラレタシト思ハルノデス。

九、結論

徳川幕府ノ政策ニ依ツテ、甚ダシク発達シタ日野ハ前数項ニ於テ述ベシガ如クニ徳川幕府ノ政策ノ変遷ト新政府ノ文化進歩トニ依ツテ明治三十六年八月甲武鉄道ノ設ケラレシトニ依ツテ段々ト衰ハ甚ダ大ナルモノアツタノデス、他ノ地方ノ発達スルニ相反シテ没落ノ道ニアル一般民ヲ時代ノ進運ト共ニ奮々土地ノ発達ヲ計リ知為メニ文部ニ教育流民ノ如キニ他ノ地ヲ求メテ転住スルモノハナリ次第ニ発達シ人口モ増加シテ今日ノ如キ盛況ヲ呈スルニ至ツタノデス、然シ現今ノ如キ商界景況ハ日ニ増シ深刻トナツテ業界ノ大資本家ノ勢力ノモトニ次第ニ合併ヲセラレテ没落セントスル状態ニ歩一歩ト近ヅケルノデアリマス、

是ハ之ニ於テ上述ノ如キ一般民ノ経済状態ヲ地所村ノ其レト対照シテ見ル相当ニ養スルトコロアルモ時間ノ関係上此ノ省略シテ後日一般各人ノ御比較ヲ以テセラレタイト思フノデス、尚モノ調査ハ一般ノ中流以下ノ者ヲ基準トシテセモノデアリマスカラ、相当ニ異ナツタ所モ甚ダ多イノデス、而シ若シ此ノ点ニ於テハ相当ニ資産ヲ有スルモノ少ナカラザルガ為メ本調査ハ甚ダ愚ナルモノノ観カアリマスガ一般民ハ此ニ依リテ今後修養ノ参考ト為ス事ヲ希望ミマス。

以上述ベシ愚説ハ甚ダ浅学不才ノ私ノ調査ニ依ルモノデスカラ相違ノ点ト缺点トハカリデアリマスカラ諸賢ノ明確実ナル御研究ト批判トニ依リ御訂正ヲ以テ本町ノ一般民ノ経済状況ノ調査ヲ完成セラレンコトヲ希望セスルモノデス。

教育

一、教育機関ノ種類及數並ニ其ノ狀況

イ 日野町ノ日野藩時代ノ學校

(一) 位置　東京府南多摩郡日野町日野二千六百十四番地

(二) 沿革

創立以前

維新前

徳川幕府時代ノ終リ頃ニハ二三ノ手習師匠アルニ過ギナカリシ。

維新前十數年前ニハ手習師匠日野嘉三氏佐藤信三氏他二三アリテ各自宅ニ於テ習字珠算ヲ教授セリ。又同ジ頃佐藤俊正氏ノ主唱ニヨリテ近藤周助氏ヲ聘シテ剣ヲ撃剣ヲ講ジタリ。同氏老年ノ後ハ其ノ後継者近藤勇氏ヲ聘シテ益々其ノ道ヲ盛ンナラシメ、遂ニ佐藤氏門側ニ道場ヲ設ケタリ。維新直前ニハ此處ニ来テ剣道ヲ學ブ者実ニ八十名ニ上レリト言フ。

維新後

明治ノ初年ニハ維新前ニ引キ続キ日野嘉三氏佐藤信三氏落合齊氏等ノ手習師匠及成就院薬王寺欽浄寺等ニテ一般子弟ヲシテ主トシテ習字ヲ學ハシメ稀ニ読書算術ヲ教ヘタリ。當時ハ一般ニ読ミ書キ算盤ニ言フテ此ノ三ツヲ學問ト言フヲ常トセリ。明治三年頃ニナリ、佐藤俊正ノ斡旋ニヨリテ日野郷學ト称スル塾

金ヲ起シ北辰欽浮寺ヲ塾舎ニ充テ儒者村岡笠城氏ヲ聘シ孝ヲ漢
學ヲ教授シ傍ラ英語ヲ學ベシメ又宇野烏三郎氏ヲ聘シテ筆算ノ
教授ヲ開始シタ。當時筆算ハ洋算ト称シ極メテ不思議ニ感シ
タ者ガ多カリタ。

創立以後

一明治五年五月七日小學校ヲ創立シ土調山普門寺本堂ヲ以テ校舎ニ充
テ日野義横氏ヲ校長トナシ路金齊孝ガ教員タリ。
一明治九年ニ至ルテ校運次第ニ隆盛ヲ来シ就學者多クナリテ三百五十人
ヲ越ユタリ。
一明治十年一月廿十日普門寺敷地ヲ拡張シテ校舎ヲ新築シタ。西洋風
二階建ノ分地積二十四坪 日本風平家ノ分十四坪デアツタ。
當時學校ハ金ハ西洋風流行シ特ニ教師ト言フベキ者モ無クシテ地
ノ大工等他ノ西洋風建築ヲ見真似シテ造リ外形ハ立派ナルモノナリ。
今所役場庫舎ハソレヲ移轉改築ヲ加ヘタモノデアル。
一明治二十三年十月三十五新築增築
一明治三十一年東方ニ校地ヲ擴張シ地積二十一坪ノ二階建校舎ヲ增築。
一明治三十四年四月一日桑田村日野ニ分校ヲ設置
已後漸增加ス。
一明治三十四年五月上田ニ分教場ヲ置ク
一明治四十一年下田堂田ニ二分教場ヲ置ク。
一明治四十三年十月校舎改築增築ノ大工事ヲ起ス。ノ上ハ無キ二十ヲ大

イ ニ 東南西ニ校地ヲ擴張シ四十四年七月落成四十三年二月十日
竣成式ヲ挙行セリ。現時ノ校舍即チ之ニシテソノ大部分ハ二階
建ナリ。建築費凡一万六千円ヲ要セリ。古校舍ハ改用セルハタダ
ニ十六年増築ノ分ノミナリ。明治十年建築ノ西洋風ノ分ハ役場廳
舍ニ、三十一年増築ノ二階建ノ分ハ教員住宅ニ之ヲ移轉改築シテ
之ニ充テタリ。

一大正十年十一月十八日 河鰭侍從皇太子殿下御使トシテ視察セラル。

編制

一明治五年ヨリ同十四年マデ上下等八ヶ年ノ課程ヲ置ク。
一明治二十年三月マデ 初等、高等八ヶ年ノ課程ニ変ム。
一明治二十年四月ヨリ尋常科四學年 高等科二學年ヲ置ク。
一明治四十三年四月ヨリ尋常科六学年 高等科二學年ノ課程トナル。

設備

校地全面積 一二二八坪
体操場 五五七坪
校舍總坪數 三〇四坪
教室數 一八

(三)

歴代校長氏名

就職年月日	校長名
明治五年五月	日野義順
明治九年八月	國府田學

明治十一年四月　小川則要
明治十五年四月　鈴木宗也
不詳　上野謙松
明治十八年四月　二見友三郎
明治十九年五月　八木岡寛制
明治二十年二月　佐野鶴松
大正五年四月　古谷剛次郎
大正十二年一月　河合作平
大正十五年三月　古谷剛次郎

(四)

創立以来卒業者

	男	女	合計
尋常科	一七〇〇	一四二二	三一二二
高等科	八六六	四六〇	一三二六
合計	二五六六	一八八二	四四四八

(五)

教育費調

年度	決算	予算
昭和二年	一九八三四・一四	二〇二七五・〇〇円
同三年	二二六五一・四一	二二一九四・〇〇
同四年	二一四五八・六	二一八五一・〇〇
同五年	二〇三七二・七四	二〇九七五・〇〇
同六年	一八九八四・三三	一九七八四・〇〇
同七年	一九一二五・〇〇	一九九四七・〇〇

本年度經費予算

教員俸給　一五五四〇円
雜給　一四六〇
需要費　二〇三七
修繕費　九四〇

口

豐田分教場（前豐田尋常小學校）

(一)位置　日野町字豐田　一千三百二十番地

(二)沿革

一創立明治七年三月二十五日當時ハ山口平太夫長屋ヲ假校舍ニ充テタリ。後善生寺本堂ヲ校舍ニ假用ス。

一明治十二年二月現地ニ校舍ヲ新築ス。

一明治二十二年桑田村ヲ四區ヲ二十六年東京府ニ屬シ豐田堀ノ内川辺ヲ通學区域トス。

一明治二十七年二月校舍ヲ改築シ校地ヲ廣ム。

一明治三十四年日野町ニ合ス。通學区域前ノ通リ。

一明治四十一年日野高等尋常小學校分教場トナル。

一昭和七年五月校舍ヲ增築ス。

編制

一創立ヨリ明治十五年三月マデ上下等各八級八ヶ年

一十五年四月ヨリ二十年三月マデ初中・學科六科年

一二十年四月ヨリ三十四年三月マデ尋常科四學年補習科三學年ヲ併置ス。

一三十四年以後補習科廢止トナル。

一昭和五年四月ヨリ六學年編入ス。

(三)歴代豊田尋常小學校長名

就任年月	校長名
創立明治七年	大澤範之助
十六年八月ヨリ	今井　匡之
十九年五月マデ	横尾　養雄
二十二年九月ヨリ	八木岡寛制
二十三年三月マデ	小宮多之助
二十三年四月ヨリ	二宮　保平
二十三年二月マデ	増田勘十郎
二十三年二月ヨリ	杉代　郡治
四十一年三月マデ	藪内　勝繁

八、下田分教場（前下田尋常小學校）

(一)位置　日野町字下田　二百番地

(二)沿革

一、明治五年創立當時ハ安養寺本堂ヲ以テ假校舍トセシガ明治十一年九月校舍ヲ現在ノ位置ニ新築ス。

一、設置区域ハ新井、石田、下田、万願寺、宮ノ五ヶ字デアッタガ明治十八年更ニ上田ヲ編入ス。

一、明治四十一年下田尋常小學校廃止ノ結果日野小學校分教場トナル。

一、昭和三年五月五日分教場校舍改築竣功。

(三)編制

一創立ヨリ明治拾四年拾月マデ下等四ヶ年上等三ヶ年ト

一十九年四月マデ初等各三ヶ年高等科二年トス。

一二十年ニハ一年期ヨリ八年期マデニ改ム。

一二十一年ヨリ尋常科四ヶ年トナル。

(四)歴代下田尋常小學校長名

就職年月	校長名
五年創立ヨリ九年四月マデ	土方四方作
九年四月ヨリ九月マデ	柴田直義
九年九月ヨリ十年五月マデ	延井
十年六月ヨリ十六年八月マデ	鞆浦
十六年九月ヨリ十九年十二月マデ	平尾 賢
十九年十二月ヨリ二十五年八月マデ	吉谷 宗也
二十五年九月ヨリ二十八年四月マデ、	小宮 弥一郎
二十八年四月ヨリ三十三年四月マデ、	吉竹 邦治
三十三年四月ヨリ四十三年三月マデ	岡本 藤吉
四十三年三月ヨリ	山本初太郎

二

(一)農業系公民學校

一明治三十八年一月日野高等小學校内ニ日野補習夜學會ヲ設ク。

一明治四十四年一月日野夜學會ヲ日野町立日野農業補習學校ト改ム。

一大正七年七月南多摩郡教育會ノ經營ニ移シ南多摩郡教育會附屬日野農業補習學校ト稱シ大正十二年ニ至ル。

一大正十五年四月日野町立日野農業公民學校ト改稱ス。

一大正十五年七月日野町立青年訓練所ヲ併置ス。

(二)修業年限

修業年限ハ前期二年後期二年(女子三年)研究科一年(女子二年)ト ス。

(三)公民學校在籍生徒數

	男子	女子	合計
前期	七	三	一〇
後期	六九	二三	九一
研究科	四三	五	四八
合計	一九	三〇	一四九

内譯(男子部)

本校	八一
豊田	二一
下田	二二

(四)卒業生狀況

年度	人數 男	人數 女
大正十五年	二五	一六
昭和二年	二五	二一
仝 三年	二六	二二
仝 四年	二五	一九
仝 五年	二〇	二七
仝 六年	二二	二〇
仝 七年	二八	二八
		一〇

2 教育諸團体及其ノ概況

イ 青年訓練所

(一) 大正十五年七月一日開所ス

(二) 主ナル要項

一、青年訓練ハ青年ノ身心ヲ鍛錬シ國民タル資格ヲ向上セシメルヲ目的トス。

一、訓練所ノ訓練期間ハ四年トス。

一、訓練所ニ入所シ得ル者ハ前年ノ十一月三十日ヲ以テ滿十六歳以上十七歳未滿トスル。

(三) 一、訓練項目ハ修身及公民科教練普通學科(口語算術、歴史)及農業

(四) 訓練所ニハ現在主事一名指導員四名ヲオク。

(五) 生徒數(七年度)

一年次 二四名　二年次 二五名　三年次 一二名　四年次 一五名　計七六名

訓練所費調

年度	決算	予算
昭和四年	五一三、四三	四九〇、〇〇
〃 五年	六〇八、七五	六〇五、〇〇
〃 六年	六四一、四二	六四八、〇〇
〃 七年	五九九、〇〇	六〇三、〇〇

ロ 日野町教育會

(一) 本會ニハ左ノ役員ヲ置ク

一、會長　壱名

一 副會長　壹名
一 顧問　若干名
一 幹事　四名
一 評議員　十名
一 書記　壹名

(二)

一 本會ノ主ナル會側會務

一 本會ハ本郡教育會ヲ組織シ教育ノ改善進歩ヲ圖ルヲ目的トスル。

一 本會ノ會員ヲ分ケテ名譽及通常會員トスル。

一 通常會員ハ本會ノ目的ニ贊成シ會費年額五十錢ヲ醵出セルモノトス

一 事業トシテハ本町教育上ノ事項ヲ研究審議スルコト。

一 講習會又ハ講演會ヲ開クコト他ノ教育會ト氣脈ヲ通ズルコト、

一 本町教育上効勞又ハ神益アリト認メタル者ヲ表彰スルコト等

又就學兒童ノ奬勵ヲナシ其ノ他教育上ノ後援者トナル。

3、鄉土民ノ教育程度ノ概況

言フマデモナク本町民ノ大体ハ農業ヲ主モ主トシタルニアリ一般町民ノ教育程度モ數年前マデハ、ノ進歩發達遲ルトシテイタ近年交通ノ便利ニヨツテ教育機關又ハ教育的刺戟モ少ナクナイ併シナガラ町民ノ多ク農業ヲ專トセルニヨツテ智的教育ハ一般的デハナイ。小學校卒業者ノ上級學校志望率一割三分ニ對シ約八分ノ入學率ヲ見ルニ過ギズ、ソレ以上高等學校大學校

ニ入學スルモノ其ノ數十ナリ。

而シテ町ニハ團体組織ヨク行ハレ各部落別ニ集合シ種々ニ教育的道德的方面ニカヲ注ギツツアリ。

4、新聞雜誌ノ購讀概況

種類	部數
報知新聞	四〇〇
東京日日新聞	二五〇
朝日新聞	一二〇
時事新聞	一〇
國民新聞	二一
中央新聞	二五
中外新聞	二一
讀賣新聞	四三
多摩日日新聞	一四〇
諸雜誌	五〇

1 主婦ノ友婦人倶樂部ギンタ 少年倶樂部 幼年倶樂部等

5、圖書館ノ狀況

本町ニハ今ヲ圖書館設立スルニ及バズ。

有識階級ト一般民トノ思想的関係

明治維新以来西洋ノ文物輸入スルニ従ツテ種々ナル思想ガ流レ込ンデ我ガ国民ノ思想上ニ一大変調ヲ来シタ我ガ郷土モ其ノ潮流ニ漏レテ総テノ階級ノ思想上ニモ多サトモ其ノ影響ヲ受ケタ所ガ其ノ間ニモ有識階級ハ能ク批判ニヨツテ悪シキ思想ニ感染セシ者ナク極メテ冷静ニ此ノ社会ニ来ル、思想ノ潮流ヲ凝視シテオル様デアルカ云一般民ハ新聞雑誌其ノ他社会教育ニヨツテ好マシカラヌ思想ニ感染シ何カ問題ガ起レバ直ニソコニ表ハレテ来ルノデアル

従ツテ有識階級ト一般民トノ思想関係何等ナキモノト余ハ認識スル

7

1 在郷軍人会日野分会設立

帝国在郷軍人会男女青年團等ノ郷土風紀ニ及ボス影響

従来ハ在郷軍人團デアツタガ明治四十一年帝国在郷軍人会日野分会ト改メタノデアル

(一) 現在会員数　二八〇名

(二) 役員

分会長　一名

分会副長　二名

理事　数名

幹事　数名

各部落ニ（十四部落）

分会班長　一名

組長　数名

(三)(四)
年中行事
一、鏡餅祭　一、撃剣　一、射撃　一、行軍　一、兵営ノ見学
一、入営又ハ除隊兵ノ送迎　一、講習會

(五)
一、陸軍ノ活動写真
本會カ郷土長組ニ及ボス影響
而陛下皇太后陛下多摩御陵ニ御糸拝等ノ際ニ御警衛又ハ御警備ノ任ニ当リ次テ忠君愛國ノ赤誠ヲ盡シ非常時ニハ能ク國体ノ規律的行動ヲ敏速ニスル又毎月ノ青年訓練生ノ入所期前ニハ勧誘ヲシ又指導員ヲ會員カラ出シテ居ル
斯クアラユル場合ニ郷土ノ中堅トナリテ奉仕的仕事ナスノデアル

口　男女青年團

(イ)
男子部ノ沿革ノ概況
当町ノ青年團ノ起元ハ遠ク昔ニ出来タノデアルシカシ其ノ制度ハ官府公認ノモノデナク部落ノ生活ノ必要ニ應ジテ自然的ニ発生シタモノデ別ニ記録ニナイカラ立証スルコトガ困難デアル
柳モ現在ノ青年團ハ其ノ前身トシテ封建時代ニアツタ若連中ノ制度ニソノ主流ヲ汲ンデ現在ニ至ツタノデアル而シテ其形態ヲ整ヘタノハ明治三十七八年戦役当時デアツタカ俗其ノ内容ニ於テハ未ダ充實ノ域ニ達セナカツタノデアルシテ又修養上ノ改善ヲ要スルニノ時ナイノデアル大正七年三月二十三日ニ従来組織シテアツタ十二部落ノ青年會ヲ合同シテ日野町青年團ガ成立シテ教會

式ヲ挙ゲタノデアル町村単位ノ青年團ノ出来タノハ郡内デ一番早カッタ

(二) 役員

團長　一名
副團長　一名
幹事　五名
各支部ニ
支部長　一名
副支部長　一名
幹事　数名

(三) 目的及ビ修養事項

忠良ナル國民養成ナル公民デアル素質ヲ修養スルノヲ目的トシテ大正七年十月十七日南多摩郡青年團ノ決議ニナッタ必行事項ヲ實行シテ智徳ノ涵養体育娯樂ノ方面産業経濟公益事業ノ各方面ニ亘リテ修養ノ機會ヲ作ルコトヽナッタ

必行事項左ノ如クデアル

1 時間ヲ厳守スル事
2 神社境内及ビ墓地ノ清掃ヲナス事
3 金上ノ危険物ヲ除去スル事
4 未成年團員ハ必ズ補習教育ヲ受ケル事
5 夜遊ノ悪風ヲ改メ早起ノ良習ヲ涵養スル事

(四)

其ノ他ノ行事ニ及ヒタル事蹟

1 総会ヲ年一回開ク

2 団員ノ兵役服務者ヲ慰問スル事

3 年一回運動會ヲ開催スル事

4 大正九年三月七日カラ十日間明治神宮造営工事ニ団員ハ勤奉仕シタ

5 各支部デ修養的事蹟トシテ大正九年度ニ於テ実施シタ事項左ノ通リデアル

一 文庫設置	五支部	一 雑誌回覧	七支部
一 見学旅行	五支部	一 講習會開催	三支部
一 三大節祭式	一支部	一 春秋皇霊祭当日祖先共同祭會ヲ行ツタモノ	一支部
一 敏道會	一支部	一 桑園経営	一支部
一 麦芽豫防施行	三支部	一 神社境内掃除	三支部
一 道路修繕	九支部	一 其ノ他	
一 道路標設置	十二支部		

(五) 正團員

三二大名 (年令十七才以上三十才)

(六) 本團ガ郷土風紀ニ及ボス影響

青年團ハ青年ヲ対象トスル機関デアルシカモ全人教育ノ機関デアルソレハ宗教的情操ニ因ハレズ軍事教育ニ偏セズ中正ナル立場ニ立ツテ青年ヲ教育セントスルノ機関デアル而シテ其ノ團員ハ其ノ

教科的施設ニ依ツテ教育サレツヽアルガ現在ハ三個ヲ率ゲルコトガ出来ルソノ一ハ青年團ソレ自体デアルソノ二ハ公民學校デアルソノ三ハ青年訓練所デル公民學校ト青年訓練所トハ青年團員ノ重要ナル教化機関デアルコレニヨツテ純エズ教育ヲ受ケ知識ノ三面カラ進出シテ健全ナル国民善良ナル公民ノ素質ヲ充實セントスルノデアルソレガ爲メニ高遠ナル理想ヲ追求シツヽ現實ノ要務ヲ忘ラナイ教育ヲシテ理智ノ冷カナル舞台ニノミ活動スルコトナク靈ノ王国ニ頭ヲ入レ情意ノ歩脚ヲ働カサントスハ全人教育ヲシテ其ル斯様ニ郷土ニアル國青ノ青年達ト全体ガ其ノ教化施設ニヨツテ健全ナル国民ト善良ナル公民ノ素質ヲ充實シ人格ノ向上ニ努カシツヽアル力ラ全青少年ハ云フ迄モナリ郷土ノ一般民迄モ幾分ノ感化ヲ受ケ他郷土ニアルガ如キ在傾的人物地国民等ヲ出シタルコトナキハ本團ノ教化アツカツテ効果アルモノト云ハネバナラヌ

ハ 女子青年團

(一) 女子青年團発達ノ概況

由来我ガ國ニ於テ婦人ハ専ラ内ヲ守リ家ヲ齊ヘ子女ノ教育ヲ以テ其ノ天分トサレ婦国ナリト教ヘラレテ居タ然ルニ世運ノ進展ハ人ツ迄モ婦人ヲ家庭内ニ留ルヲ許サナイ各種ノ方面ニ活動スル様ニナリ漸次盛況ヲ加ヘルヤウニナツタカクテ女子ノ社會的地位ハ時代ト共ニ向上シ社會モ亦国家ノ充實社會ノ改善ハ女性ノ力ニ負ツモノ多イノヲ知ツテ婦人ノ覚醒ヲ促シ智徳ノ涵養ヲ圖ルノ必要ナ

ルニ迫ラレ而シテ其ノ目的ヲ達成スルニハ前途多望ナ青年女子ニ対シテ会同的修養ヲ奬メ團体的活動ニ依ツテ之レヲ図ルノヲ最モ妥当且ツ捷径デアルト認メ各地相竟ツテ女子青年團ヲ設立スルヤウニナツタ

(二) 女子青年團ノ設立

大正八年四月六日日野町淑女會発會式ヲ挙ゲタガ大正十五年十一月十一日内務文部両大臣ノ連署ニヨツテ女子青年團体ニ関スル訓令ガ発セラレタ当時当町モ淑女會ヲ解散シテ日野町女子青年團ヲ設立シタノデアル

(三) 團員

三八五名

(四) 役員

男子部ニ倣ジ

(五) 行事

一 料理法講習
一 家庭経済講習
一 修養講習
一 夜講習
一 衣類整理法講習
一 春蚕ニ関スル講習
一 裁縫講習
一 其他

(六) 本團ガ郷土風紀ニ及ボス影響

本團ハ青年女子ノ修養機関タルガ故ニ行事表ニ示セルヤウニ主婦タルノ素質ヲ充實スル為メニ特ニ女子ニ必要ナル家政及経済等ニ

意ヲ用ヰタリ又其人格ヲ高メ健全ナル國民ノ資質ヲ養フタメニ修養ニ力ヲ用ヰテ而シテ女子ノ本分ヲ完ウスルコトヲ本旨トシテ進デヰルノデ是等ニヨツテ教育サレタ女子青年ハ取リモナホサズ一家ノ子女デアルカラ其教化ガ直ニ一家ニ及ボシ而シテ又一町村ニソレデ社會ニマデ影響ヲ及スコトハ当然ナコトデアル今ヤ其教化ガ郷土ノ風紀ニ影響ヲ與ヘ漸次段著進歩ナレツヽアルハ喜ブベキコトデアル元來前述尚遵遠ナレバ眼カ一致大ニ此レガ教化ニ努力セナケレバナラヌ

イ 隣接町村及ス教育的影響及隣接町村ヨリ受クル教育的影響收態

我ガ郷土ノ隣接町村

東 立川町

西 八王子市

南 七生村

北 小宮村

ロ 隣接町村ニ及ス教育的影響及收態

我ガ日野町ハ町デアルガ殆ド農村ノヤウナ感ガスルソレデ商業ヲ営ム者少イニツイテ商業ハ一向振ハナイ農家カ多数デアルカラデアル從ツテ他ノ町ノヤウニ教育的機関ガ少イ只社會教育機関デアル一小劇場アルノミデアルカラ隣接町村ニ社會的教育ノ影響ヲ及スコトハ殆ド無イトイツテモ過ヒヌルモノデアル

ハ 隣接町村カラ受ケル教育的影響收態

(一)

隣接町村カラ受ケル学校教育機関職業授産

八王子市ニアル教育機関数カ町村ヨリノ入学生

府立第二商業学校

府立織染学校

府立第四高等女学校

私立聖学院

立川町ニアルモノ

府立第二中学校

私立立川高等女学校

私立医師養成所学校

(二)同じく社会教育施設

八王子市ニアルモノ

図書館 一

公会堂 一

公開運動場 一

治[illegible]図書館 三

劇場 二

立川町ニアルモノ

府立農業試験場 一

府立蚕業試験場 一

公開運動場 一

(三)

活動写眞館

前表ノ通リ我ガ郷土ノ東西ニ隣接シテアル八王子立川ニ中等学校其他ノ学校皆デセ校モ散在シテヰルカラ通学上ヤ其他ノ点ニ於テ他郷土ヨリモ便利デアルカラ自然在学者ガ他ヨリモ多イワケデ自然郷土ニ及ス影響モ多大デアルト思フ

又社會教育機関ニ就テモ八王子市ニ六立川町ニ四アルカラ其教化ヲ受ケルコトガ多イ府立農事試験場蚕業試験場カラハ農作物ヤ養蚕其他園藝家畜等ニ関スル指導ヲ受ケ農業ノ改良進歩ヲ計ルカラ其利益ノ多大ナルコトハ勿論デアル

次ニ公會堂等ハ実ニ社會教化ノ中心トモハネバナラヌ又其時々ノ講習會ヤ講演會ニヨツテ各人ノ趣味ニ應ジテ有益ナ講習ヲ受ケタリ講演ヲ聽イタリスルコトガ出来ル

我國ノ活動写眞ハ追々改善サレテ来タガマダ社教育的ナ即チ教育上有害ナルモノモアルガ一般的ニ社會教育ヲ兼ネタ娯楽機関デアル其ノ郷ノ人々ガ家業ニ勤ンデイツ何時ガモ慰安ヲ求メルノデ過シタモノデアル劇場モ嘗テシニ類シテヰル

其他公園運動場ノ如キハ体育ヲ奬励スルト共ニ一般民ノ娯楽機関デアル

コレ等ノ社會教育機関カ我郷土ノ隣接都市ニアルトイフコトハ如何ニ我郷土民ヲシテソノ教化ニ浴セシムコトノ大イカハ喋々スル迄モナイ

他郷土トノ比較

我郷土教育ガ他郷土ノ教育ヨリモ進歩シテヰルカシテヰナイカトイフコトハ他郷土ノ教育ノ進歩程度ヲ知ラナケレバ出来ルコトデナイ他郷土トイヘバ実ニ漠然タルモノデ範囲ガワカラナイヨシ範囲ガ分ツテモソレノ教育ヲ調査スルコトハ専門ニ亦モ多数ノ日時ヲ費サネバ出来ナイ故ニ係府下ノ各学校カラ各郷土教育ノ調査ガ出タナレバソレヲ比較サレタナレバ能ク明瞭スルコトヽ思フカラ茲ニ累シタ

〔一〕

一般的衛生思想ノ狀況

多摩川ト淺川沿岸ニ沿ツテ發達セル地ニシテ面積ノ割合ニ人家ノ多クテ自然ニ恵マレテヰル此ノ地方ノ衛生的方面ヲ見ルニ自然ノ影響ヲ受ケテヰルタメカ衛生施設ノ不完全ナ割合ニ傳染病モ少ク健康体ノ人ガ多イ、併シ其ノ生活狀態ヲ衛生的方面ヨリ見レバ非常ニ不衛生ナ生活ヲナシテヰルノヲ目擊スルノデアルガコレハ農村的又經濟的關係ノタメ止ムヲ得ナイノデアル

一般民家

今此處ニ述ベタ如キ生活狀態ヲ以テ一般民家ノ衛生的方面ヲ二三ノ例ヲ擧ゲテ考察シテ見ヤウ

(イ) 家屋

葺屋根ノ農家多ク屋根厚クシテ軒低クタレ陰氣ニ見受ケラル然ルニ近來二三ノ都會風ノ新築家屋ヲ見ルガ農家ニハ適シテヰナイ

◉全体ノ戸数九百十二戸ノ中

- 背屋根（約七割）
- トタン屋根（約三割）

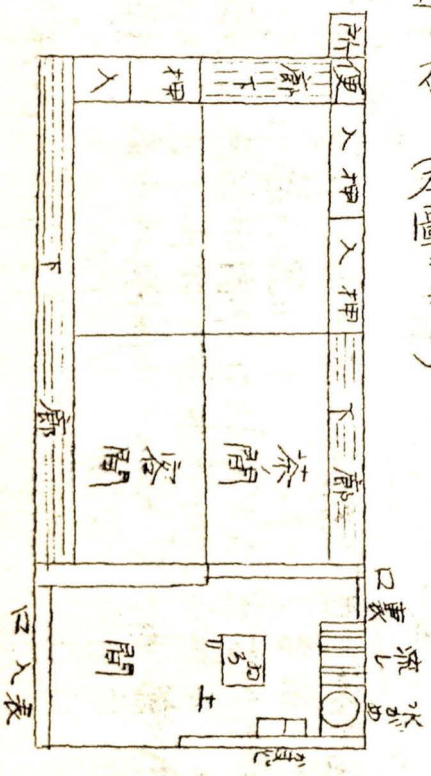
▲彩光通風ノ工合

大部分ノ背屋根ヲ家ハ軒低キタメ室内ハ暗ク日光ハヨク當ラナイガ通風ハ割合ニ工合ガヨイ

▲勝手

方角　家ノ南カ北

造り方（左圖ニヨリ）



造リ方ハ多少ノ差異ハアルガ一般ノ家デハ前圖ノ如キデアル入口ニ續イタ廣イ土間デアルカラ日光ガ當ラズ暗ク陰氣ナ處デアル

洗ヒ物ハ多ク川デナスカラ流シハ不完全ナ造リ方デアル

ハケ水ハ外ノ溜桶ニ溜メ置キ後ニ畠ヘ撒ク

炊事狀況

全部ノ煮炊キハ薪ヲ用フ

煙突ナキタメ家ノ中ハ黑ク煤ケテヰル

▲便所

方角

戌亥カ辰巳

掃除法

各家ニテ畠ニ撒ク

清潔屋等ハナク各家ニテ石灰ヲ撒キ清潔ニ注意シテヰル

▲風呂場

各家ニアル

造り方　極メテ簡單デアル
外ニ小サナ小屋ヲ建テ風呂桶ヲ置クダケデ洗ヒ場等ノ設備ナシ
屋外デアルカラ煙突ハツケズ

水　大体川ヨリ汲込ム
後ノ水ハ畠ヘ撒ク

(2) 用水

衛生上特ニ注意シナクテハナラナイ用水ニ對シテ割合ニ不注意デ多ク川ノ水ヲ食器類ノ洗濯　洗濯　風呂水　等ニ使用シテヰル

◎川ノ水使用多キ部落　豊田　堀之内　上田　宮
石田　新井　四ツ谷　東光寺

◎井戸水使用多キ部落（大字日野）

◎清水使用多キ部落（山下　豊田　谷戸）

△井戸水ノ水質　比較的良好

△井戸ノ種類　主トシテ「ポンプ井戸」
他ハ「開平井戸」

△井戸ノ数　戸数三戸ニ對シテ一ツノ割合

(3) 塵埃ノ處理法

蝿ヲ養成シテ傳染病ノ原因ヲ造ル恐ルベキ塵埃ノ處理ハト見レバ實ニ驚ク程不注意デアル
塵溜ノ箱ハナク一定ノ場所(庭、畠ノ一隅)ニ溜メテ置キ肥料トナスカ又ハ川ヘ流ス

(4) 下水裝置

勝手ヨリ流レル汚水又洗濯ノ水、風呂ノハケ水等ハ溜メ置キ畠ヘ撒クカ川ヘ流シ込マセルノデ下水トシテ完全ナ裝置ハナイ

(5) 家屋ノ掃除法

△定期大掃除

春ヲ定期トシテ一年ニ一回一斉ニ大掃除ヲナス（各部落トモ成績良好）

△養蠶ト大掃除

此ノ所ハ養蠶ヲ主要職業トシテヰル、デコレガタメニ室内ノ掃除ニハ注意シテヰル養蠶ノ前ニハ必ズ畳ヲアゲテ徹底的ニ大掃除ヲナス

△年中行事トシテノ煤掃キ

毎年暮ニハ新年ヲ迎ヘル準備トシテ大掃除ヲナス

(6) 病気ト手当

衛生思想乏シク不衛生ナ生活ヲナシテヰル場合ニ一般ニ病気ノ率ハ少イ

家庭ニ病人ノ生ジタ場合直チニ医師ノ治療ヲ受ケルモノハ極ク少ク自家療法ヲナスノガ多イ

病名モ解ラズ病勢悪シキ時始メテ醫師ノ治療ヲ受ケルノハマダ良イ方デ甚シイノニナルト傳染病デアリナガラモ陰匿シテ置イテ信神者ナドニ頼ムモノガアル從ッテ傳染病等デハ手遅レデ死亡スルノガ多イ

又醫師モ全部デ四人デ行キ屆カナイ点ガ多イヤウデアル

(ケ) 傳染病ニ對スル豫防狀況

前述ノ如ク傳染病ニ對シテモ割合ニ緩慢デカヽッテモ陰匿シテ屆ケナイノガ多イ

▲蠅ノ驅除

塵埃ノ始末悪ク下水ハ不完全田畠ノ肥料等ノタメ人家ノ少イ割合ニ蠅ハ非常ニ多イ 役場學校等デ蠅取リヲ奬勵シテハヰルガ其ノ多キタメ手ノ出シ様ノナイ有様デアル

▲井戸水ノ消毒

前述ノ如ク田水ハ川、井戸デアルガ川ノ水ハ消毒出來ズ井戸水ハ役場ヨリ「クライ錠」ヲ配布シテ

消毒ヲ奨勵シテハヰルガ一般家庭デノ實行ハ困難ノ有様デアル

▲豫防注射

一般ニ豫防注射ニ對シテ理解ガナイ
積極的ニ受ケル者ハ殆ドナク強制的ニ無理ニ受ケサセラレテヰルノデアル

(ロ)伝染病関係施設及ビ其ノ活動状況

前項ニ述ベシ如ク一般ニ衛生的方面ニ無関心デアルコト、町トシテノ豫算モ少ク此ノ方面ノ施設トシテ特別ニ挙ゲル程ノモノハナイノデアルガ二現在設ケラレテヰルモノニツイテ研ベテ見ヨウ

(イ)傳染病隔離病舎ノ設置

▲場所　掘之内（周囲ニハ人家ナク隔離病舎トシテハヨイ場所デアル）

▲総坪数　百二十坪
▲間数　十四室
▲収容人員　二十三人
▲豫算　七百八十六円　（昭和七年度）

◎活動状況

▲患者ノ出来タ時ノ處置
○役場ヨリノ指圖デ直チニ收容シ手當ヲナス
○醫師ハ町醫ガ出張診療ヲナス
○看護婦ハ八王子ノ看護婦會ヨリ派遣サル

▲死亡者ノ始末
町内ノ火葬場デ焼ク

▲平常時ノ注意
留守居二人ガ常ニクレソール、石灰ニテ消毒ヲナシ急ノ場合ノタメニ注意シテヰル

(2) 衛生組合ノ設置

各部落ニ委員ヲ置キ衛生思想ノ普及及ビ傳染病豫防ニツトメテヰル

(3) 消毒器具並ビニ消毒藥ヲ役場ニ置キ急ナ場合ニ直チニ使用出来ルヤウ備ヘテヰル

(三) 其ノ他ノ衛生實施要項

(1) 毎春大掃除檢査施行ス
(2) 毎戸井戸ノ消毒ヲクライ錠ニテナス
(3) 町内ノ溝溜、其ノ他不潔ノ場所ニ石灰ヲ撒布シ清潔ニ注意シテヰル
(4) 疫病豫防藥ヲ無料配布シテ其ノ豫防ニツトメテヰル
(5) チブス豫防注射ヲ實施シテヰル
(6) 小學兒童ニ爪切デー蠅取デー等ヲ實施シテ蠅ノ繭ヨリ生ズルウジ蠅ヲ取ラシ又川掃除ヲサセテ一般衛生ニ注意シテヰル

(四)死者病類統計（昭和六年度）

人口（昭和六年十二月末日現在）

五千七百二十六人

（男　二千九百十四人
女　二千八百十二人）

病名	人数
一　肺炎	二
氣管支肺炎	一
(イ)急性肺炎	四
カタル性肺炎	二
(ロ)助膜肺炎	二
格魯布性肺炎	一

二	腦溢血	一六
三	老衰	一一
四	發育不全	五
五	消化不良	五
六	肺結核	五
七	胃腸カタル	五
八	腎臓炎	五
九	感冒	四
十	心臓麻痺	三
十一	疫病	三
十二	尿毒症	三
十三	氣管支端息	三
十四	萎縮腎	二

一五	腦炎	二
一六	營養不良	二
一七	肺氣腫	二
一八	心臟衰弱	二
一九	肝臟硬化	二
二〇	腹膜炎	二
二一	打撲	二
二二	僧帽瓣閉鎖不全	二
二三	肝臟癌腫	一
二四	慢性酒精中毒	一
二五	乳兒脚氣	一
二六	腸結核	一
二七	胃粘膜萎縮症	一

昭和六年度傳染病患者

疫病	三	全部死亡
ヂフテリヤ	一	死亡
二十ブス	一	全快

二八 胃癌	一
二九 初生児メレナ	一
三〇 アトロヒー	一
三一 ヒルンエンボリー	一
三二 肋膜炎	一
三三 破傷風	一
三四 ゲフテリヤ	一
三五 脳部動脈瘤	一
計	二〇

〔五〕年齢別死亡統計

年齢	人数	年齢	人数
九二才	一	六九	一
九一	二	六八	二
八九	三	六七	一
八七	一	六六	一
八五	二	六五	二
八四	二	六四	一
八三	一	六二	一
八二	五	六一	一
八一	二	五九	一
八〇	一	五八	一
七八	二	五六	一
七七	一	五五	一
七六	三	五二	一
七五	一	五一	一
七四	一	五〇	一
七二	一	四九	二
七〇	二	四六	三

四	五	六	三	五	六	七	一	二	三	五	六	八	二	四	七	八	二	三	四
一	一	一	一	一	一	一	二	二	二	二	二	二	三	三	三	三	四	四	四
三	三	三	二	一	二	一	二	一	二	一	一	一	一	一	二	一	二	一	一

計

	一	二	三
一	二		
	二		
	一		
	三	八	三

神社寺院

神社

一、一般的敬神狀況

敬神思想ハ余リ篤クナイ、併シコレハ都会地漁村等ニ比較シテノコトデアツテ農村トシテハ普通デアル。

二、神社名ト沿革

八坂神社

日野町森町 二千五百四十一番地ニ在ル、境内六千百九十五坪、樹木欝蒼トシテ

豊尚暗イ経デアル、

祭神 素盞嗚尊

社格 式外村社

創建年月 永享六年

祭日 古クハ六月十八日デアツタガ中古ハ八月二日トナリ今ハ九月二日三日二行フ、

建築様式 流向配造 徳川末期ノ彫刻ノアル建築デアル、

末社 八幡社 境内南隅ニ在ル

辨天社 本社ノ南側ニ在ル

稲荷社 末社屋ハナイ、明治四十二年八月萬願寺村ニ在ツタノヲ當社ニ合祀シタ、

社掌 土渕氏

社傳二曰ク

當社ハ其ノ昔當町ノ西方ニ在リシト而シテ其ノ神靈ハ其ノ昔當町西方四ツ谷ノ西辺ニ土淵ト唱セシ淵アリ、此ノ辺ヲ土淵ノ庄トイフ、此處ニ普門寺ナルモノアリ、此ノ淵ニ異相現ルヽコト数度、普門寺ノ老翁怪ミテ其ノ辺ヲ尋ネシニ牛頭天王ノ水上ニ浮ビ給フヲ見ル則チヲ取上ゲ堂内ニ安置シ特願スルニ非常ノ信仰ヲ得タリ、其ノ後永享年中羅少僧都智傳中興シ元亀元年今ノ地ニ(今ノ普門寺ニ引移ス、元文二年今ノ社殿落成セリ、應安年間源家光公ノ時御朱印拾四石ヲ賜フ。

因ニ　現在ノ社殿ハ寛政五年ニ起工シ同九年ニ竣工シタルモノデアル。

稲荷社

日野谷戸五千九百三十七番地ニ在ル、境内百四坪、

祭神　倉稲魂命

社格　雑社　社掌　土淵氏

神明社

山下三千六十九番地ニ在ル、境内二百七十坪、

祭神　大照皇太神

社格　雑社　社掌　土淵氏

由来　元亀元年谷伊予ナル者伊勢大神宮ヲ勧請シテ今ノ地ニ社ヲ建テ祭祀ス、享保二十年谷源六郎當地土淵山觀音院普門寺ニ寄附ス、爾来興廃ナシ、明治二年八坂社ノ下社トナル。

坂上社
横町大坂上ニ在ル、境内四十五坪、
祭神　大貴已命
社格　雑社　社掌　土淵氏

嚴島社
新田ニ在ル、境内四百二十五坪、
祭神　辨財天
社格　雑社　社掌　土淵氏

四谷神社
四ツ谷ニ在ル、祭日　九月二日
祭神　不詳　社掌　土淵氏
神明社
東光寺ニ在ル、祭日　九月二日
祭神　不詳　社掌　土淵氏

稲荷社
日野萬願寺ニ在ル、祭日　九月二日
祭神　倉稲魂命　社掌　土淵氏

別府神社
宮二在ル、
祭神　別府太郎
祭日　九月二日　社掌　土淵氏

八幡神社
田村萬願寺ニ在ル
祭神　應神天皇
祭日　九月二日　社掌　土淵氏

関明神社
新井ニ在ル
祭神　不詳
祭日　九月二日　社掌　土淵氏

日枚神社
堀之内ニ在ル
祭神　大山咋命
祭日　九月二日　社掌　土淵氏

八幡神社
豊田矢崎ニ在ル
祭神　應神天皇
祭日　九月一日　社掌　黒木氏

惣神明神社
豊田ニ在ル
傳説　モト白髭明神ト号シタガ寛暦九年再建シタ時棟札ヘ惣神明神ト別當寺住職ガ書イタノデ今ニ至ルマデカク云フノデアル
社掌　小泉氏

天神社
豊田ニ在ル、
祭神　菅原道眞
祭日　三月二十五日　社掌　小泉氏

日枝神社
豊田ニ在ル、
祭神　不詳
祭日　四月　社掌　黒木氏

三島社
豊田ニ在ル、
祭神　不詳
祭日　四月十三日　社掌　小泉氏

若宮社
豊田ニ在ル、上屋二間四方、拝殿二間二四間、棟札ニ慶安五壬辰年地頭
大久保勘三郎建立トアル、
祭神　仁德天皇
祭日　九月九日　社掌　小泉氏

三、祭典ノ狀況

八坂神社
九月一日ノ夜八所謂夜宮デ當夜ハ加組、中宿、下宿ニハ各御假屋ヲ設ケテ神輿ヲ

納メルガ子供ハ此ノ神輿ヲ擔イデ御祭ノ氣分ヲ漂ハセル、又神宿ニハ特ニ氏子中ノ青年ノ擔ク大神輿ガ安置サレル、尚神社ノ近ク中宿ノ辺等ニハ雜子ノ場所ガ設ケラレテ晩クマデ賑カナ雜子ガ續ク、氏子ノ人達ハ先ヅ當神社ニ參拜シテカラ神輿ヲ擔グノヲ見タリ雜子ノ場所ヘ集マツタリスルノデアル、

二日ニハ社前ニ於テ祭典ノ儀式ガ執行サレル、神官、樂人、氏子總代、役員、有志小學校職員、兒童等參列シテ莊嚴ニ行ハレル、此ノ時社前ニアル大神輿ニ御神体ヲ遷シソレヨリ主ニ氏子中ノ青年ガ擔イデ氏子ノ區域内ヲ邀リ歩クノデアル、又小供ハ各區内ノ神輿ヲ擔イデ邀リ歩キ何レモ中々威勢ノヨイ賑カナモノデアル、大神輿ハ氏子中ヲ一巡シテ御假屋ニ納メル、後ハ雜子ガアリ或ハ神樂ノ催サレルコトモアツテ近在ヨリ多クノ人々ガ參拜ヤ見物ニ來、尚露天店モ多ク出テ非常ナ賑ヒデアル。

三日ニハ子供ハ神輿ヲ擔ギ雜子モアル、四日ノ午前中ニ神輿ヲ納メ其ノ他ノ物ヲ取片ヅケテ最後ニ各町内デ御神酒ヲ上ゲテ祭典ヲ終ルノデアル。

其ノ他ノ神社

祭典ノ最初ノ夜ハ夜宮デアツテ神社ヤソノ近ク二ハ提灯ヲ釣シ燈籠等ヲタテテ神輿ノアル所デハ擔イデ邀リ歩ク、氏子ノ者ハ皆參拜ニ行ツテ鎮守ノ森ハ賑ヒヲ呈スル、翌日ハ拝殿ニ氏子ノ人達ガ集マリ神官ガ來テ祭典ノ式ヲ行フ、其ノ後デ所謂御神酒ヲ上ゲテ祝シ合フノデアル、或ハ都合上最初ノ日ニ神官ガ來テ祭典ノ式ヲ行フ所モアル。

一、一般的信仰心ノ狀況

本町住民ノ信仰セル宗教ハ佛教デアル、ソレ故寺院ハ比較的多キモ教会ハ僅カニ天理教会、キリスト教会ガ各一ヶ所アルノミデアリソレモ最近出來タノデアル、佛教ヲ信仰スルノハ祖先ノ信仰ヲ受継イダノデアッテ特ニ深ク信仰スルトイフコトハ余リ無イヤウデアル、併シ祖先ノ祭祀ヲ篤クスルトコロノ良キ風習ノアルコトハ誠ニ結構ナコトト思フ。

二、寺院教会名ト沿革及ビ郷土発展ニ及セル影響

三蔵山大昌寺

日野町中宿南裏ニ在ル堂宇七間半四面、本尊弥陀ノ像ヲ安置スル、境内七百五十二坪、

宗派　浄土宗白旗派

寺格　知恩院末

開基及ビ年月　僧助給（讃與）文祿三年（二二二〇年）

寺傳ニ曰ク「本山ハ往古金峰山ト称セシ寺院廢衰シタルヲ文祿三年園人等瀧山大善寺ノ開山助給ノ德望ヲ慕ヒ還院ノ後招請シテ再建シ以テ開山トナス、徳川三代將軍ノ時寺領九石ノ朱印ヲ賜フ、今當山開祖牛遊ノ著述、説法色葉集

[illegible]ノ食器ナリトテ深ク秘シ、堂寺ノ宝物トシテ傳フ。」

如意山宝泉寺

日野町横町二在ル、堂宇八間二九間、本尊釋迦ヲ安置スル、行基菩薩ノ作デアルト、脇立二文殊普賢ノ二坐ガアル、境内千百二十八坪、

宗派　臨済宗五山派

寺格　鎌倉建長寺末

開基及ビ年月　不詳

土淵山普門寺

日野町中宿北裏二在ル、二間半四面ノ堂宇、内ニ正観音ノ本尊ヲ安置スル、境内二百五十九坪

宗派　眞言宗新義派

寺格　高幡金剛寺末

開基人　僧義雲

開基年月　應永五年（二〇五八年）

寺傳ニ曰ク、應永年間僧義雲ノ草庵ヲ建テ藥師佛ヲ安置ス、應永年中火災ニ罹リ、二世知傳金剛寺ノ徒弟トナリ該寺ヲ建ツ、中興ノ開祖トナス、本寺モト西方ニアリシガ火災ニカヽリ今ノ地ニ移リシモノナリ、古クハ天王社ノ領ナリシガ明治二年神佛判別ノ令アリテヨリ独立ス。」

山頂北山欽浄寺

「」北原ニ在リ、六間ニ六間半ノ堂宇　本尊弥陀ヲ安置スル、
宗派　浄土宗　白旗派
寺格　龍山大善寺末
開基人僧碩傳
開基年月　元和六年（一三八〇年）
寺傳ニ曰ク「當寺元和六年ニ草庵セシト雖モ寺ニ非ズ　然ルニ正保ノ年（正保元年　二三〇四年）増上寺ノ長老　超譽　中興シテヨリ一寺ヲナス　此ノ時ヨリ大善寺末トナレリ」。

日輪山　樂正寺
日野町四ツ谷ニ在リ、本尊　大日如来ヲ安置スル、
宗派　眞言宗　新義派
寺格　高野金剛寺末
開基及ビ年月　僧覺心　慶長十年（一三六五年）

青龍山　萬福寺
日野町日野萬願寺ニ在リ、三間ニ四間半ノ堂宇、本尊　達磨ヲ安置スル、
宗派　臨済宗　五山派
開基及ビ年月　僧心峯　良益　天正十四年（一三四六年）

萬松山　成就院
日野町東光寺ニ在リ、境内二百八十二坪、堂宇　三間半ニ五間半、釋迦ノ本尊ヲ安置スル、
宗派　天台宗

寺格　円通寺末

開基及ビ年月　僧永海　天正十六年（一二二四八年）

寺傳ニ曰ク「當山ハ往時日奉宗類ガ日奉城ヲ築キシトキ鬼門除ト
シテ建立セシ藥師堂ガ照山東光寺ノ住地ナリ、東光寺ノ地名
ニヨリ始マル」。

藥師堂

日野町東光寺ニ在ル、本尊藥師ノ坐像高サ一尺運慶ノ作デアルト、
成就院持チデアル、
由来ニ曰ク「日野本郷藥師堂　往昔日奉大天宗忠鬼門防御ノ爲ニ建設
又日奉宗没滅ノ後数百年ノ霜雪雨露ヲ凌ギ破壊スルニ
至ル之ニヨリ天正八庚辰年堂宇再建、天正以後村内二乃子婦
アリ將ニ分娩セントス其夜如来夢ニ告ゲテ曰ク「予ニ枝栗ヲ供
線セバ汝ニ授クルニ出産ノ易カラシムルコトヲ以テス」夢覺メテ速ニ之ヲ
供シケルニ果シテ安産ナリ、因リテ近隣ノ人皆佛力ノ効驗厳
ナルヲ感嘆シ分身ノ霊ヲシンコトヲ祈願スル毛ノ利益ヲ蒙ル豈
疑ハンヤ　現今ニ至リテ遠近ヲ論ズ群集シ詣リテ如来ノ
恩恵ヲ受クルモノ幾千万人　往古ヨリ如来鎮座ノ村裡出産ヲ
患ヲ者未ダ曾テナキトイフ、是如来ノ守護ナラン」。

四村山安養寺

日野町四村ニ在ル、寄殿九間二七間ノ東向ノ堂ガアリテ中ニ弥陀ノ本尊ヲ
安置スル、

宗派　眞言宗新義派
寺格　高幡金剛寺末
開基人　詳ナラズ、寺ノ過去帳ニヨルニ正應以前ノ創立デアラウ、
寺傳ニ曰ク「當山ハ田村安栖開基トナレリト　僧慶深中興ス、又本尊ハ行基ノ作ナリト傳フ。」

愛宕山石田寺
日野町石田ニ在ル、堂宇八間ニ五間地藏ノ本尊ヲ安置スル、
宗派　眞言宗新義派
寺格　金剛寺末
開基及ビ年月　慶興　康安元年（二〇二一年）
寺傳ニ曰ク「當時ハ康安元年開山慶興ノ草創ニシテ　始メハ吉祥坊ト称セシガ永和二年（二〇三七年）ノ頃ヨリ衰微シテワヅカニ其ノ跡ヲ存セリ、天文十三年（二二〇四年）七月九日玉川洪水ノ時上流ヨリ觀音ノ像流レ来ル、之ヲ取上ゲテ堂ヲ造リ安置ス、後文祿二年（二二五三年）沙門慶心ナル者別當職トナリ一宇ヲ建立シテ石田寺ト号ス。」

延明寺
日野町堀ノ内ニ在ル、七間ニ五間ノ本堂ニ地藏ノ本尊ヲ安置セリ、此ノ寺ハ別當寺ナリシガ有王山地藏尊ト合寺セルナリ、
宗派　眞言宗新義派
寺格　金剛寺末

大久山善生寺

日野町豊田ニ在ル、六間ニ九間半ノ本堂ニ本尊日蓮ノ像ヲ安置スル、境内ハ古ハ村ノ舊家平左エ門ノ邸デアッタガ寺建立ニツキ地頭ニ捧ゲタノデアル、隙地三百七十六坪、

宗派　日蓮宗

寺格　越後國蒲原郡長久山本成寺末寺

開基人　善生院妙蓮　寛永二十一年二月二十日死ス（地頭大久保勘三郎ノ女）

天理教会

日野町豊田ニ在ル、

ペインテコステ教会

日野町仲宿ニ在ル、初メハ立川ヨリ月曜日毎ニ出張シテ来タデアルガ最近現在ノ地ニ本教会ヲ設ケタ、行事トシテハ夜間児童ヲ集メテ話ヲシタリ祈リヲシタリスル位デアル、

寺院教会等ガ本町ノ発展ニ及シタ影響ハ特ニ取立テテ記スベキ程ノコトハ無イヨウデアル。

三、縁日、大会式等ノ時期及ビ其ノ狀況

大昌寺　十夜法会

十月八日ノ夜行ハレル、コレハ佛ノ会向ヲスルノデアル、此ノ時ハそうばんはりト云ッテ鐘四枚太鼓一個ヲ用意シコレヲ五人デ打チ鳴ラシ念佛ヲ唱ヘル

ノデアルガ此ノ時特ニ会向ヲ頼ムコトヲ俗ニふじをあげるト云ツテ特ニ会向料ヲ納メルノデアル。
當夜ハ他ノ寺ヨリモ僧侶ガ十数名集マリ中々盛大ニ行ハレル又近辺ノ老若男女モ来リ集マツテ念佛ヲ唱ヘ説教ヲ聽キ或ハ他ノ余興等ヲ見テ樂シムノデアル。

善生寺砂牡丹餅十夜

十月十二日ニ行フ、ごまヲツケタ牡丹餅ヲ佛前ニ供ヘテ供養スルノデアル。
當夜ハ余興等モアツテ相當ニ人ガ出ル。

藥師堂縁日

以前ニハ九月二十一日デアツタノヲ農家ノ晩秋蚕ノ関係デ現在デハ十月二百二要更サレタ、此ノ縁日ニハ近在ノ人々ガ講ヲツクツテオイテ其ノ者ガ本藥師ヘ參詣ニ来ルノデアル、ソシテオ金ヲ出シ御札ヲ頂ク、安産ノ願ヲ懸ケテオイタ者ハ安産ノ御札トシテ藁ノ実ヲ巻ノマヽ三個竹筒ニ包ンデ持ツテ行ク。
近隣ノ者ガ集マツテ相當ナ賑ヒヲ呈スル。

安養寺焙烙灸

夏季土用ノ丑ノ日ニ行ハレル、一種ノ呪術デアラウ頭ニ焙烙ヲ載セテ灸ヲ据ヘルノデアツテ、頭痛ヲ癒スノデアル、又此ノ時ニハ胡瓜呪禁モ行フ、此レハ患部ニ胡瓜ヲアテテ呪フノデ其ノ胡瓜ハ家ニ持チ帰ツテ捨テルノダサウデアル。

四、信仰上ニ表レタル特殊事項

盂蘭盆会　彼岸ノ霊祭

此ノ二ツノ事柄ハ廣ク一般ニ行ハレテ居ルコトトテ特殊事項トハ云ヒ難イカモ知レナイガ或一面ヨリ見レバ矢張リ特殊事項ニ入レテヨイト思フ。

此ノ時ハ死者ノ靈ヲ安ンズルタメ菩提寺ヘ米・金等ヲ持ツテ行ツテ佛ノ会向ヲ頼ミ或ハ特ニ施餓鬼ヲシテ塔婆ヲタテル。又墓參ハ各戸必ズスルノデアル。

横町ノ地藏堂再建

永ラク廢レテ居タ地藏堂ヲ最近主トシテ横町ノ人達ノ力ニヨツテ再建シテ地藏尊ヲ安置シタ、此ノ堂ノ建築ニハ横町以外ノ人デモ相當ニ寄附等ヲシタヤウデアルガ地藏尊ヲ深ク信仰スルコトヨリ此ノヨウナ事業ガ出来タノデアラウ。

空泉寺持チ上ゲ地藏尊

願ヒゴトノアルトキ此ノ地藏尊ノトコロヘ来テ其ノ願ヒゴトヲ念ジテ石像ヲ持チ上ゲルノニ其ノ事ノ叶フトキハ輕ク持チ上リ叶ハナイトキハ持チ上ラナイトイフ。同ジノタメ遠近ヨリ多クノ人ガ来ルノデアル。

馬頭觀音ノ石塔建立

馬ヲ所有シテ居ル者ガ奬学金シテ馬ノ供養ノタメニ此ノ塔ヲ建テタノデアツテ馬ヲ愛スル心ガ延イテハ馬頭觀音ヲ篤ク信仰スルヨウニナリ其ノ結果ガ此ノ塔ノ建立トナツタノデアル。

一三　郷土民ノ生活

一、郷土民ノ道徳ニ関スル一般観念

町民ハ一般ニ保守的デ消極的デアル。コレハ比較的大都会ニ離レテオル為、又祖先傳来ノ農業ガ一般ニ行ハレテオル必為デ、ソノ才能デ傳統的ナ日本古来ノ道徳ガ大シタ斧鉞ヲ加ヘラレナイデ残ツテオルト云ヘヨウ。

即チ、己ノ職務ニ勤勉ナルコト、人情ガ美シクテ慈善的ナ行為ヲ善ブコト、熱情ニ富ンデ義侠的精神ノ豊カナコト、殊ニ従順ニシテ、子ノ親ニ対スル、妻ノ夫ニ対スル態度ハ美シイモノガアル。

ソレト共ニ、又アマリニ因習ニ陥リ、既成道徳ニ對シテ無自覚ニ、無批判的ニ従ハントスル傾キヲ生ジテオル。

即チ　徒ラニ風評ヲ懼レテ己ノ所信ヲ貫徹スル勇気ノ乏シイコト、不撓不屈ノ進取的精神ガ乏シクナスニ欠ケテオルコト　等ヲ挙ゲルコトガ出来ヤウ。

然シ近時交通線頻ニ輻輳シ、人々ノ生活モ複雑トナルニツレ、町民ノ気風、道徳観モ次第ニ大都会化サレテ行キツヽアル。

二、地形ト風習人情トノ関係

日野町ハ多摩川ト浅川トノ合流點ニ接スルタ多クノ集落ヲ総括シタモノデ、高度ハ六〇メートルカラ九〇メートルデアル、(日野島台及ビ、中央線ノ西北部ハ一〇〇メートル)土地ガ過平ナル為、当町ノ主産業タル蚕糸、養蚕ガ行ハレテヰル。又、大東京、八王子ノ間ノ位置ヲ占メテヰルコトハ交通ノ輻輳ヲ来シタ。即チ、

甲州街道(國道)ソノ他府道、中央線(省營、電車上リ下リ計一日三十六回運転。停車場二)京王電鐵線、自動車等々。

交通ガ輻輳シテヰタ為、人情、風習、言語、生活ノ様式等ハ一般ニ都会化

ナシテ行ツツアル。殊ニ経済的ナ観念ガ行キ亘ツテオル。

人間、風習ニハ特種ノモノハナイガ、各部落民ハモノ部落民ヲ互ニ相知ツテ

オルカラ、義理ヲ保チ、名誉ノ保ツトイフ精神ガ強イ。

ソノ他次ノ様ナモノヲ挙ゲルコトガ出来ル。

平生農ヲ本職トシテ、ソノ間ニ賃銀労働ニ出ルモノガ多イ(道路、砂利、堤防)

地形ガ平坦ナタメ田畑ノ往来ニ自転車及荷車ヲ使用ス。

肥料ヲ農具ニ優秀ナ物ヲ使用ス。

三、衣食住ノ状況及ビ之ガ改良スベキ事項

(イ)衣服

殆ド和服ヲ用ヒテオル。中ニ男子及就学児童ハ洋服モ用ヒテオル。児童

ノ和服ハ学習及作業ノ上カラ洋服ニ改メタイガ、之ハ経済上カラ来テオルフ

トダカラ強ク主張サレナイ。

(ロ)食事

普通ノ家庭ノ食事ヲ見ルト、米及麦ガ主食ヲ副食物トシテ、野菜、干物、魚類等デ、牛、豚ノ肉類ヲ食ベルハ稀デアル。

五六月頃カラ十月頃迄農繁ノ繁忙ナ時、日ノ長イ時ハ、朝食ト晝食トノ間ニ(九時頃)オ茶、晝食ト夕食トノ間ニ(三時ー四時)おこしよト云ッテ軽イ食事ヲ取ル。

コレノ改良ノ事項トシテハ、食物ノ調理、營養價ニツイテ考究スベキコト。

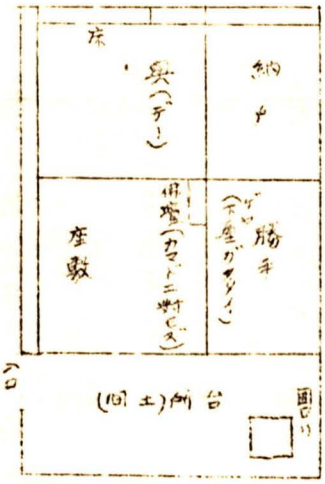
(ハ)住居

屋根ハかやガ主デ近来ハトタンガ著シク現ハレテ来タ。

部屋ハ殆ド寝室ヲ兼ネルモノダカラ、少シニ適スル様ニ造ラレテヰル。座敷ニハ夏ハ通常畳ヲ敷ク冬ハ畳ヲ用フ。

ド、家モ五六坪ノ廣サ土間ガアル。（台所（デードコ）トイフ）居爐裏ガアツテ、食物ノ煮ルヤウナモノ、昼ハ世間話ノ花ガ咲ク所デアル。倉庫ノナイ家デハ、ソノ土間ガ倉庫ノ代用ヲ務メル。

間取ノ一例



庭ハ非常ニ廣イ。之ハ籾ヲ干シタリ、稲ヤ麦ヲコイダリ、打ツタリスル為デアル。

門ハ殆ド造ラナイ。

改良工夫トシテハ、コノ住居ハ養蚕ニモ兼用サレルノダカラ無理カモ知レナイガ

通風ト通光、濕気等ガ考慮サレテヰナイ為、非衛生的ナコトガ少クナイ。住居ガ人ノ健康ニ精神ニ及ボス影響ハ大キナルモノデアル。今ヨリ人間ヲ主トシテ考察サレタイモノデアル。

冠婚葬祭、年末年始ノ贈答等社交儀礼ニ関スル慣習ノ状況並ニ奨励改善スベキ事項

何レモ特有ノモノハナク極ク一般的ナ様式デ行ハレテヰル。然シ道未経済界ノ不況ノ結果、町民ノ生活状態モ苦シクナツタ為、町役場ハ贈答儀礼ニ関スル注意ヲ示サレタ。町民モ自覚シテソレニ従ツテ浪費ヲ避ケテ堅実ナ方向デ行ツテヰル。コレハ将来モ大イニ奨励スベキコトデアラウ。

五、部落ノ組織制度及社交団体ノ状況

(1) 五人組制度

此ノ制度ハ現在モ行ハレテヰル。五戸ヲ以テ一組トシテアルガ、ソノ部落ニヨリ、四戸又ハ七戸八戸モ一組トナツテヰル場合モアル。ソノ五戸ノ戸主ノ中デ最モ有力ナ者又ハ財産ノ多キ者ガ組長トナツテヰル。組長ハ報酬ハナシ。之ハ如何ナル事ヲナスカト云フニ、部落内ニ何カ事件ガ起ツタ場合トカ、其ノ他部落民総テデ行ハネバナラヌ事ガアル場合ニ組長ガ代表デ之ヲ行フノデアル。

四、若衆組

「ワカイシグミ」ト呼バレ現存スル。年齢三〇才位迄デ、一部落一組デアル。一年ニ二回位会合シ、農産物ノ品種改良其ノ他部落ノ発展策ヲ謀ズルノデアル。

五、講中

此ノ講トハ念仏講ノ謂デアル。部落内ヲ数組カノ講ニ分ツ。コレハ講中ノ一員ニ葬儀ガアル場合、講中ハ之ヲ助ケテ葬儀ヲ行フノデアル。其ノ他法事、祝賀等ノ時モ相往来シ親交密ナルモノガアル。

(ニ)防火

通常二〇才頃ヨリ四〇才頃迄ノ男子ヲ以テ組織スル。(一戸ニ二人以上アル場合ハソノ中一人)日野ニ本部ヲ置キ、各部落ニ支部ヲ置ク。各支部ニハ、ポンプ及ビ火ノ見櫓等ヲ備ヘ又毎年消火ノ練習ヲ行フ。

又一部落ヲ数組ニ分チテ夜警ヲ行フ。期間ハ火ノ使用多イ冬デ、乾燥シタ日ノ続ク時デアル。

(ホ)相互補助ノ施設

各部落ヲ一組トシテ互助組合トイフモノガアルガ、現在デハ殆ド活用サレテヰナイ。

六、祈禱ノ種類及ビ一般状況

未開民ノ間ニ見ラルヽ様ナ祈禱ハナイ。

七、方言及訛言ノ状況

近来交通ノ頻繁トナルニ伴ヒ、方言及訛言ハ頓ニソノ姿ヲ失ヒツヽアル。茲デハ現在使用サレテヰルモノヽ中カラ普通ナモノヲ抜出シテ見ル。

名詞（方言）　ヒコヒコ（蜘蛛）　オーゼミ（油蟬）　ホーシレーツクツク（ツクツクボーシ）　ヤヨーチヨベツコ（燕）　トダボ（蝦蟇）　クサバツコ（草叢）　クサノハナーモタグサ（蓬）　ウエタ（田植）　ヘノキダマ（菅笠）　クルマドウ（水車小屋）　オコジヨ（オヤツ）　キビス（急須）　デー（奥ノ間）　ジヨウグチ（門、門ハナクテモ家敷ヘハイル所）　シヤンジヤク（兵兒帶）　モヤ（粗桑）　マミヤ（眉）

其ノ他ノ品詞

ベエ。四ツノ意味ニ用ヒラレル。一、人ヲ使ス場合（例、行クベエ）二、事物ヲ推量スル場合（例、「行クベエ」―「エニアタセント」、花ガンベエ）三、念ヲ押ス場合（例、行クベエ―「エニアタセント」）四、意志ヲ表示ス（例、話スベエ、シベエ）

ダーワ（確定的ナ推量。例ー東京（行クダーワ）
ダ（自己ノ行動ヲ決定スル場合、オラ泳グダ）

バダ（行クノダ）ノ
ハヲ脱シタ形。

オゾイ（ズルイ）　ノメツコイ（ズベズベシタ）　コツパイ（ザラザラ）
ヘタラ（ヤタラ）　オツペス（押ス）　オンマケル（ブチ撒ク）　スベタル
（滑ル）　ヨバル（呼ブ）　チヨツクラ（チヨツト）　セール（達ボル。又、サセル）

訛言ノ状況

「カイ」「カエ」ハ「キヤー」トナル。例　キヤール（蛙、歸ル）　キヤーボシ。
（河ノカヘボシ）　ブツキヤール（ブツ倒ル）

「タイ」ハ「チヤー」例　イチヤー（痛イ）　行キチヤー。

「ナイ」ハ「ニヤー」トナル。例　ニヤー（無イ）　シニヤー（シナイ。）

「ハイ」ハ「ヒヤー」例　ヒヤール（這入ル）

「マイ」ハ「ミヤー」例　オミヤー（オ前）　行タミヤー（行タマイ）

「ヒ」ヲ「シ」ニ回ル。例　シノ（日野）　シボ（翌）　シコウキ（飛行機）

「ル」ヲ「ン」ニ。例、ミンダ（見ルノダ）カケンノ（駆ケルノ）

ソノ他、ヘービ（蛇）ニハツトリ（鶏）シケー（関）メヤドマシイ（忌ワシイ）

セイブ（歳暮ノ贈物）マーダ（未ダ）マツツグ（真直）コウ（恵イ）

慣用デ方言ラシクナツテオル言葉

アンダカ（何ダカ）「サアドウダカシラン」ト「サウカネ」トヨ一緒ニシタ

ヤウナ意味デ用ヒラレル。必ズ人ノ返事ニ使ハレル。例「雨ガ降リサウ

ダヨ。」「アンダカ。」

ソレカラ（ソレダカラ、ソレデノ意）例「アノ子ハヨク出来ルサウダ」

「ハハハ、ソレカラ オヤゲサンガ喜ンデヰンダ。」

カンニン（ゴメンハ使フコトガシ）例、カンニンネ。カンニンシテヤン。

チヨイ（少シ）例 今チヨイ。

アレヨ（マアニ似タ感投詞）

カヤ（カイ、ト同ジ疑問詞）

追補　オツトバス（追ツ掛ク）　オツタテル（起シ立テル）　カツタルイ（ダルイ）

「ゾ」ヲ「ド」ニ訛ル場合アリ。例「癖イド」

八、迷信ニ関スル一般状況及具体的事例

迷信ニ陥リ又ハ縁起ヲカツグヤウナコトハナイ。只祭日縁日等ニ古来ノ風習ヲ行ツテヰル位ノモノデアル。

九、土俗ニ関スル一般状況及具体的事例

(イ) 民間簡易療法及護符呪詛等ノ風習ナシ

(ロ) 縁起玩具　町内ニハ別ニナイガ高崎ノ達磨（正月廿八日）瀬戸大国魂神社ノ鳥獣扇（七月廿日）等ハ町民ノヨク求メルモノデアル。

一〇、細民部落ナシ。

二、一般民衆娯楽ノ状況及コレガ奨励改善ヲ要スル事項

民衆的娯楽トシテ挙ゲベキモノナシ。日盛ヲラヂオアツテ活動写真、芝居等ヲ

行ニ興行スルノミデアル。蓋シ高級ナル動産境内ニ行ハレル毎月廿八日ノ定期及時折巡業シテ来ル芝居、活動写真ガ民ノ主ナル娯楽デアラウ。

農村ニ娯楽機関ノナイノハ都會憧憬ノ情ヲ起サシメ酒色ノ誘惑ニ引カサレ易イ心ヲ作ル一因トナルハ当然ノコトデアル。運動、読書、音楽、舞踊、研究發表等費用ノ許ス限リノ設備施設ヲ望ムモノデアル。

一一、

一二、休日ニ於ケル一般民衆ノ状況

休日ノ種類ニヨツテ異ルケレドモ、一般ニハ遠方ノ親類ヲ訪問シタリ、神仏ニ参詣シタリ、八三ニ日、五月節等ノ祭祭機関ヲ観イタリスル。

三、懇談ナシ。

名勝・遺跡

序ニ力八ヶ
宿場上ミヲノ日野
日奉城址
七ツ塚
上人塚
富士塚
一里塚
所間加賀入道之墓
布光寺東師堂鎮
大薩天
傘松
明治天皇御小休所
皇太子殿下御手植松
石碑時代之遺物

序ニ代ヘテ

何等ノ研究モナク、些ノ実地踏査モナク、私ガ茲ニ仰々シク一項ヲ設ケテツラツラオモヒヲ述ベテヤウトスル、暴挙ヲマツオ許シシテ置キマス。

平生カラ史跡研究ニ興味ノスクナイ私ハ、郷土ノ名所、旧蹟、遺物等ノ調査ヲ今ニシテ何等カ手ヲツケテイマカ全ク、困惑致シマシタ。カト言ツテ今申シタ通リノ性質ノタメ、未知ノ宝庫ニ向ツテトビコンデ行クトイフヤウナ、勢勢タル研究心モ燃ヤカツタノデアリマスンニ関係デ他ノ人達ノ仕事ガ著々ト進ンデ行クノヲボヤヤリ眺メナガラ徒ラニ日ヲ過シテシマタ。対象ノ認識不足カラスル無観的ナ態度デ、ンナワケデ、愈々ヤラザルヲ得ナイ状態ニ陥ツテ出ヤラヲ得ズ筆ヲトリ、稍々眞剣ニナツテ、対象ヲミツメ始メタノハ提出日ヲ後幾日モナイトイフハ月ノ末デシタ。従ツテ、ソノ研究モ至ツテ浅薄ナモノデアリ、ソノ調査モ極メテ杜撰ナモノデアルニ違ヒアリマセン。研究順序モ違ツテ居ルト思ヒマス。大体郷土ヲ対象トシテ研究ガハジメラレソノ結果トシテ文献ヲ考証ヲガ形成サレルモノト考ヘマス。ソシテ私ノ研究経路ハ全ク逆ノコースヲ踏ンデイルカノ如ク考ヘラレマス。即チ私ノコノ記録ハ既刊ノ日野町郷土教育資料（一輯及ビ八輯）ノ範囲外ニ出ナイト申シ上ゲルヨリ外ナイデアリマス。従ツテコノ書キマシタコトガ日野町ニ関スル各所、旧跡、遺物ノ全部ヲ書キ尽シテ居ルト断言スルコトハ出来ナイデアリマス。勿論ミジカイナガラモ、コノ幾百カノ研究ノ合間ニ、若干ノ興味ヲ持ツコトガ出来ルヤウニナリ、大ニ愉快ニ研究ヲ続ケルコトガ出来タコト、家族トシテノ郷土、郷土死罪トイフヤウナ新ラシイ研究材料ヲ見出シ得タコトヲ非常ニ喜ベバシイ思ヒデアリマス。序ニ代ヘタイト思ヒマス

尚記録中ヲ断リナキモノハスベテ前記ノ資料ノ再録デアルコト、一部ノ記録ヲ関係者ノ希望ニヨリ削除シタコトヲ附加ヘテ置キマス

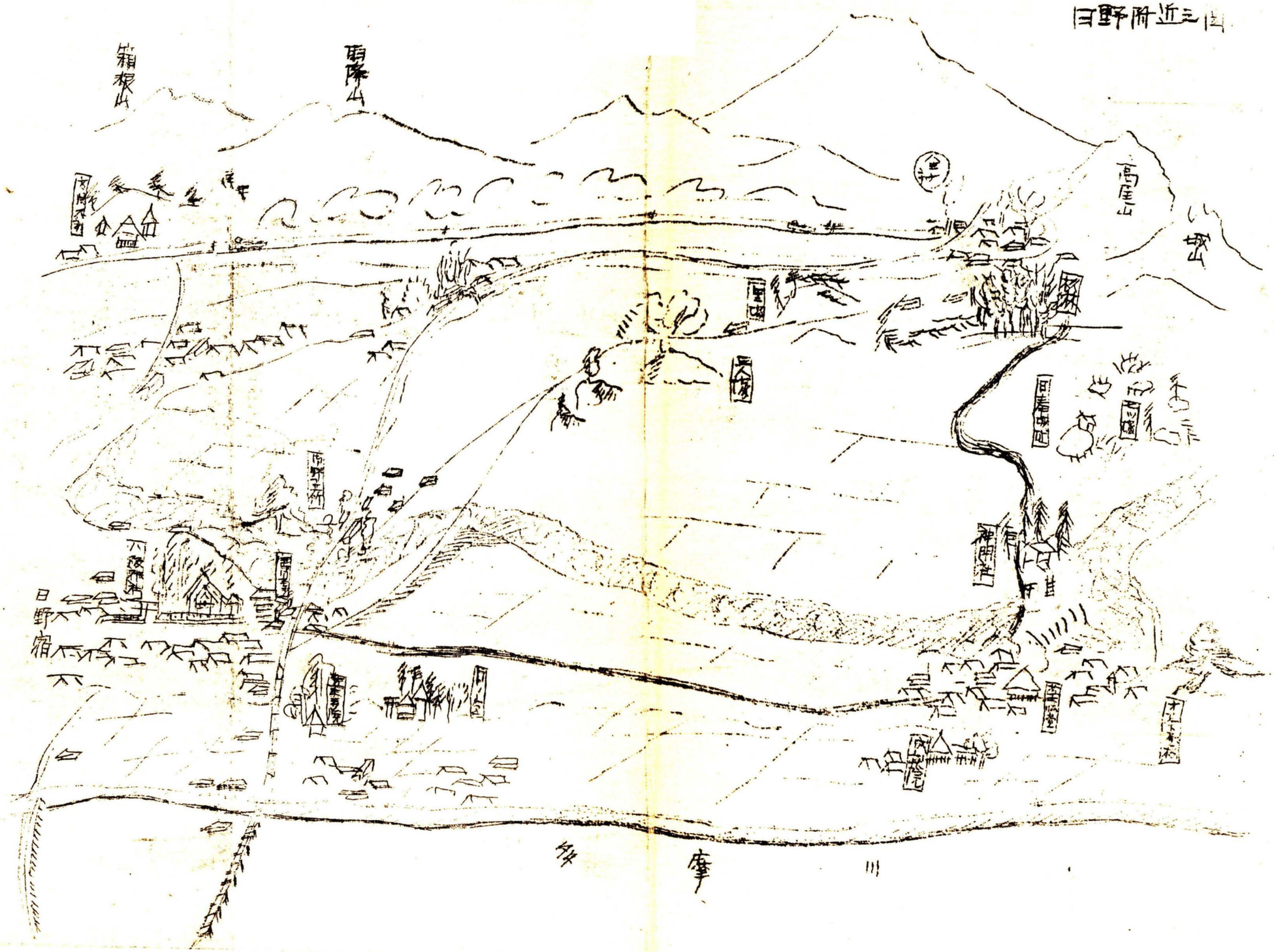
宿場トシテノ石野

宿場或ハ宿ト言フ名稱ノ出來タノハ德川時代ニトデアッテレマデハ驛トイフ名稱デ呼ばレテヰタモノデアル駅ト呼ベルヤウナ形ノ考ヘラレル最モ古イモノハ孝德天皇ノ大化二年畿内ノ諸國ニ駅馬伊馬ヲ置イタコトガアッタ文武天皇大宝令ノ制定ノトキ之ヲ諸國ニ本中山陽ノ諸道ニ十里毎ニ一駅ヲオキ駅毎ニ驛長ヲ置キ馬船等ヲ置クト云フコトヲ以後次第ニ年ヲ追ッテ拡張サレ完備サレテ行クヤウデアリ延喜ノ制ニ示サレタモノニヨッテソノ狀態ヲ窺フコトガ出來ル然ルニ稍整ッテ來タコノ制度駅伝モ鎌倉時代ヲ經テ建武中興ノ再ビ壞ルニ至ッテ全ク廢サレテシマッタ否行ハレナクナッタモノヤウデアル　江戸時代ニ至ッテ官道ヲ始メ主要ナル宿驛ヲ置キ地子ヲ免ジ金穀等ヲ給与スルコトトナル通リ東海、甲州、日光、中山、奥州ノ所謂五街道ヲ定メ駅路ニトラヘテ町年寄本陣屋問屋問屋ノ人ガ司ッテ公用ノ伝馬駄馬ハ人ノ発スル行符ニヨッテ多モノデアッタ更ニ後ニ半ノ道中奉行ヲ置キ江戸時代ノ駅逓制度ハ発ト完備シタ　五街道中甲州街道ハ即チ江戸日本橋カラ甲斐ニ至ルモノデアッテ道程日本橋甲府間ニ十四次約三百里デ東ニ蓮崎ニ諏訪ヲ経テ約三里ニ町ニテ中仙道ト合スル

日本橋カラ九里三十二町ノ所ニ藤新宿、下高井戸、上高井戸、布里宿、府中ノ各宿ヲ経テ日野ニ達スル旅宿、饗庭ニ指ヲ以テカゾヘテト相当　段盛ナモノデアッタト考ヘラレル所謂本陣ノ所在ハ現在字日野佐藤ノ両家デヤッテヰタノダサウデ当時モノ附近ニ制札ガ立テラレ最モ賑ヤカデアッタヤウダ　宿場人口ナドモ三千人ニ近ク集合ノ合国ニハ法螺ノ貝ヲ用ヒタトイフ

前記ノ如ク研究ニ至ッテ私ハ宿場ニツイテコト以上ノコトハ知ラズ又調査スル時日モナイノデ省テ俗ニ帰ル　ニ関係ノ多イ宿駅ノ沿革ノ大要ヲ記シテ研究ノ發端ト致シマッ單ヲ摘キマス

日野附近之図



日奉城塁

日野宿ノ西方東光寺字七ツ塚ニ在リテ東西三町五十五間南北三町三十五間 周囲十三町十三間丘陵ヲナシテ在ル 平度同字状ヲナス 東北ハ峡谷デアリ西南ニ続キ南ハ野続キシテ城野ト称ル 西ハ谷地川ニ沿ヒ 北ハ絶壁ヲナシテ多摩川ニ臨ンデ在リ 現在デハ烟山林トナシテ往時ノ俤ヲ偲ベセテ在ル 台ニ上レバ四方絶佳ノ眺望ヲ擅ニスル事ヲ得ベシ

此ノ地ハ古ヘ天御中主尊ヨリ九世高魂尊ノ後裔日奉朝臣宗麿勅命ヲ蒙リテ東国ノ鎮撫トシテ本州ニ下リ居城ヲ営ム多度デアリテ、爾来此ノ地ニ住ミ、其ノ孫日奉大宗麿ノ代ニ至リテ西氏ト稱スルヤウニナリ ナホ此ノ地ニ住ンデ在ル 之ガ所謂武蔵七党ノ内西党ト稱スル(族ノ祖デアル、其ノ子孫ハ本郡及ビ橘樹郡等ニ蔓延シ各地名ヲ以テソノ氏トシタ、 由井、柏江、田村、平山、上田、立川、由木、山口、長渕等稱ス、中川、西宮、野田ニ、信乃、高橋、清恒、半皆 ソノ一族デアル。 二十ヶ所 武蔵七党トハ、一説ニ外、横山野上、村山、児玉、猪俣 丹、六氏ヲ合セ稱スル。 治承四年源頼朝、鎌倉ニ幕府ヲ創ムニ至リテ一族系図ヲ、是ニ従ツタ後 東歴三年 和田義盛ト北條氏ト鎌倉ニ戰ヒタ際宗族 横山 義盛ニ与シテ遂ニ義時ノタメニ滅ボサレタ、従ツテ 日奉城モ亦廃滅ニ帰スルコトトナツタ。(以上立川武蔵氏提書 武蔵七党系譜ニ據ル)

亦参考ノタメ当城址所有者ヲ挙ゲルト左ノ通リデアル(但シ大正八年二月調査)

立川正知氏　　東住銀蔵氏　有山寛氏、和田義久氏、東住千太郎氏

七ツ塚

1. 石器時代人種ノ居住地、日奉氏居城址

東光寺村字塔ノ中央ヲ左ニ折レテ大阪ヲ上ル道ニハ日野谷ノ北端ニアル畑地ハ到達スル東北西ノ眼界遠ク開ケテ関八州ノ山岳ト対シテ居ル誠ニ形勝ノ地ト謂フベキニアル

此ノ附近一帯ニ石斧・石鏃ヤ土器類ノ破片ガ無数ニ散在シテソノ道ノ好資料ヲ与ヘテ居ル、ニレニ依ツテ　石器時代　此ノ附近ニ人種ノ居住シテヰタコトガ考ヘラレル

又、此ノ地ハ日奉城址ト稱シ武蔵七党ノ一ナル西党ノ祖、日奉宗頼及ビ其ノ子孫ノ日吹大夫宗忠等ノ居住セシ地デアルトイフヘ前掲〉大阪ヨリ南西二町程ノ畑中ニ散在セルハ其ノ当時ノ墳墓デアルト言ハレテ居ル、大小七個、発見セラレテ七ツ塚ト呼バレ

2. 七ツ塚ノ位置、現状

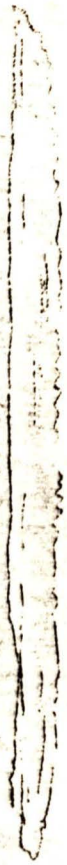
七ツ塚ハ大小七個アリテ最大ナルモノハ高サ八尺七寸周囲十七間、最モ小サイモノハ、高サ四尺周囲八間アリト古記録ニアルガ、其ノ後発掘シタモノモアツテ、現今デハ形状、大小ナド幾ラカ変化シテヰル　其ノ一ハ後年土石ヲ高ク積上ゲテ頂ニ琴平ノ小祠ヲ祀ツテアル、祠ヤ土石数本ヲ除ケテアル、コノ塚ハ畧長方形　長サ五間半ノ幅三間程、高サ所丈二尺程デアル

其ノ二ハ第一ノ後方ノ畑中ニアリタガ既ニ発掘シテ今ハ殆ンド形状ヲ止メテヰナイ、発掘シタ所ノ土石ハ第一ノ塚ニ積上ゲタノダサウデアル、其ノ三、四、五、六ノ四個ハ第一ノ西方ニ約一丁ヲ隔テテ四角形ニ位置ヲ占メテヰル、ガ、既ニ発掘シテシマヒ、現在デハ僅カニソノ跡ヲ留メテアル、其ノ七ハ、第一西北方ノ山林中ニアツテ、余リ高クナイノデ一見所在不明デハアルガ未ダ発掘シタコトガナイノデ将来考古学的研究ニハ最モ参考トナルベキ価値ノ多イモノデアル、〈七ツ塚図参照〉従来所謂七ツ塚七箇ノ中五箇ハ既ニ発掘シ残リノ中一箇ハ人工ヲ加ヘ最后ノ一箇ハ全ク人工ヲ加ヘズ当時ノ儘デアルト考ヘルコトガ出来ル

古墳周辺出土 埴輪人物頭部

現在帝国大学人類学教室保管

古墳
古墳内出土 直刀 長一尺八分 巾八分 厚サ七ミリ三分



古墳周囲耕土ノ際発見 五川正次氏畑中

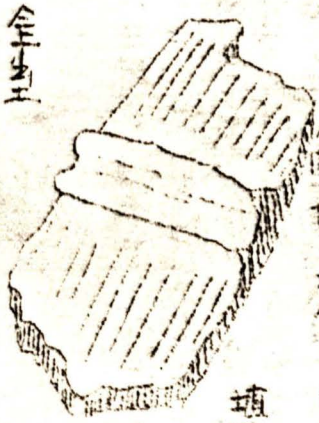
曲玉

丈八分五厘
色 博茶

切子玉

丈十分
巾四分
水晶

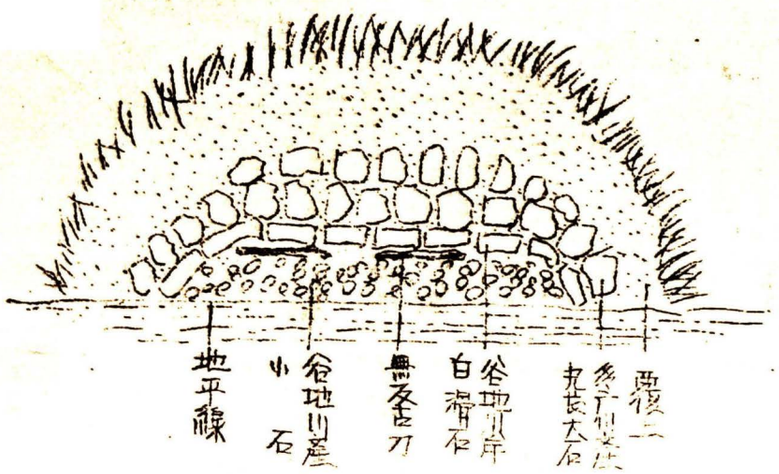
明治三十七年中発掘セシモノ 金環 五本 上図ノモノ外 長一尺三寸 二尺三寸、三尺七寸、二尺 八寸 ナリ 不平八隅板、平ラナリ 全初八畝ム

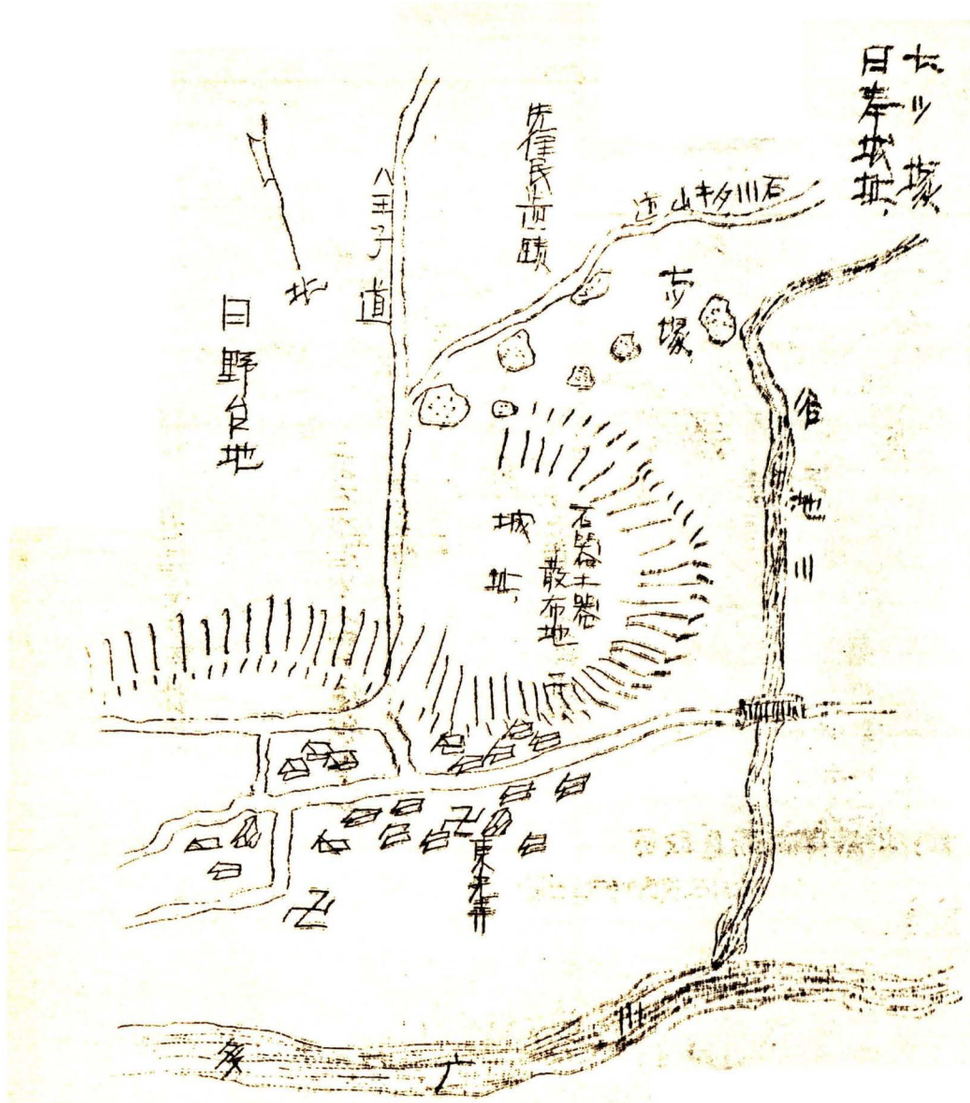


全出土

埴輪円筒部

七ツ塚内部断面見取図
（立川正次氏所有之塚）





3. 發掘　古刀二本及ビ埴輪ノ

イ. 古刀　明治三十四年春ノ七ツ塚ノ中央部ノ畑中ニアル、三、四、五方ノ四個ノ塚ヲ発掘シタ、マヅ盛土ヲ除キ平地ヲ二三尺堀リ下ゲルト、大小石デ敷ク固多層ガアル、更ニソノ土ヲ除ケバ、大石（多ク川石デ中ハ三尺位ノモノモアル）ヲ重ネテアル、其ノ下ニ、長劍ヲ一本、或ハ二本、埋メテ最モ底部ハ全ク大石ヲ敷キ詰メテアル（図参照）

ロ. 翌年ノ七月、和田吉太郎氏所有ノ畑中ニアル第二ノ塚ヲ発シテ略全様ノモノヲ得タ

4. 發掘品

イ. 古刀　塚ヲ發掘シテ得タ古刀ハ第一ノ塚ニ在ル祠ノ中ニ納メテ保管シテアリ、其ノ中（十二本）長イモノハ刀身三尺程、皆直身デアッテ発掘ノ当時ハ鐔ノ附イテイタモノモアッタガ、今ハナイ（図参照）

ロ. 埴輪　土川倉次氏ノ畑中カラ女装ノ耳飾リニツケ、胸飾リヲ多埴輪（粧巴）ノ胸カラ上ノモノガ發掘サレタガ後年京都帝大カラノ調査ノ時ニ持テ行キ現在全校教室ニ保管サレテヰルトノコトデアル、其ノ他幾分ノ埴輪ノ破片ヲ得テヰル（図参照）

ハ. 鎧塚　大区下薬師堂ノ両隣奥住倉次郎氏宅地ニ建造地固メヲスル際（明治廿七年頃）土中ニ密ニ入レル鉄鏃ヲ発掘ス

ホ. 七ツ塚附近ニハ石器時代ノ遺物ノ考ヘラレルモノガ多数発掘サレテ現在ニ及ンデヰルガ、ソノ中ニツイテハ、更ニ後章遺物ノ項ニ詳説スルコトトシテ、一先ヅ七ツ塚ニ就テ記ラ[illegible]

二人塚

日野宿ヲ過ギ大阪上カラ凡ソ十町程、八王子ニ向フト街道ノ北、約二町余リ処ニ一ツノ塚ノアルノガ目ニツク。現在デハ新道ガ出来テ居ルガ、新旧両道ノ交点カラ五十程ノ地点デアル。径凡ソ五間、高サ一丈二尺バカリ、略円形デ饅頭形ニ盛リ上ゲテ居ル。頂上ニ幹ノ周囲凡ソ一丈四寸ノ大杉ノ木ガアル。其ノ傍ニ十本一本ノ桜木ガアルガ、何レモ二尺位ノモノデ、四方ニ長ク延ビテ居ル。此ノ塚ノ東方凡ソ二町ニ、同じ三間位ノ塚ガ一ツ程発見サレタ。其ハ銀杏ノ大木ガ中ニ一個ノ外ニト認メラレナイ程デアル。明治時代ニ行ハレタカラ発掘シタ時ニハ、数箱出タサウデアル。コノ塚ハ日本武時代ノ墳墓デハナカロウト考ヘラレテ居リ、又往古鎌倉ニ合戦ハナイカラ、或ル武人ヲ、或ル武ヲ面葬ニシタトニロデアルトモ言ハレテ居ル。コノ二人塚ニツイテハ、二人ニ関スル伝説ガ出ル。

富士塚

富士塚ノ西南ニ十町程行クト甲州街道ノ左側ノ山林中ニ在ル。矢張リ昔時ノモノカ

一里塚

一里塚ハ慶長十九年ノ制ニ依ツテ設ケラレタモノデアツテ、江戸ト本橋ヲ中心トシテ諸街道ノ各一里毎ニ塚ヲ築キ、榎ナトヲ植エテ目印トシタモノデアル。初メ徳川家康五街道、東海、中山、甲州、日光、伊勢ニ各一ツ宛ヲ設ケタガ、後ニ江戸一里ゴトニ塚ヲ設ケシメテ以テ旅行者ノ便宜ヲ計ツタ。慶長見聞集ニ「江戸日本橋ヨリ一里塚ノモトト定メ、三十町ヲ一里ニ当リ、二里ニ当リ、其ノ分西ノ方ニ、五条ニ当ル所ヲ二里塚ヲ築カル給フト記セルニヨリテ知ルベカラズ。出来ルシテ其ノ塚ノ本サハ、吉代記ニ二里塚五間四方也、南布奥州道左一道出ルトアルカラ、其大サハ多ク五間四方デ

アリテ高サ約一丈、上ニハ主トシテ榎ヲ植エテアルモノマリ根ガハビコリテ塚ヲ固メタルモノ村人ガヨイカラデアラウト所ニヨリテ松ヲ植エタルモノモアル現在一里塚トシテ完全ナモノハ東京府ニ二ツ残リテヰル一ハ西ケ原ノ一里塚、他ハ志村一里塚、共ニ史蹟トシテ内務大臣ノ指定ヲ得テヰルト(内務省史蹟名勝天然紀念物調査報告書)

日野町ノ一里塚ハ二ツアル、一ツハ小宮ノ一里塚、小林生一ツハ小字万蔵寺路傍ニアルモ共ニ雀ガ二番形ヲ止ムルノミデアル、前者ハ甲州街道八民神社ヲ西ニ出ルト十五町、前掲富士塚ノ附近ニ道路ヲ中ニシテ一個アル、其ノ南方ノモノハ高サ約八尺、周囲三十間位円錐形ヲシ小林中ニアリテ今多ク雑樹ニ覆ハレテヰル、其ノ北方ノモノハ平ラ畑地トシテモ多分現在デハ形ニドノ根痕ヲ認メズ、大ナル塚モ漸次低クナツテヲル傾向ガアル、此塚ハ上ヨリ存在スルトモイフ後者ハ万願寺ニアツテ数年前デハ所在分明デアツタサウダガ現今デハ形ニド塚ナレテシマツタサル、往時甲州街道ハ万願寺ヨリ通ゼシナリトイヒ千度ニノ塚カラ前者ニ至ルマデ四谷一里アルトカラ考ヘテモ或ハサウデアツタカモ知レヌ

市間加茂人道ノ墓

日野町小字四谷ノ田南中ニアル、六尺四方程ノ塚デアツテ市間加茂人道ノ墓デアルト伝ヘラレル上ニ丸イ碑ガアツテ文字ハ読ムコト出来ズ 市間ハ天正ノ頃カラ鉢形ニ居タ人デアルベシ(天正年中)

東光寺薬師堂跡

日野宿字東光寺西部ニ在ル日蓮宗万願寺ノ南北デアツテ今ハ形ヲ存ヘラレテヰル、日蓮宗覆鉢ノ隅、堂宇ヲ建ツテ薬師佛ヲ安置シテ鬼門ヲ鎖シテ万願山東光寺トナシタル

屋シテナホ小字ナ醫シデ薬師ヲ置キ、城址ヨリ又古塚ナドカラ古器等ヲ発掘スルト必ズ此ノ堂ニ納メルコトニナッテ居タ東光寺ノ遺趾ハ今ヨリ僧永海ガ一寺ヲ造建シテ万松小成就院トキヲシタ。面積三百八十坪現存シテ居ル、薬師堂モ現存シ、石仏一振ヲ納メテアル。明治九年頃村長ノ祖母某ノ屋敷内カラ得タモノデアルト言フ

大麓天

日野宮ノ西方二町程ノ所ニアッテ往時ハ社ノアッタモノグガ現在ハ雑草ノ跳梁スル所トナリ昔ヲ詠ル由モナイ。ト伝ヘバソノ昔宗朝ガ配所ヲ移シタトコロダトイフ

金松

日野宮見附大島寺阪ヲ上ルト西方九ノ二町程低ニアル、幹ノ太サ八尺五寸、枝下丈三尺、四方ニ枝ヲ張ルコトカソノ三坪ヲ甘ノ形ガ恰度傘ヲ拡ゲタ様ナンデ此ノ名稱ガアルトイフ、昔ニ登リテ展望スレバ、高山ノ見ルヲ一望ノ中ニオサメ得ル好所デアルカラ本所名所ノ一ツトシテカゾヘラレル、オホコトト称ス全形ガ其光字台ノ北端ニアル御茶屋松ト呼ベトリガソノ由来ヲ知ラズ

明治天皇御小休所

明治十三年六月明治天皇ガ甲斐、伊勢、西高山巡幸ノ途次本町佐藤俊正氏宅ニ御小休ニナッタコトガアッタ。此ノ百程前、上之内官ガ出張シテ佐藤氏方及ビ附近ノ井水ヲ調査シタ後、全氏来展永優良アルト決定シ其ノ際、御茶ノ水ニ御使用ニナルト

トナリタ。其ノ庭井現在モ残ツテヰルトカ。鳳車御著輦ノ門前ニ「所ハ休レノ木ヲ植ヱテ
ヰサレタ。ソノ札ハ宮内官ノ揮毫デ階書デカイテアリ後ニ今氏宅ニ下附セラレタ。御外出
方ヲ警衛シ極端ノ区ハ幔幕ヲ張ツテ室内ハ各室共内窪ビニナリタ紙貼ヲ敷
詰メ壁上ノ各種扁額ハ全部取外シタ。不敬ニ渡ルカラデアル。奥ノ室上段ノ間床廊
下続キニ中廊ヲ本削不材ヲ以テ新調シ内側一体ニ御座ビノ青海色緞子ヲ張レ
表面ノ間ニハ三條実美公山田鉄舟居士其他各室夫々ニ高位顕官ガ侍シテ居
リ厨板ノ間煙草ナドニハ神奈川県令中島信行氏等煙草ヲ喫シテ居タ陛下
ハ玄関ヨリ中廊ノ音高ク歩マセラレ玉座マデ御座ビニナルト共ヲオノミニナリ続イテ
中情酒ヲ五人余リモ召上ガラセラレタ。御ニナル蜀山人ノ書イタ和歌ナドヲ中間ニ
ナツテ玉音高ク中矢ヒニナツタソノ和歌ハ次ノ通リデアル。

蜀山人

所ノ子ノ子ノタケノ子ノ子ノ子ノ末モシゲル日出度サ

再ビ中乗車御西向アラセラレタ。玉座中宰子ニ掛ケラレタル紋織敷布及ビ奉良西布
一匹金一封御厠本材式、高札組ヲ中下賜ニナツタ。其ノ夜ハ手等町谷宿所ハ氏方ニ
中宿ヨアラセラレタ翌年二月多摩村遍光寺ニ市並猟御再ビ御川伝アラセラレタトイフ

皇太子殿下（今陛下）市野立竹跡　庫植三松

大正十年十一月十七日陸軍特別大演習ノ際（第二日）皇太子殿ニハ、日野山金松（前出）市野立竹ニ於カセラレテ市統監並ビニ諸員ニ成長シテ井ル、十ホ大阪（大倉寺山）ヨリ自上ル中腹、御駐立三松ニ附ケテ、其ノ松ヲ植エテ井ル、

石器時代ノ遺跡

日野山一帶ノ周辺ニ沿ヒ石斧、石器、土器ノ破片ヲ時々発見スル、中ニモ東光寺七ツ塚附近ニハ非ニ多々（前掲）石棒、磨製石斧、石皿、石鏃、飾石、等ヲ発見シ、其ノ大部分ハ現在上、附近ノ民家ニ散在サレテ井ル、又字豊田矢崎大名淵ニモ石器土器類ガ頗ル多イトノ事デアル、十ホニ三ツイテモ次ニ詳シク書イテ見ヨウ。

形状ノ整ツタ石棒　長サ二尺五寸　径三寸五分　稍、両端平形ヲナセル堅質ノ石棒ガ和田芳三郎氏ヨリ古墳ノ近傍カラ発見サレタ。後年　幸士八木発三郎氏ニヨリ譲受ケテ持チ行カレタ。（挿図参照）

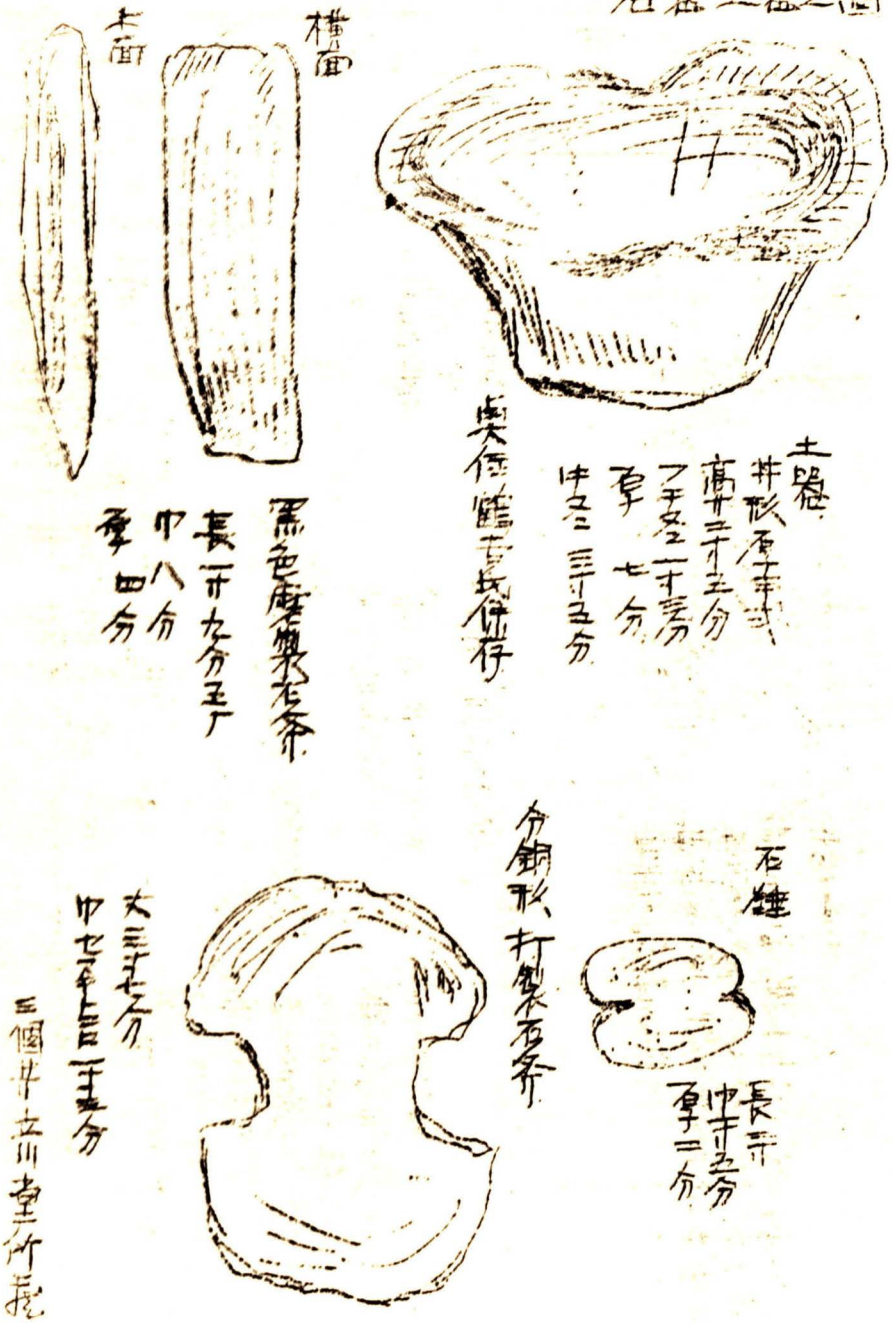
石斧モ磨製ノ形状ノ整ツタモノ保存サレ、裂開ノモノハ今デモ十ホ無数ニ発見サレル。

石鏃及ビ石錐ニ時々、発見サレル。土器ノ破片ト裂砕シタ石塊ハ又多々発掘サレル。

前ニ塚ヲ発掘シタ当時ハ用意ガ充分デナカツタノデ塚モ半バ破壊サレタモノデヤタメ、古墳ノ如何ナルモノカヲ知ルヒモ困難デアツタ。前掲　未発掘ノ山林ヲ調査スレバ発見スルヒトガ多イト考ヘラレル、既往民モ其筋ニ於テ相当ノ調査ヲスルヒトヲ望ンデ井ル。

以上ノ大体ヲノ記録ハ総ヲ省ケル。考古学的研究ハ全石文ノ范囲ニ属スルカラ此処デハソレニ触レズニ置ク。

石器土器之圖



石皿

奥住福次氏所蔵
不明花崗岩

長一尺二寸八分
巾八寸四分
深二寸

附属石

長二寸五分
巾四分
厚二寸一分

石斧

長 一尺二寸七分
太サ処周 四寸五分
細処周 三寸二分

※若干掘リタ石器及ビ土器ハ、立川民蔵氏等[illegible]
中ノモノヲウツシタモノナルガ故ニ実物ニ対スル責任ヲ負ハザルコトヲ附記シテオク

石棒

丈 一尺二寸五分
細キ所径 三寸二分
太サ周 一尺三寸七分

石棒ハ太古民族ノ性器崇拝ヨリ来ル、信仰ノ対象デアッタ
現在デモ此ノ風ヲマネテ或地方ニ於テハ結婚式ニ大根ニテ男径ノ模型ヲ制作シテ神前ニ捧ゲル様ナ旧習ヲ思ヒ浮ベシテイル

白幸城址ヨリ出ツ
明治九年 和田芳五郎氏ガ自己ノ畑地中ヨリ発見シタモノ 皇室地誌ニ載セテアルガ現在他人ニ渡ッテ人氏所ニハナイ

碑傳説

一 上人塚

其昔コノ塚ニハ名トイフモノナカリシガイツノ頃ヨリカ夜々上人ノ姿ヲナシタルモノコノ塚ノ附近ニ出デテ旅人ヲ驚カス 或夜馬ヲ牽キテ八王子方面ヨリ帰リ来ル馬子アリ 例ノ上人出デ来リテ馬子ヲ上人ヲ日野マデ乗セテ行ケト言ヘバ馬子怪シキモノトハ知リナガラ上人ヲ馬ニカヤ乗セ馬ノ荒ル、恐レモアレバトテ殊更ニ上人ヲ綱モテ堅ク鞍ツボニカラメ結ビタリ サテ日野大坂上ニ至リ人家近クナルマヽニ上人ハ馬子ヲ此所マデニテヨロシ馬ヲリテセヨト シキリニ呼ブヲ馬子聞カザルマネシテ急ギ引キユケバ上人自ラ綱ヲユルメテ下リントシテモガクコト甚ダシ 果テハ苦シガリテ鳴キ叫ビ遂ニ大ナル古狸ト変ジ綱ヲ喰ヒ切リテ逃ゲ去リタリ コノコトアリテヨリ後此塚ヲ上人塚ト呼ブニ至レリ。

二 普門寺八幡石

寛文第四甲辰年 亮存房法印良意感夜夢中ニ異人来リテ告ケテ曰ク 高倉ノ北ニアタリ一ツノ塚アリシ 借昔此塚中ニ大石ヲ納ム是ハコレ北條氏輝公御武運長久ノ御願ヲナシ給ヒ宝剣一振 矢ニ筋ヲ納メ八幡宮ト勧請シ奉ル地ナリ 然ト亡滅山ノ城没落ノ後 唯人カ見知ル者ナシ依農夫此霊地ヲケガス 悲歎スル事ノ甚ダシキナリ 汝神徳ヲ尊崇シ當山ニ移シ奉ルベシト 夢已ニ醒ヲ 遍体ニ汗ヲ流ス、不思議ノ念ヒヲ起シ 翌日ニシテ其小塚ヲ尋レハ大石ヲ得タリ 其ノ下ヲ穿ツニ宝剣一振 矢ニ筋 実ニ納メアリト雖モ土中ニシテ皆朽ヌ 朽形ヲ見ルモノ唯四五輩ノミ故ニ此大石ヲ引移シ當山ノ鎮守ト崇ム 今ノ八幡石是ナリ 誠ニ霊石タル者ナリ 依之法印良意神徳ノ威光ヲ増シ當山ノ繁栄ヲ祈誓シテ七條袈裟一衣皆水精ノ念珠一貫 寄附之云云

三 寶泉寺觀音

コノ石像ハ馬頭觀世音ト持チ上ゲ觀音トモ言フ。

天明六年夏ノ頃五十前後ノ大部ガ廚子ヲ背負ヒテコノ街道ニ至リ日暮ルヽヤコノ寺ニ一夜ノ宿ヲ乞ヒ翌朝廚子ヲ背負ヒ出立シヤウトシタガドウシテモ重クテ持チ上ラナクナリタルノデ其ノ僧ハ廚子ノ中ヨリ石像ヲ取リ出シ伺ヒヲ立テシ所コノ寺ハ北向ナル寺ナレバコノ寺ニ座リタキトノオツゲニテ其僧ハコノ廚子ヲ背負ヒテ殘章寺ニ向ハントセシ所ナルガ詮ナキコトヽ思ヒ、ソレデハ諸人困迷シタル事アリタルトキハヨロシクオツゲヲ下シ給ヘトノ言ヲ殘シ立去リシト 近隣不思議ナル御僧ナリトテ後見送リ居ルガ大坂下ノアタリニテ姿ガ消エシトノコト 因ツテ弘法大師ノ影ナリトイフ。

其当時年老ノ雄彼来リテ願事ヲシテハ石像ヲ持チ上ゲ伺ヒテ居リシ所現在守護セルガ如ニ霊験アリテ今ハ諸民ノ願事ヲウカヾフトノコトデアル 或時ハ笑顔ニ或時ハ立腹セル様顔ニ見ユルコトアリトイフ。モトコノ石像ハ現在ノエンマ堂ナル御堂ニ安置シテアツタガ諸人信仰厚ク人足繁シクナリタルタメ現在ノ所ニ移置シタノデアル願事成就セルアカツキニハ座蒲團ヲ供ヘルトノコトデアル。

四 藥師堂

日野本郷東光寺藥師堂 往古日野大大宗忠鬼門防禦ノ為ニ建設ス、日奉宗没滅ノ後數百年ノ霜雪雨路ヲ凌ギ破壞スルニ至ル之ニヨリ天正八庚辰年堂宇再建

天正以後村内ノ孕婦アリ將ニ分娩セントス、其夜夢ニ如來告ケテ曰ク「予ニ枝栗ヲ供養セバ汝ニ授ケルニ出産ノ易カランコトヲ以テス」。夢覺メテ速ニ之ヲ供シケルニ果シテ安産

ナリ因リテ近隣ノ人皆佛力ノ効験尊ナルヲ感嘆シ分身ノ易カランコトヲ祈願スルモノ利益ヲ蒙ル豈疑フベケンヤ現今ニ至リテ遠近ヲ論ゼズ郡集シ詣リテ如來ノ恩惠ヲ受クルモノ幾千万人往古ヨリ如來鎮座ノ村程出産ヲ患フモノ未ダ曾テナキトイフ。

是如來ノ守護ナラン。

和泉塚

藤原鎌足ノ後裔ニシテ遠江ノ國藤原義久和泉守現在ノ豊田遠藤家高倉ノ新田領内ニ居住セシトキ藤地川辺堀之内トノ境界ニ差ヲ生ジ一度ニシテ桜炭ヲ埋メ騒動ヲ惹起シ補ヘラレハリツケニナリテ豊田氏ノタメニツクス其ノ時ノハリツケ材ニ松ヲ用ヒタルタメ遠藤家ニ於テハ正月松飾ヲナサズ又庭前ニ松ヲ植フルコトヲ禁ゼラレシト傳フ。

其折和泉守ヲスクヒ逃レシメタル人アリ其時和泉守エンドウ畑ノ中ニ逃ゲ入リツルニテ足ヨトラン、捕ヘラレシトイフ。其レヨリ遠藤一家ニ於テハエンドウ豆ヲ作ルコト及食フコトヲ禁ゼラレシト傳フ。

四月十七日遠藤祭リトシテ一家一堂ニ集リテ祖先ノ冥福ヲ祈ル

小祠ヲ祀リアリ（天保十五年四月十五日）祀トアリ。

尚線ハ省線日野駅ト豊田駅トノ中百陸橋西側ニアリ。

尚此件ニ関係アル川辺堀之内阿川一家ニ於テハ正月ニ日手打ヲトナリタル記念シルコトヲ作リテ祝ハトノ傳アリ。

六 三角（カド）

往古西村駒次郎知貫同三郎弘綱住居ノ地ニテアリヲ帝トイヒシガ帝トヨブハ勿体ナキナトトテコヽニ在リシ花倉ノ御門アリシヲ御門（ミカド）トヨビ帝ヨリ御門トナリ、後土地ニ角ナル

地形上三角トヨブ。

七　田村

田村駒次郎知實氏居住ノ地ナレバ其ノ性ヲ取リテ田村トゾ呼ブ。

八　新井

往古土方志摩平正門、土方元吉、氏三家ノミニテ居住シ居リ　土方元吉氏所有竹藪内ニ三家共用ノ井戸ヲ新シク掘リテ使用セシニヨリ「新井」ト字名ヲヨブ。

九　元木及御影ノ田

現在ノ宮ニハ三番地先キノ住吉一本ノ大木繁茂シテアリコノ木ノ元木ニテ七生村高幡不動尊ノ尊像ヲ刻ミ中木ニテ浅川町高尾山不動尊ノ尊像ヲ刻ミ先木ニテ成田ノ不動尊ノ尊像ヲ三体ヲ一本ノ木ニテ刻ンダトイフコトデアッタ所ヲ元木トイフ地字名アリ。又其ノ影ノウツセル所ヲ御影ト人呼ビ現在佐藤利一氏所有ノ田ヲ御影ノ田トヨブトノコトデアル。

一〇　四ツ谷（四家）

元コノ地ハ天野、加藤、宮原、小島ノ四家ノ家ヨリ分ナク四家トヨビシガ後四谷ト呼ビ換フ地字名ナリ　又此部落守護神ハ四ツ谷観現座空蔵菩薩様ナルタメ四ツ谷ニ於テハ鰻ヲ取ルコト及食スコトヲ禁ジ居ルトノ傳アリ。

一、矢崎

玉山武者所平山村ニ居城ヲ構ヘシトキナラン八王子市外安土ノ地ヘ本陣ヲ構ヘ、敵兵トノ交戦中大隅ニモ及ブル被印ヤウノモノヲカヽゲ筆ガイヲ上ゲニ見事矢ニテ射トナラレ其ノ矢先ノ落チタル地ニヨリ矢崎トノ地字名アリ。

一、宝泉寺内金丸ノ墓

往昔江戸勘定方ノ役ヲナセル金丸トイフ人アリ役目上ノ落度ヨリテ江戸構トハナリシヨリ江戸ヲ立チ出ガ平洲街道ヲ西行八王子ノ姉ノモトヲ訪レシガ白地ニケラレヌタメナモドリテ日野街道ニサシカヽリ宝泉寺東側ノ唐ノ芋畑ニテ切腹シハテタリキ後金丸ノ墓ヲ本寺内ニ建ツ、老人等来リテ墓石ヲナゼテハ自分ノ病気ノ治癒ヲ願ヘリトイフ本寺檀家中ニテハ唐ノ芋ヲ作ルコトヲ忌ムトノ傳アリ現在八王子ノ金丸横浜ノ鉄砲店金丸健次郎ハ彼ノ子孫ナリトイフ

一、牛渕大名渕 西谷両家ナメ良大木林、井底 等傳アレト詳ナラズ、

以上

參考圖書

〔書名〕	〔著者〕
一 日野町教授資料 第一輯 ― 第八輯	日野町
二 日野町勢要覽	日野町
三 日野町勢概覽	日野町農業公民學校
四 東京府南多摩郡勢要覽	南多摩郡郡役所
五 東京府南多摩郡勢一斑	南多摩郡農會
六 里ノ碑	立川民藏
七 西黨事蹟考	立川民藏
八 新編武藏風土記稿	德川幕府
九 皇國地誌	神奈川縣諭
一〇 多摩御陵附近地誌	田中啓藏
一一 多摩丘陵	淺井治平
一二 鄕土誌論	柳田國男
一三 南多摩郡，副業	南多摩郡農會
一四 系圖總覽	武藏七黨系譜
一五 武藏武士	渡辺世祐
一六 武藏	太田亮
一七 武藏名勝圖繪	植田孟縉
一八 東京府民政史料	東京府
一九 東鑑	鎌倉幕府
二〇 郡書類從	塙保己一
二一 武藏夜話	武藏野（雜誌）

二二 調布多摩川図繪 一巻　渡辺世祐
二三 関東　吉田東吾
二四 地名辞典　藤井治義
二五 関東；地質　工藤暢順
二六 日本地形概説（関東皇洞篇）　内閣統計局
二七 國勢調査速報 四、一四、九　東京府
二八 東京府統計書 六　青木龍七
二九 河岸段丘ノ非對称的配置ト其成因　田中源一郎
三〇 武蔵野，地理ト厂史　堀江健苑
三一 東京府地誌　清水庫之祐
三二 御土偉人傳　古見一夫
三三 江川太郎左衛門　佐藤俊宣
三四 古今備忘記　鯨井
三五 多摩ノ腥風　東京府
三六 東京府史蹟保存物調査報告書 第六冊　佐藤俊宣方、藏
三七 古文書 二通
三八 御朱印寫

一日野町郷土教授資料　第一輯　第八輯ノ概要

第一輯　新編武藏風土記稿之九十八、多摩郡ノ之十抜書

第二輯　皇國地誌抜萃

第三輯　起原沿革　神社佛閣　旧跡　文學、産業　人物

第四輯　第八輯マデ

掃苔　上人塚

古墳、　日奉城趾

遺蹟　古文書

七ツ塚　御小休

一里塚　其一、其二

八坂神社縁起

竹間加賀入道ノ墓

竹間加賀入道ノ花セン　年貢割付

石器時代ノ遺物

太田蜀山人

一沿革

二位置廣袤

三地勢

四地質

五運輸交通

1 鉄道

2 國道

3 補助道

4 郵便局

5 電報取扱

六土地

1 土地地目　反別　地價

2 本町民所有土地
3 他町村民所有土地

七 町財産及小學校基本財産

八 戸口

九 神社

十 寺院

十一 學事

1 學齢兒童
2 小學校兒童
3 小學校學級數及經費
4 補習學校

十二 兵事

1 徴兵人員
2 陸海軍軍人

十三 産業

1 農家戸數
2 本町民耕作反別
3 他町民耕作反別
4 穀類 菽類
5 蔬菜類
6 果實類

7. 雜類
8 桑茶畑
9 春蚕蚕
10 諸營業者
11 蚕種製造 戸数及製造高
12 家畜
13 家禽

十四 金融貯金
14 共同揚返場
1 郵便為替 振替貯金
2 郵便貯金受拂
3 郵便貯金現在高

十五 郵便鉄道
1 日野駅 豊田駅 乘降客及貨物發着
2 通常郵便
3 小包郵便

十六 利用
1 電燈
2 米麥水車
3 諸車
4 船

十七 租税負擔

十八　町村經濟

1　歲入歲出

2　歲入豫算內譯

3　歲出豫算內譯

十九　公共團體

1　在鄉軍人分會

2　日野町青年團

3　其他諸公會

二十　日野町發展

一　日野町勢要覽ノ概要

沿革

土地

1　位置面積

2　地勢地質

3　河川

4　岡陵

5　官有地及免租地

6　荒地

日野町編

7 民有租地
8 行政区劃

戸口
1 人口、静態
2 人口、動態
3 出入人口
4 現在職業別戸数

教育
1 小學校
2 學齢児童
3 小學児童
4 小學校教員及校醫
5 小學教員俸給
6 實業補習學校

社寺
1 神社
2 寺院

兵事
1 徴兵検査成績

生産業
1 種類別田畑耕作地
2 農業戸数及人員

• 本町民有租地

• 他町民有租地

3 耕作及別一戶當一人當
4 米作付及別 及生產高
5 麥作付及別 及生產高
6 食用特用農產物
7 綠肥用作物
8 加工農產物
9 養蚕
10 桑畑
11 蚕種
12 家畜
13 家禽
14 漁業
15 漁獲物
16 砂利

衛生

1 醫師及產婆
2 傳染病患者
3 種痘成績

運輸及道路

1 鉄道及道路
2 諸車輛
3 小船
4 里程

財政

1、町費
2、諸税負担
3、町有財産
4、部落有財産
5、郵便貯金

議會及吏員

1、議員及選擧有權者
2、職員

雜件

1、名称旧跡
2、古事蹟
3、古文書

里之碑、概要

一、石橋碑
二、渡邊熊吉之碑
三、大坂碑
四、大正四年 昭和三年 御大典美農老賜杯高齢者

立川民花氏編

五 名所建石
六 歌曲彫刻墓標
七 寺堂鐘銘
八 社寺鐘銘
九 社寺棟札掛額

以上

新編武藏風土記稿ノ概要

第一卷 ― 總國図説
第二三四卷 ― 郡沿革
第五卷 ― 在國沿革表
第六七卷 ― 山川 名所
第八卷 ― 藝文
第九卷―第百六十五卷 ― 各郡村志

例義一卷 附錄一卷

德川幕府、昌平黌ニ地理局ヲ設ケ儒官大學頭林衡ヲ以テ屬僚間宮士信松崎純庸外四十余人ニテ編纂文化七年稿ヲ起シ文政九年訂正ヲ加ヘ、天保元年幕府ニ奉ル。

一文書

日野郷ノ七大一番地、條件後宣方ニ古クヨリ小田原北條家分國ノ頃日野郷ニ出来タル文書ニ用ヒタル紙ナリ　縦一尺横一尺五寸　奉書用ノ紙ナリ

於当郷有来切儀被仰出候而茂一本成共切者有之付而者厳重ニ
付可被慎者被仰出者也　仍如件

丙戌　二月九日

日野惣郷　並
立川領　東光寺堺ヨリ石町屋迄

平野豊後守
福島　右近
竹間　加賀入道

右文書ノ日付ノ個所ニ朱印アリ印面文字ニ天正十何年云々トアルモ全部ハ明白ニ読ム能ハズ天正年代中　丙戌ノ年ハ十四年ニシテ後陽成天皇即位三百四十六年前（昭和七年ヨリ）

日野本郷年貢割付古文書

美濃紙　三枚継ぎ　文字左一通り

佐藤俊宣方所蔵
以下佐藤春雄君記録ヨリ転写

年貢日野本郷可納御年貢割付之事

一高千七百五拾六石弐斗参合

内　弐拾七町参段拾七歩　此反別

四三弐升取　九反七畝廿四歩　此取　四石四斗九升五合　上之毛

四斗壱升取　四町七段廿七歩　此取　拾六石七斗　弐升四合　上毛

三斗壱升取　拾町参反九段九歩　此取　参拾弐石弐斗壱升四合　中毛

弐斗六升取　七町七反壱畝廿壱歩　此取　弐拾石　六升四合　下毛

壱斗壱升取　弐町八反七畝廿九歩　此取　参石壱斗九升八合　下之毛

九反五畝四歩　年付荒

四四　弐拾五町八反三畝拾弐歩

四斗　六升取　八反八畝廿八歩　此取　参石弐斗壱合　上毛

参斗壱升取　九町五畝廿五歩　此取　弐拾八石八斗一合　中毛

弐斗壱升取　拾四町四反九畝七歩　此取　参拾石四斗三升二合　下毛

壱斗壱升取　七町九反一畝六歩　此取　八石七斗三合　下之毛

弐町四反八畝六歩　年付荒

下田 五拾八町九反弐拾四歩

巳什

参斗壱升取　　五段九畝八歩　　此取 壱石八斗参升七合

弐斗六升取　　弐町六反六畝拾七歩　　此取 大石九斗三升壱合

弐斗壱升取　　弐拾参町七畝拾弐歩　　此取 四拾八石四斗五升五合

壱斗壱升取　　弐拾参町七畝三歩五歩　　此取 弐拾六石壱斗五合

八町八段四畝拾弐歩

五拾七文取　　上畑八町九畝拾七歩　　此取　　永 四貫六百拾四文

四拾七文取　　中畑弐拾弐町五反七畝八歩　　此取　　永 拾貫六百九文

参拾六文取　　下畑七拾五町八反八畝八歩　　此取　　永 弐拾七貫参百拾八文

百文取　　屋敷拾壱町八反三畝廿六歩　　此取　　永 拾壱貫八百参拾九文

永合　弐百参拾石四斗壱升四合

俵代　六百五拾八俵壱斗壱升四合

永合　五拾四貫参百八拾文

内

永　参百五拾文　　大豆拾俵

永　五拾四貫参拾文　　金子元銭

右之外

一米　壱石壱斗壱升　　俵代 三俵八分　　見取

上毛
中毛
下毛
下々毛
午付荒

一永　七百九拾文

右如此相定ニ者極月十日切而可致皆済者其過於無沙汰者譴責ニ以可申ニ者也

寛永拾九　午十月晦日

高　四郎　印
今　喜三　印

古名主　惣百性中

右年貢割付文書ハ所蔵全書文書多数ノ内ニテ最古ノモノニシテ三代家光将軍時代ニテ今ヲ去ル二百七十五年前ナリ　地方奉行所役人名ニ高四郎左ト有ルハ　高室四郎右衛門　今喜三ト有ルハ今喜三郎ナルコト　本文書裏面ニ記載アリ

（佐藤俊宣方所蔵）

御朱印寫

大猷院様御朱印寫

武蔵國多摩郡牛頭天王領内　同郡日野郷之内　拾名事任先規寄附之旨　全可収納　并書中竹木諸役等免除　如有来　永不可尚相違者也

慶安元年七月十七日

常憲院様御朱印写

武蔵国多摩郡牛頭天王領内同郡日野郷之内拾四名事任慶安元年七月十七日
先例之旨寄附之就全可収納并寺中竹木諸役等免除如有来永不可
相違者也

貞享二　六月十一日

御朱印

有徳院様御朱印写

武蔵国多摩郡牛頭天王領内同郡日野郷之内拾四名事并寺中竹木諸役等免除
如有来永不可相違者也

江川太郎左衛門支配所
武州多摩郡日野郷

別当　普門寺　〇

右者旧幕府御朱印御判拝写辰年八月中可差出御触達ニハ御本紙九通并写相添
江川太郎左衛門殿江差出ハ辰御領ニニ相成候御一新ニハ拝者不手義人復帰
神勅之義御当縣へ御係書類出東京神祇官ニ不当ニ月中御聞届ニ相成ハ
此段御届奉申上ハ

以上

御当縣御支配所、武州多摩郡日野宿

神主　土渕　荒人

新義真言宗　普門寺

金石文

序説

山上茂樹

東洋に於て見れば支那は西歴紀元十一世紀即ち北宋時代に於て考古学的研究の芽を更ケリそ の當時は古銅器、石碑其の他文字を有する古代遺物を集メテ図示スルコトが始メラレ此が学問トナリ清朝に至り其が隆盛トナリタルデアリマス。之を支那に於ては金石学と言フ、即チ金石に現レタル銘文を諸々学問デ、之を應用して経書、歴史の参考トスルノデス、金石学と言フモノは考古学の一部デ今日に至ルに尚盛デ、支那デは現今考古学研究上文字のアルモノを尊ビ、之ばかりでなく其の考古学者が上巻の考古学者に非ずして、金石学的考古学者デアリマス。

朝鮮では戦国の時代に考古学トシテ金石文の研究が始マリタルが而して之等は甚ダ輝ルモノデ、明治四十年代に至り我国の研究者に受ケテ盛ンナリタリデアリマス。

日本の考古学は其の芽を徳川時代に起セルも而して学問的に形を作り始メタノは明治十一年米国人モールス（Morse）に依ルもの、其の後今日に至ル数十年間を以て現在見ル様な考古学を形成シタノデス、是の如く其の初代の徳川時代のものは支那の影響を受ケテ、金石文の研究デシタガ、其の後基礎の発達の見ルコトナク今日に至ルタノデス、アチラ支那の金石文に未ダ完成の域に達シナイノデス。

金石文が前に述ベタ如く考古学の一部デアルト言ヒましが、其の考古学の定義に付キテは多クの考古学者に依リて異ナルが、和田清人先生は

「過却人類の遺物の研究」

と定義シテ其の基礎トシテ「過却人類の生活状態を後孫に伝ケモノデアル。」

と言ハレタが之ヨリシテ最も尚ホ得タルモノデアルト思ハル、カカル定義より見レバ人類が作リ以て使用セシモノを調査し基

現ニ文化ニ付キテ如何ナルカヲ復原シテ行クモノデアルト言フ学問デアリマス、カクシテ見レバ其ノ範囲ハ非常ニ極大デアリマスガ故、此處ニ多ク分類スルコトガ出来、建築学、美術史、絵画史、服飾史、金石文、古泉学、刀剣学、併数考古学、先史考古学、原始考古学、有史考古学等ト云フ様ナ分類ヲシ、其ノ他種々ナル分類ヲスルモノナレバ、是處ニ於テ考古学研究上必然的ニ金石文ノ研究ノ必要モ起ルノデス。

以上述ベタ様ナ理由ニ依リ、日野町ノ金石文ヲ調査シ、郷土史研究ノ一助トス、而シテ其ノ金石文トシテ地域ノ関係ガ狭少ナリト雖モ、年数ノ長キ事ト種類ノ多キトニ依リテ、之ヲ全部調査シ終ルコトハ不可能ナルト共ニ不必要ナルモノノ見バ多キガ為メ、最モ代表的ナモノヲ選ビ、次ノ如ク列挙ス。

本論

板碑

関東板碑

一、日野町東光寺奥往久次郎

文永、

ヤリク

阿弥陀佛ノ種字

二、日野町宮前 青年倶楽部

延慶二年四月 日

（二年四月ハ四年四月）

三、日野町石田 石田寺

元応二年十一月 日

四、日野町宮青年倶楽部前

応仁二年八月日

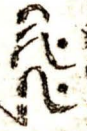
五、日野町石田石田寺

建武五年十一月日

六、日野町仲町大昌寺

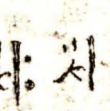
文和二年十二月

七、日野町石田石田寺



延文五年正月

八、日野町石田石田寺

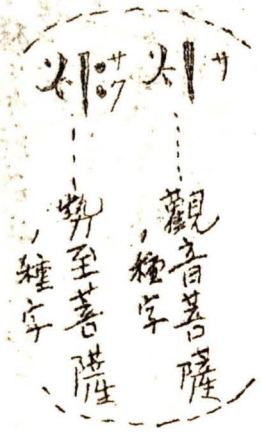


嘉吉五年七月二日

為逆修是根也

九、日野町東光寺奥住秋之助

応安元年六月日



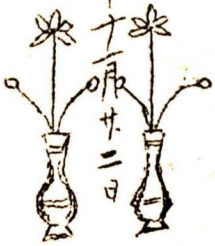
十、日野町石田 石田寺

永和二年 月

十一、日野町仲町大昌寺、

道仁
禪門

明德元年十月廿二日



十二、日野町石田石田寺

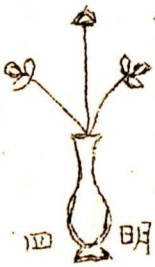
明徒三年八月 日 妙性

十三、日野町豊田善生寺裏

明德四年

十四、日野町石田石田寺

明德□□□



四月 日

十五、日野町下田安養寺

応永六年己卯八月日　妙恵　蓮禅尼修

十六、日野町東光寺興住秋之助

応永十六年三月六日、

十七、日野町石田石田寺

広永十八年　妙秀　禅尼

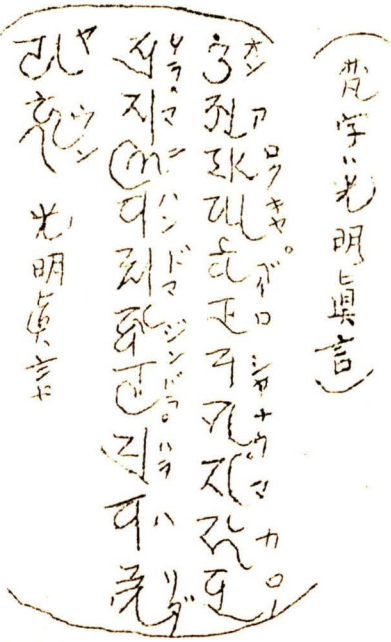
十八、日野町日野小学校

応永二十五年

十九、日野町豊田善長寺裏

応永廿六年十一月

（梵字は光明眞言）



光明眞言

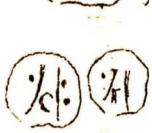
二十、日野町宮青倶楽部前

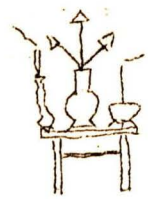
次　妙道　禅門　享徳三年　十二月十六日

二十一、日野町宮青年倶楽部前

如永　禅尼　長禄二年　戊子　十月十六日

二十二、日野町川邊堀之内延明寺





文明二年　庚寅　九月二十三日　為逆修善根也　一結衆等敬白

（刃ハ寅）

二十三、日野町仲町大昌寺

年号不詳ナルモ相当ニ古キモノナラン

B、舟底形板碑

一、日野町石田石田寺

年号ノ不明ナルモ室町時代中期ノモノナリ。

C. 追補（関東板碑）

1. 日野町石田石田寺

元亨二年八月　日

2. 仝

3. 仝　欠

貞治二年八月　日

4. 仝

康厂元年十月十二日

5. 仝

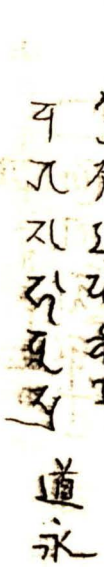
応安二年十月

明徳（年月日不詳）

6. 仝　欠

7. 仝

永六年　月



道永

欠

宝徳二年庚午十一月二十九日

□□□□□□□□ 禪門

8、仝

宝徳三年 妙□ 禪□

9、仝

寛正二年

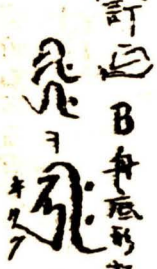
10、仝

(一) 五年二月 日 (年号以上記ノ如ク明ナルモ何ナルヤ不詳)

11、日野町上田薬師堂跡

明徳 (年月日不明)

訂正 B舟底形板碑ノ種字(阿弥陀)ヲ左ノ如ク訂正シタイコト



ヲキク トスルコト

2、鐘銘

一、日野町仲町大昌寺

武州日野三鷲山大昌寺鐘銘並序

武州多麻郡日野本郷三鷲山大昌寺者我山開山祖讃誉上人退隱遷化之靈地也開基已往星霜既尚則尚矣殿堂門廡經營既備矣唯恨華鐘之設未就非缺歟現住慧誉林道虽久志于斯挙未敢果矣越其弟子老比丘実誉宗厳代師建誓願募縁遂近于茲有年矣是歳丁酉之秋漸事是而將成其功於是于其師林道登山請銘於余乾惟幸鯨之於德用也矣翅如往昔釵輪頓免繯械忽解而已哉斯是蒲牢晨昏虽一聲聞益富有限或聞知反聞聞聞自性心聞洞徹成無上道者性所謂耳門円通上根之所聞也或晨鐘発深省昏鐘觀飛花撹煩惱眠今覚生死夢者蓋通途中機之所聞也倘夫至下機所聞者駅路行客田甫農人日野爲者玉川舟子徒聞無其得知縱如馬耳東風矣言歴耳根則下成佛種子不亦幸乎於戲大哉矣益三根等

蒙則群機利濟罄矣不盡聞此盛事者乾不隋喜焉余屬者羅沉痾久瘵敲推
口生棘蚤然住持之懇祈宗厭之願成況有我蘭山之振機云彼云因緣難默止仍
染翰痛窓強綴之銘辭艸以貽之云

銘曰

信甲駅路　日野本郷　即穢洋利
摸化道場　山號三鷲　寺称大昌
開祖標跡　遺德彰彰　是歳享保
丁酉仲商　新鑄華鐘　永鎮艸堂
甚護二諦　撞促百祥　大時敬象
千歳流芳　音應律呂　調和陰陽
澄長安月　茲豈山頌爾　聲々万里
蘭々十方　攬眠發省　除災降康
利緣無極　玅用難量　於星勝益
枝擘不遑

滝山大善寺第十七世
龍誉霊雲謹誌

惟時享保二年
龍集丁酉秋八月中浣
當山第十五古然蓮社湛誉良貞林道代
奉建之洪鐘一箇　願主　安貞誉宗厳

寄進之施主
清順　円知　知順　尊心　休心　西入　直信　貞往　宗玄　浄悦　直念　清山
妙尊　西往　中野村　照悦　響音　浄円　祖心　知春　浄雲　宗世德　良僊　妙祐　妙荘　妙香
馬場傳右ヱ門　同　善　上田村　十五右ヱ門　同　林中　同村　石川源兵衛　谷　善兵衛　為兵衛　親古屋　孫兵衛　同　馬場太右ヱ門　大野　利兵衛　瀧澤　十右ヱ門　江戸三河屋佐兵衛　同塗師　五兵衛
谷村鐘講中　同行八拾名ノ人　同村　若者念仏講中　五右ヱ門　竹助　善兵衛　宇兵衛　傳右ヱ門　清右ヱ門　金十郎　門四良　傳兵衛　中井村

妙性
宗春
草信
蓮宮
妙称
如宗
貞春

安蒼淨閑
楽蒼宗春
佐藤一澤
同
佐藤七良左エ門
佐藤彦右エ門

雪永
利行
貞寒
貞心
如鏡
宗安
信入

同
同
同
同
同
同
同
同
同

増田左兵衛
中田利右エ門
同性利兵衛
八木忠兵衛
増田四良兵衛
箱屋左兵衛
花井久右エ門

洋蒼謂嚴
縁蒼妙讃
慈海恵航
宗南居士
妙昭大師
為
為
両親
安山遊穏
妙春

湛蒼二親
加藤市平
三澤村
十ノ方半左エ門
馬場五良右エ門
同
三良兵衛
勘右エ門
源之助

佐藤八兵衛
戸澤伊兵衛
利兵衛
こく
茂兵衛
左源太
七良兵衛
伊兵衛
半左エ門

傳四良
源八良
伊之助
五十良
平四郎
傳助

中井村女中念佛講
ち体
ぢくぢゃうく
いいいつみくみ
如多如乙如

妙秋
淨祐
淨安
淨遊
清言
宗徹
壽性
者西
妙閑
壽慶
宝誉
宗白
淨哲
妙壽

舟仲間中
為菩提
西心
妙心
妙英

しゝと
おミい

かめ
てご
いかめ
でいん
こぢよ
ぢやう
とら
ちを
こゝは
まん
たん
しめん
ほし

武州江戸神田住
名工
堂大工
多川民部藤原見三作
中島七兵衛
中島左兵衛
木下十良兵衛

二、日野町横町宝泉寺
如意山寶泉禪寺鐘銘

扶桑國武藏州多麻郡日野村如意山寶泉寺者前建長雲芳周應大和尚捧一草之古梵刹也自草創以來地形漸就佛閣祖堂列峻嶺崇丘之間倉庫門廡構杉林檜樹之裡各抱地勢實可觀焉慶安年中蒙　官府台帖頒賜田莊若干頃於是乎法器具備調回嚴密安堂誦夜禪法苑回春矣特以洪鐘爲闕而已一旦山主拙丹表命冶工新鑄洪鐘將以補彼闕典以傳之無窮可謂其志至矣蓋鐘之爲德也望墻之所傳焉凜典之所載焉不退枚拳矣延享二年歲次乙丑臘月廿三日鐘已成山主拙丹乞銘于余請銘余雖不敏嘉彰其勳業於一時貽其聲則於百世以爲之銘

銘曰

南閻浮提　東海扶桑　地靈甲斐
州號武藏　奇石韞玉　異花吐香
水金木土　黑白青黃　百寶泉涌
子年道場　洪鐘新鑄　法輪恢張

化亘三垂　　響徹十方
星瑞呈祥　　四生資益
破碎劍樹　　泯消鑊湯
賦詩述章　　始稽夜月
交神感鬼　　和宮合商
邦家久昌　　祖燈普照

諸天擁護
及短及長
見今憶昔
裳嶺晨霜
音韻連續
聖壽無疆

延享二乙丑年臘月廿三日
現住普濟傳法沙門萬水碩鍊書
現住　寶泉傳法沙門大江明悟

徒弟　玄鍊
一元

諸檀中

心嚴傳性信士　　露散寶顯信女
香雲周林信女　　溪岳宗寒上座
曜月涼照比丘尼　　圓夢童女
碧雲玄樹信士　　默相妙然信女

儀萱　童女
禪水　賢友
落合六兵衛
井上権七工門
天野權兵衛内
加藤甚右衛門
加藤紋右工門
天野半兵衛
天野半七内
八王子横山宿
岩徳右工門
八王子八幡宿
穀屋長兵衛
立川村
板屋五右工門
戸高伊兵衛

別心祖傳信　女
眞空三郎三右工門
天野權兵衛娘
加藤佐五兵衛内
土方長右衛門
天野半七
中村忠左工門
上同所
塩澤九良右衛門
立川村
五十嵐五良右衛門

化主　孤室洋光上坐
桂岸宗林上坐
江都神田住
西村和泉守

鑄工

3 石橋碑

一、日野町横町寶泉寺

石橋敷石之記（上部横書）

夫要津之棟梁苦海之船筏者所以念群類到彼岸者也曰若蒼山之境區僅可數百步而東隔西畔村駅相接徑路相阻而林麓難辨狀類卑濕凝滑之地無値雨雪動則行人翻身折股者殆深尠矣蓋當田陸谷所今昔之者異動者乎予重深以来恒患之尚矣繇此一日憤然而築石於山之麓凡百步之外或敷施于境中溜滑之地以欲俾行人便于濂步也雖然用費浩多而非有偏而知者為能得就緒蓋當斯之時有大悲願寺某法印者平之祖越中之人也施新石橋架之門前之溪流今行人害逕迂而以聊欲報父母之深恩厥功尤可貴者也加旃曾者聆予之素願隨喜檀而沸已直未與予相倡戮力萬費用都濟者以近鄰之貧民將以俾予遂卒碩大之業焉然在黎山安也嗟乎起予

者也因遂命石工以從事矣來此鄉運吾黨之民風動翕然莫弗隨喜者殷勤徐岸或般上載負石設予也不靡出户而卒竣大業也從此自後狹隘卑溼之地頓為淨界之靈區茂倒滑翻身之患者此咸信施之所致而所以充行人絡繹迤邐之勞也所謂要津之棟梁苦海之船筏渚歟予也不勝感嘆聊為附信施磨貞落而志所其喜捨也淨貲者于以流于遠大也庶幾山門鎮靜内外慰安存者頓得福樂也者速登菩提覺場竟為之記

天保十一年庚子十一月　　現住峰寧巖謹誌

ウラニ

石橋寄附横澤村

大悲願寺二十八世寒寶法印老母

智貞尼

數石寄附當山

惣檀方中

石工　相州厚木町　宗次郎

二、日野町東光寺

石橋碑（拓書）

武州日野駅本郷東光寺有溝圮橋以為往來古昔栽槻樹于圮橋之西隅累也繁茂妨害車馬之用天明丙午年伐一樹而為板橋以代圮橋里老曰是非不朽之謀也願以石欵象成為然費因賈三樹以充費乞不足於隣里文化戊辰年石橋落成雖然石質疎惡不能久保天保年間終崩矣弘化丙午星邑人共成就院法印了慧勸力而遠求豆州之石為橋於是乎石質緻密以可期永久為叢夫耕耘之補亦不偉哉

弘化三龍集丙午秋九月建之

相州厚木　石工　秋本忠治郎重信

三日野町四ツ谷菜王院前

石橋碑（拓書）

夫要津之棟梁法界之船筏者為令郡生到波岸也今架橋於村中者今車馬易通行也其功無有差等矣越日野郷四家一村之人普発心願

以石橋架數箇處之矣流水欲令老弱男女無沒溺之患也既是各拾家財
以命石工今割巖衆人於此欽走而材石幼童饋食以□日成事矣嗚呼善
或厥功厥德彌□大子無有文盡治所請出治爾者少餒于彌也福履永
及爾之子孫也今秋荒野祖伸供養之序□石欲作後人之標榜而乞
文於予因而聊綴俚讀為碑以利焉遠傳無彊也

其銘曰　石橋數處架清月　渡馬波驢億萬年
鄭國子甚猶不及　仁心腕廉直無邊

維時嘉永三龍舍庚戌仲秋吉辰（右ワキ）

現住寶泉傳法比丘俊明誌焉（左ワキ）

四家村（墓盤ニ模書）

結論

日野町ノ金石文ノ大体ハ以上ノ如キモノデアルガ此等ノ外ニ種々多ク残ルモノト思ハルルガ而シテ以上ノモノニ止メ此等ニ付キテ一二私ノ考ヘシ事ヲ述ブレバ東光寺ノ奥住久治郎氏所藏ノ関東板碑

「文永」トアルモノニ対シ立川氏藏氏ハ西堂事蹟考ニ「大永」トセルガ、文永ナル文字ハ確実ニ文永ト讀ミ得ルモノデ之ヲシテ假ニ大永ナリトスルモ其ノ種字ヨリ見テモ大体文永頃ノ種字ハ其ノ書体長ク、後ニ至ル程ニ從ヒテ次第ニ短クナリ、其ノ周囲ニ有ル月輪モ古クハ単ニ唯種字ノ下ニ蓮瓣アルノミニテ時代ノ降ルニ從ヒ種字ノ周囲ニ月輪ヲ有シテハ葉ノ蓮花ノ上ニアリカカル所ヨリシテ見テモ必ズ文永ノ板碑ニ相違ナキモノト言フコトガ出来ル。又石田ノ石田寺所藏ノ舟底形板碑ニ付キテ見ルニ弥陀三尊ノ種字ナリシヲ残セリ、之ノ年号ナキモ、種字ノ書体ト云ヒ、石質ト云ヒ、又石ノ形体ト云ヒ、室町中期ノモノナリト見ハルルガ完全ナルモハ西多摩郡塩戸村綱代ノ綱代義道氏所藏ノ、之ハ永四年四月六日及ビ同村山田瑞雲寺附近ニテ発掘シ筆者所藏ノ永享七年六月二十四日ノ舟底形板碑ノ完全ナルモノヨリシテ見テモ全ク同様ナルモノニテ石碑研究上最モ貴重ナル資料ニシテ今迄筆者ノ見タルモノハ以上ノ三碑ノミデス。

以上ノ如クシテ見レバ金石文ハ考古学上最モ重要ナルモノニシテ単ニ遺物ノミニテハ計リガタキモ其ノ銘文又年号ニ從ヒテ其ノ如何ヲ知ルコトガ出来ルノデス。年号ニ付キテ一例ヲ挙グレバ江戸時代ト其ノ以前トノ干支ノ書キカニ付キテ見テモ江戸時代ニ至レバ干支ノ下ニ年ヲ書ケルガ如キ変化ヲ知リ又之ヲ以テ他ノモノヲ考察スルコトヲ得、カク金石文ハ重要ナルモノナレバ其ノ大部分ヲ調査スベキモノナルモ序説ニ於テ述ベシガ如ク理由ト時間ノ関係上ニ於テ維新以後ノモノハ之ヲ省略シ其ノ前モノヲアゲタデス。尚此等遺物其ノ物ニ付キハ銘文ヲ以テ交渉セルヨリ以上明確ナラシムルモノナルカ之ニ付キテハ寺院ノ項ニ於テ詳細ナル調査アルモノト見テ此処ニ於テハ省略ス。

御立調査ニ当リ浅学不才ナル私ガ其ノ未席ヲケガシ以上ノ如ク甚ダ長キ愚説ヲ述ベシガ其ノ一トシテ当ラ得ガルモノハ必ズ後輩諸兄ノ明確ナル且ツ詳細ナル調査ト御研究トニ依リテ復藏ナキ御批判ト御指導ヲ得ントスルノデス。

先覺者

郷土ノ先覺者

緒言

コヽニ言フ先覺者トハ果シテ如何ナル範圍ニ限定スルカ郷土教育調査委員ニ依ツテ示サレタル次ノ如ク限定シタ。

1. 郷土開發開拓ノ恩人
2. 郷土ノ生ミタル偉人

次ニ今一ツノ問題ガアル。ソレハ如何ナル程度ノ人物ヲ以ツテ前ニ項ノ該當者ト見ルカ。コレハ頗ル問題デアル。ソレ故本調査ハ人物ノ選定ニ於テモ萬全ヲ期シ難イノデアル。尚又調査ノ内容ハ委員ニ依ツテ示サレタル通リ次ノ範圍ニ依ル。

1. 郷土ノ恩人、同偉人ノ姓名
2. 事蹟及遺蹟ノ大要
3. 同上先覺者ノ郷土ニ及ボシタル影響
4. 其ノ他先覺者ニ關スル事項

尚郷土ヲ本校兒童ノ通學区域内ニ限定シタ事ヲモ附言シテ置ク。

新撰組近藤士方ヲ援ク

佐藤俊正

一、生立チ

佐藤氏トハ日野町ニ於ケル著姓デアル。慶長ノ頃ヨリ代々名主役ヲ勤メテ居ツタ。俊正ハ幼名ヲ内藏太、壯ナルニ及ビ彦五郎ト言ヒ後チ彦右衛門ト改メ晩年俊正ト稱シタ。文政十年九月十日ニ生レタノデアル。天保年間弱冠ニシテ野正トナリ、日野本郷ヲ管理シ村民ヲ愛撫善導シ大イニ村治ヲ圖ツタ。性来気慨アリテ義俠ニ富ミ世ヲ挙ノ時近藤周助邦武ノ門ニ入リテ劍ヲ學ビ、近藤勇トハ相弟子デアル

二、事蹟

安政元年正月幕府品川ヘ砲台ヲ築クニ當リ彼ハ率先シテ獻金シ以テ其ノ費ヲ助ケタ。又文久二年十二月悪疫流行シテ日野郷ニテモ之ニ罹リテ死スル者ガ頗ル多カツタ。此ノ時彼ハ進ンデ私財ヲ出シテ米穀ヲ惠ミ藥ヲ施シテ賑恤シタノデ、將軍ヨリ賞ヲ賜リテ其ノ德行ヲ賞ガレタ。

文久三年幕府全國ノ志士ヲ江戸ニ募ルヤ近藤勇、土方歳三等ナ教人ヲ勸誘シ之ニ衣類金品ヲ與ヘテ同行セシメタ。而シテ彼等在京中ハ門弟ヲ教授シ且ツ一切ノ後事ヲ引キ受ケテ之ヲ應援シ遂ニ二氏ヲシテ其ノ名ヲ揚ゲシメタノデアル。聊々新撰組隊長近藤勇ハ北多摩郡三鷹村ノ生レデ後恩師ノ天然理心流ノ劍客近藤邦武ニ見込マレテ養子トナリ、養父歿後ハ近藤第四世トシテ市ヶ谷ノ道場ヲ預リ俊正トハ義兄弟ノ杯ヲ交シ

月一回ハ必ズ江戸カラ来テ郷士ノ指導ニ當リ共ニ天下ヲ論ジ俊正トハ其ノ腕前何レ劣ラヌ伯仲ノ間ニアッタト言フ。尚又土方歳三ハ其ノ實姉ノブ子ガ俊正ノ妻デ義兄弟ノ間柄、近藤トハ同ジ邦武門下ノ關係ニアリ、進藤ヲ援ケテ勤王佐幕ニ身命ヲ賭サシメタ。尚又佐藤家ト親族關係ニアル南部五十余ヶ村ノ總名主小島韶齋ハ儒者トシテ識見高ク、佐藤俊正ト共ニ近藤、土方ノ指導者デアリ後援者デアッタ。彼ノ自刃間ク天下騒擾ノ時ニ際シテ近藤ガ土方ト謀リ尊王愛國ノタメニ決然タッテ京都ニ赴イタノハ小島佐藤ノ激勵ニ負フ所ガ多イ。殊ニ大義名分ノ事理ヲ明カニシ勤王或ハ佐幕ノ美名ニ隠レテ横行スル徒ヲ退ケ、眞ニ一死君恩ニ報ユルノ決意ヲナサシメタ思想的背景ハ小島翁デアッタ。學ニ於テハ小島、劍ニ於テハ近藤ト言フ密接ナ關係アリ。又佐藤、近藤、土方ノ三名デハ佐藤ガ一番年長デ近藤、土方ヲシテ後顧ノ憂ナカラシメタノハ此ノ人デアッタ。世人稱セスレバ近藤、土方ヲ以テ新撰組ノ首腦トシテ殺傷ヲ事トスル逆賊トナスガ、ソレハ大キナ誤リデ衷心燃ユルモノハ一ニ忠君愛國ノ念ノミデアリ、其ノ行動ハ義憤ノ發露デアッタ。佐藤、小島兩家ニハ今尚コレ等ノ事實ヲ証スル資料ガ多数保存セラレテ居リ、兩家ヘハ維新資料編纂官ガワザワザ出張シテ調査シタ程デアル。近藤ノ辞世ノ詩ニ曰ク

「快受電光三尺劍、只將一死報君恩」

ト又彼ガ居常金科玉條トシテ手ヲ出陽ノ詩ニ「既無靈異質、豈近痩當筆」

史尾吾生足深泥、亦國恩」

題畫亀苔巖　頼襄

以テ近藤、土方ノ何者タルカヲ知ルニ足ラン

慶應二年六月秩父郡ノ一寒村名栗谷カラ蜂起シタ数十人ノ暴民ハ諸村ニ放火シ財貨ヲ劫掠シ將ニ八王子ニ侵入セントス多摩川ノ北邊ニ襲来シタ。此ノ時俊正ハ代官江川太郎左衛門ノ命ニ依リ躍然トシテ直チニ豫ネテ取リ立テアリタル農兵及ビ鉄鎗ノ者ヲ率ヒテ直チニ築地河原ニ向ヒ暴徒ニナ五人ヲ仆シ五十余人ヲ捕ニシ一擧ニシテ暴民ヲ退ケ之ヲ鎮撫シテ功ガアッタ。幕府嘉シテ賜フニ白銀ヲ以テシ且ツ悴代迄苗字ヲ名乗ルコトヲ免サレタ。誠ニ家門ノ名譽ト言フベキデアル。同三年十二月十五日夜、八王子壺伊勢屋ナル旅館ニ止宿セル無頼ノ浪士七十三人ヲ命ニ依ッテ血戰シテ打捕リナドシテ當時其ノ饒名ヲ謳ハレタ。明治元年又タ官ヨリ多年公務ニ勉勵セシ廉ニ依ッテ賞ヲ賜ハッタ。

因ニ、、、當時多摩一帶ノ守護トシテ所謂八王子千人隊ナルモノガアッタガ、時ハ幕末尊王攘夷討幕ト天下擧ゲテ殺伐タル空気ノミナギレル時代デアル。幕府トシテハ王子千人隊ノミデハ枕ヲ高クスルコトガ出来ナカッタ。茲ニ於テ時ノ代官江川ハ農民ノ壯丁ヲ訓練シテ以テ非常時ニ備ヘントスル所謂農兵制度ヲ代々主張シ、千代田城ノ守備ニ缺クベカラザルモノトシテ数回ニ亘ッテ幕府ニ獻策シタノデアル。天下奇危機ヲハラムニ至ッテ幕府モ感ズル所アッテ代官江川英武ノ時ニ至ッテ始メテコレヲ許可シタ。茲ニ於テ代官江川ハ直チニ各村ノ名主ニ命ジテ壯丁ヲ集メ新式ノ訓練ニ着手シタ。然ルニ當時幕府ノ財政ハ頗ル窮乏ヲ告ゲテ居タノデ新式武器ヤ設備費ハ各村名主ノ獻金ニ依ッタ。江川ハ是等ノ農兵カラ代表者ヲ選ンデ、新式ノオランダ式操鎗術ヲ教ヘ又教官ヲ

派遣シ教練ノ指導ニ當ツタ。農兵組織ノ命アルヤ、日野宿ノ名主彦五郎（後俊正ト改ム）ハ率先シテ農兵ヲ組織シ多摩川堤防ヤ普門寺、寶泉寺等デ六十余人ノ屈強ノ一隊ヲ教練シ、操銃術ニ就イテハ春秋二回ニ代官カラ長澤、森田、太田等ノ教官ガ指導ノタメニ派遣サレタモノデアル。コノ農兵制度ハヤヽモスルバ猛リ立ツ多摩農民ノハケ口トシテモ役立ツト言ハレ、百姓モ鋤、鍬持ツ暇ニハ竹刀握ル武道カ能ノ時代ガ現出シタ。暴徒鎮壓ノ旗頭タル總名主彦五郎（俊正）ノ邸宅内ニハ道場ガ設ケラレ勇マシイ竹刀ノ音ノ絶エ間モナカツタ。

俊正ハ專ラ意ヲ地方ノ教化ニ用ヒ初メ近藤氏ヲ聘シテ劍道ヲ講ジテ居ツタガ、明治三年ノ頃有志ト謀リ現日野町北原欣淨寺ニ日野學ト稱スル塾舍ヲ起シ教科書、書籍ヲ貸與シテ儒者村岡笠城ヲ師トシテ專ラ漢學ヲ教授シ傍英語ヲ學バシメ旦宇野爲三郎氏ヲシテ筆算ノ教授ヲナサシメタ。是ガ即チ現日野尋常高等小學校ノ發祥デアル。

又明治七年ニハ彼ガ奔走ニ依リ神奈川縣立師範學校ヲ本町ニ設置シ寶泉寺ヲ假校舍ニ充當シタ。各地ヨリ來リ學ブ者多ク、大イニ土地發展ノ緒ニツイタガ惜イカナ其ノ後上司ノ施設方針ガ變リ僅カ四ケ月余リニシテハ王子ニ移轉シテシマツタ。彼ハ又近藤、土方兩勇士ノタメ高幡不動尊境内ニ一大碑ヲ建テヽ其ノ冥福ヲ祈リ、或ハ多摩川、淺川ノ堤ヲ築キテ水害ヲ絶ツ等公共ノタメニ盡シ關係町村ノ民ヲ喜バシメ、時ノ神奈川縣令カラ賞サレテ賜金ヲ受クル等彼ガ地方公共ノタメニ盡シタ功績ハ實ニ偉大ナルモノガアツタ。

後正ハ又頗ル敬神ノ念ニ篤ク、或ル時知人ノ傳手ヲ得テ畏多クモ有栖川宮殿下ヨリ「八坂社」ノ縮本並ニ「二品親王熾仁書」ノ紙本ノ揮毫ヲ賜リ彼ハイタク悦ビ早速コレヲ木板額ニ彫刻シテ氏神ノ大鳥居ニ掲ゲテ奉納シタ。其ノ後本額ハ風雨ノタメ損セシタメ更ニ石材ニ彫刻シテ掲ゲタコレガ現在ハ坂神社ノ大鳥居ニ掲ゲテアルトコロノモノデアル。又其ノ後明治十三年私財ヲ以テ神輿一台ヲ奉納シ以テ平常ノ敬神ト崇祖ノ念ヲ満タシタ。現在祭典ノ度毎ニ渡御セラルヽモノコソ後正献納ノソレデアル

其ノ結構ニ於テ技ニ於テ木工藝術ノ粋トモ言フベキモノデアル。神輿竣功ノ際ノ法樂ノ句ニ曰ク、「此ノ里ヲ鎮メ給フ御神ノ祭典ニ敬神ノ意ヲ盡ス氏子ノ丹心豈ムナシカランヤ、稲ノ穂ノ重ミモ露ノ恵ミカナ。」盛車

明治五年第九大区長ト為リテ三ナレケ村ヲ統ベ、ツイデナニ年南多摩郡長（初代）ニ昇進シテ善ク其ノ重任ヲ果シタ。翌々年六月職ヲ辞シテヨリ自郷ニ在リテ風月ヲ友トシ俳歌ヲ詠ジテ悠々自適シタ。彼ハ幼ヨリ風流ノ志アリテ俳諧ヲ好ミ春月庵盛車ト号シタノデアル。人皆宗匠ト仰ギ任句頗ル多イ。明治三十五年九月十七日中風症ヲ病ンデ歿シタ。時ニ七十六ヶ月

野町大昌寺ニ葬ツタ。法名ヲ後正院春饗盛車居士トイフ。辞世ニ

「音走ル鳴ヤソレモ佛ノ意カ」

三、明治天皇御小休ノ事

佐藤家ハ前記ノ通リ古クヨリ土地ノ名家デアツタガ、後正ノ代ニ至ツテ其ノ名殊ニ顯レ益々土地ニ重キヲナスニ至ツタ。斯クテ最多キ極ミナレド前後ニ四ニ亘リテ明治大帝ノ御小休場ノ榮ヲサヘ仰グニ至ツタ。即チ

明治十三年六月十六日東京御發輦山梨縣、三重縣、京都府へ御巡幸ノ御道スガラ畏レ多クモ仝家ヘ御小休遊サレタノデアツタ。又翌十四年二月二十日本郡多摩村連光寺向ヶ岡御獵場ヘ兎獵ニ行幸ノ折仝家迄御車ヲ寄セ賜ヒ御小休ノ後玄關前ニテ金華山ト呼ブ御愛馬ニ召サセ給ヒ獵場ヨリテ二里ノ行程ヲ鞭打タセ給フタノデアツタ。

新撰組參謀　土方歳三

一　生立ナ

幕末攘夷、討幕佐幕、維新ト目マグルシイ変轉極リナキ時代或ハ尊王愛國ノタメニ或ハ又佐幕ノタメニ活躍シタアノ新撰組ノ參謀土方歳三コソハ我ガ郷土ノ生ンダ偉人ノ一人デアル。彼ハ現日野町石田ノ人土方義諜ノ第四子トシテ生レ名ヲ義豊ト言ツタ。彼ハ生ルヽニ先立ツ数月ニシテ父ヲ失ヒ、又三才ニシテ母ニ別レ、專ラ兄喜六ノ手ニ鞠育サレタ。十一才ノ時江戸ニ出デテ商家ニ丁稚奉公ヲシタガ勤マラズ、幾バクモナクシテ郷ニカヘリ專ラ文武ニ志シ府中近藤邦武先生ノ門ニ入リ天然理心流ノ剣法ヲ學ビ、義兄日野町佐藤俊正ノ道場ニ出入シテ近藤勇ト兄弟ノ義ヲ結ビ共ニ其ノ技ヲ琢磨シタノデアル。年齢勇ニ後ルヽコトニ年、身ノ丈五尺五寸眉目秀麗ノ好男子デアツタ。

二　事蹟

彼ハ多ク書ヲ讀マズト雖モ將帥ノ器備リ用兵ノ法ハ蓋シ天性ニ出デタノデアル。文久三年新撰組ニ加盟シテ其ノ京都護衛ノ任ニ當ルヤ、歳三ハ常ニ帷幄ノ裡ニ謀ヲ運ラシ、勇ハ外ニ戰ツテ剛勇人ヲ畏レシメタノデ

ノ名ハ當時京阪ノ間ニ鳴リ響イタ。明治元年四月甲州勝沼ノ役ニ破レテ下總ノ流山ニ逃レタガ勇ノ縛ニ就クヤ、彼ハ切齒扼腕シテ俄ニ兵ヲ募リ下野ニ入リ更ニ宇都宮ニ入リテ戰ツタガ役後下野ノ一戰ニモロクモ破レテ會津ニ走リ函館ニ逃レコヽニ榎本武揚ト合シテ五稜廓ニ立籠ツタ。然ルニ官軍ノタメニ打破ラレ、彼ハ運命果敢ナクモ明治二年五月十一日銃丸ニ胴腹ヲ貫レテ馬上ニ殪レタ。「コレハ蓋シ彼ノ覺悟ノ上デアツタノデアル」此ノ時彼ハ叫ンデ言フ「我曩ニ勇ト共ニ死セザリシハ一度故主ノ寃ヲ雪ガントセシノミ。サレド今ハ止ミナン。萬一赦ニ遭フトモ何ノ面目アリテカ勇ニ地下ニ於テ見エンヤ」ト、誠ニ彼ガ生涯ヲ通ジテ勇ト相許シタル友情ノ極メテ濃ヤカナリシヲ知ルニ足ルノデアル。尾佐竹猛氏ハイフ「新撰組ノ部下ニハ博徒モアレバ破落漢モアリ、百姓モアルト謂フワケデ実ニ種々雜多ノ階級ヲ網羅シテヰルガ殊ニ近藤勇、土方歲三ノ如キハ多摩郡ノ農家カラ出タモノデ其ノ名ハ最モ顯ハレタ。幕府ノ爲メニ働イタノハ実ニ此ノ新撰組デアル。今日三多摩ガ依然タル東京府下ノ政治ノ中心タルモノ固ヨリ偶然デハナイ」ト。或ハ人ハ近藤、土方ハ所謂、三多摩壯士ノ元祖ダト稱シテヰル。今、土方歲三ノ生家ハ日野町石田ニアツテ朝夕彼ノ英靈ハ香花ニ埋レテヰル。尚彼ノ傳ニツキテハ高幡山金剛寺境内ノ碑文ニ精シク又佐藤俊宣翁ノ「古今備志錄」及鯨井氏ノ「多摩ノ腥風」ニ細敍サレテヰル。歲三ノ法名ハ歲進院殿誠山義豐大居士トイフノデアル。

三、郷土人心ノ受ケタル彼ノ感化

歲三ノ兄弟子近藤勇、義兄ノ佐藤俊宣等ト共ニ府中近藤邸武門下ニ武藝

ヲ學ブニ及デ尚武ノ風ハ忽然トシテ多摩一帶ノ地方ニ起リ鄉土ノ青年壯年達ハ鋤鍬ヲ取ル隙ヲ見付ケテハ竹刀ヲ握ルト言フ風トナリ、エイッヤッノ勇マシイ掛声ノ絶間トテハナカッタ。殊ニ我ガ日野町（當時日野宿）ハ其ノ中心デアッタノデアル。現ニ土方ノ出生地タル當町石田支部青年ノ間ニハ依然トシテ此ノ風ヲ在シ竹刀ヲ取ルコトヲ唯一ノ慰樂トシテ居ル。

俗謠ニマデ証ハレタ　天野清助

一、生立ち

「日野ノ四谷ニ過ギタルモノハ石ノ鳥居ニ天野サンレト俗謠ニマデ証ハレタ當時關東自由黨ノ大爺石坂昌孝翁ヲシテ「君爲人、居常苟モセズ、謹厚ヲ以テ聞エ、夙ニ國家ノ事ヲ憂ヘ鋭意此民ノ爲メニ盡ス。一鄉ノ士気是ニ於テ乎大イニ振フ矣」ト評セシメタル天野清助ハ天保十四年二月七日、日野町四谷ノ豪農ノ家ニ生レタ。清助ハ諱ニシテ幼名ヲ清十郎ト稱シ漢學ニ造詣頗ル深ク劍ヲ近藤勇ニ學ビ天然理心流ノ妙ヲ會得シ、繪畫俳諧ニモ趣味深カッタ。即チ畫ハ福島柳圃ノ門弟トシテ雲圃ト號シ、清老亭積益ハソノ俳號デアル

二、事蹟

彼ハ幼ニシテ才気卓犖、長ジテ謹嚴溫厚、文久四年家ヲ繼イデ父清助ヲ襲名シ、明治十二年ニ至ルマデ伍長、副戸長ニ歷任シ村治ノ爲メニ頗ル貢メタノデアル。明治十二年三月第一回ノ神奈川縣會議員ニ選バレテ功績大イニ擧ガリ後十七等官ニ進ゼラレタ。當時日野宿會ヲ開クニ當リ、之ガ組織及ビ方法ヲ指導シ、常ニ會議ノ揚ノ整理ノ任ニ當ッタ。コレ実ニ町村會

議ノ初メニシテ、今日日野町ガ郡中優良町村トシテ名ダタル所以ノモノ亦一ニコヽニ存スルノデアル。同十六年一月武藏野銀行取締役トナリテ、更ニ第三十六國立銀行取締役トナリテ頭取谷合彌七ト深交シ地方ノ金融ヲ圖リ、產業ノ發達ニ貢獻シタルハ皆ヨク人ノ知ル所デアル。ナホ其ニハ神奈川縣蠶業組合本部取締役ヲモ兼ネタガ、ヨク其ノ重任ヲ果シタコレヨリ先、板垣退助、中島信行等ノ自由黨組織アルヤ彼ハ石坂昌孝、森久保作藏、村野常右衛門等ト共ニ大イニ主義ノ鼓吹ニ務メ率先シテ地方ノ啓發ニ盡粹シタノデアル。

彼ハ天性義ニ固ク情ニ厚クシテ、ヨク私爭ヲ解キ、貧シキヲ救ヒ、苦ニ貧ヲ供シ公共ノ爲メニハ決シテ財ヲ惜シマナカツタ。殊ニ彼ハ常ニ言フ、「履キ違テ人ヲ起スベカラズ」ト、自ラ未明ニ蹶起シテ近隣合壁ヲ醒マシテ核穡ノ改善ヲ圖リ、勤儉質素ヲスヽメ專ラ村鄉ノ弊風ヲ矯メタ。果タセル哉四谷村ハコレヨリ隆々トシテ榮エマサニ平和ノ理想鄉ヲ出現シタノデアル。

彼ハ晩年一切ノ公職ヲ辭シテ、其ノ經驗セル所ヲ敍述セントセシガ惜ムベシ、清助日記ニ卷ヲ筆セシノミニテ明治二十九年一月十四日ニ暨ノ犯スル所トナリ、遂ニ僅カ五十四歲ヲ以テ北邙一片ノ烟ト化シタ。菩提寺寶泉寺ニ葬リ、法號ヲ清顯院仁山常德居士トイフノデアル。辭世ニ、

「仁ト義ニ今年モ暮レテシマヒケリ。」俳歌ノ巨人玉川屋祐翁ガ「積益ウシヲイタメル牛白草ニ「オシマル、草ヤ散リセク雪ノ松」。

1954131